

V 教科における中・高一貫教育の実践と課題

[国語科]

- § 1 本校国語科における中・高一貫教育
 - 1 読書指導
 - 2 表現指導
 - 3 入門期の古典指導
- § 2 教育研究活動
 - 1 教育研究会
 - 2 近畿附属連盟中・高研究部会
 - 3 全国附属連盟高等学校研究大会
 - 4 大阪教育大学関係・その他
 - 5 研究集録
- § 3 書道・書写
- § 4 今後の課題

[社会科]

- § 1 本校社会科における教育研究活動
 - 1 教育研究会
 - 2 近畿附属連盟中・高研究部会
 - 3 全国附属連盟高等学校研究大会
 - 4 その他
- § 2 地理実習
 - 1 高工地理実習要項
 - 2 実習レポート課題

[数学科]

- § 1 本校数学科における中・高一貫教育
- § 2 教育研究活動の概要
 - 1 教育研究会
 - 2 大阪教育大学数学会
 - 3 全国附属連盟高校部会教育研究会、近畿附属連盟中・高研究部会
- § 3 教育研究活動のあゆみ
 - 1 教育研究会
 - 2 大阪教育大学数学会
- § 4 今後の課題

[理科]

- § 1 理科教育
 - 1 物理
 - 2 化学
 - 3 生物
 - 4 地学
 - 5 総合
- § 2 理科教育研究のあゆみ
- § 3 野外実習
 - 1 地学実習
 - 2 碁観察
- § 4 理科教育とクラブ活動
 - 1 中学校
 - 2 高等学校

[音楽科]

- § 1 本校音楽科の指導方針及びカリキュラム
 - 1 指導方針
 - 2 カリキュラム
- § 2 中学校音楽会
 - 1 音楽会のあゆみ
 - 2 音楽会実施要項（昭和60年度プログラムより）
- § 3 教育研究活動
 - 1 教育研究会
 - 2 近畿附属連盟中・高研究部会
 - 3 全国附属連盟高校部会教育研究会
 - 4 研究集録
- § 4 教官の異動

[美術科]

- § 1 本校美術科における中・高一貫教育
 - 1 中・高の美術科教育カリキュラムの概要
- § 2 本校美術科教育研究のあゆみ
 - 1 創立から昭和51年3月まで
 - 2 昭和51年4月から55年8月まで
 - 3 昭和55年9月から現在まで
- § 3 問題点と課題

[保健体育科]

- § 1 本校保健体育科における中・高一貫教育
 - 1 保健体育科のねらい(目標)
 - 2 中・高6ヶ年の課題
- § 2 教育研究活動
 - 1 本校保健体育科研究活動のあゆみ
 - 2 現在の研究
- § 3 今後の課題

[技術家庭科]

- § 1 本校技術・家庭科における中・高一貫教育
 - 1 技術・家庭科教育の目標と概観
 - 2 本教科の内容
- § 2 実践
 - 1 履修領域
 - 2 領域別指導内容
 - 3 研究発表・研究集録
- § 3 今後の課題

[英語科]

- § 1 本校英語科における中・高一貫教育
- § 2 教育研究活動—この10年の歩み
- § 3 本校の英語科教育と生徒の諸活動
 - 1 中学校英語暗誦大会と校外暗誦大会
 - 2 実用英語検定テスト受験
 - 3 高校生英作文コンテスト等への参加
 - 4 海外留学
 - 5 クラブ活動
- § 4 今後の課題

国語

はじめに

昭和50年度の研究集録第18集では、中学校、高校の創立以来、昭和50年までの国語科の歩みがまとめられているが、今回はそれに続く51年から60年までの歩みを振り返ってみた。

昭和50年度の集録でも述べられているように、附属学校の使命としては、日々、教科指導の改良について研究を重ね、その成果を公開発表するということと、教員養成機関の一端を担うものとして教育実習生の指導に当たるという任務がある。

附中・高教官は、その使命にそって、中・高一貫教育を基本方針としつつ、この10年間もまたその道をさぐって来たのである。そして、後に記すように、毎年、本附属中・高校で行っている教育研究会（国語科はそのうちの隔年）を中心に、近附連、全附連、大阪教育大学関係、及びその他の研究会における研究授業や発表、また本附属中・高校で毎年編集している研究集録を通して、多くの批判を仰ぎ、教科指導改良のための資としている。

§ 1 本校国語科における中・高一貫教育

中・高一貫教育の基本として、まず、中学校段階において、国語の基礎・基本、即ち、言語事項における基礎事項、理解と表現の基礎技能及び学習方法の基本を身に付けさせることに重点を置く。また、中学校段階において国語嫌い、読書嫌い、作文嫌いになることのないよう、「楽しい国語教室」の構築にも意を注いでいる。概して言えば、よく読む、よく書く国語の基礎・基本の指導に重きを置き、高校でもその方針を継承して更に習熟深化させる方向である。習熟深化の方途として、幅広く教材を求め、より深い理解力と豊かな内容を持つ表現力を培うことには意を注いでいる。かかる取り組みの中から、中・高6ヶ年を通じて、「読書指導」、「表現指導」、「入門期の古典指導」を大きな柱として位置づけることになった。それぞれが中・高の連続を円滑にし、より指導効果を高める視点からのものであり、殊に、中3・高1段階を「古典入門期」として位置付け、教材精選、指導法に工夫を凝らしている。高校教官が毎年1～2時間中学の授業を担当することも定着しており、この点も一貫性を保つ力になっている。「読書指導」、「表現指導」、「入門期の古典指導」について、今までの取り組みの概要と具体的な事例を以下にまとめておきたい。

1 読書指導

読書は、国語の総合的な力を伸ばすのみでなく、人間形成の面でも、その影響力は大きいものがある。したがって、読書への契機づけ、読書の方法、読書による思考の拡がり、深化の喜びを知るなど、その指導には細心かつ大胆な工夫がなされなければならない。本校での工夫の一端をここに記しておこう。

(1) 図書館を利用した指導

本校の図書館は施設及び蔵書ともに比較的充実しており、授業時に生徒を図書館まで引率し、利用させることができる。その後の図書館利用を促す一斉自由読書などは非常に効果的である。それだけでなく、グループに分け、各グループに課題を与えての調査探索学習なども、図書館を利用すれば、幅広い知識とともに、新しい種類の読書への興味を持たせることができる。後に示す「古典読書」の取り組みも、学期初めの3週間(週1時間)、図書館で古典を選び、授業に結び付けたものである。

(2) 国語科文庫

図書館蔵書とは別に、国語科独自で、授業関連図書を所有している。一種類につき50冊ずつ用意し、教室での一斉読書に利用したり、要望に応じての個人貸し出しを行っている。同一の本を一斉に読むというのは、快い緊張感を生徒たちに与えるようである。更に感想を述べ合うなど、共通の話題をもつくることができ、それがきっかけとなって、図書館へ足を運ぶものもあり、読書への興味付けとして効果的である。現在設置している書物名を次に列記しておく。

- 『肥後の石工』今西祐行(実業之日本社)
『君たちの天分を生かそう』松田道雄(筑摩書房)
『星の王子さま』サン・テグジュペリ、内藤灌訳(岩波少年文庫)
『一房の葡萄他七編』有島武郎(角川文庫)
『どくとるマンボウ昆虫記』北杜夫(学研)
『こころの詩集』小海永二編(学研)
『父帰る・思ひの彼方に他七編』菊池寛(旺文社文庫)
『キュリー夫人』松岡洋子(旺文社文庫)
『耳なし芳一・うた時計・夕鶴・銀河鉄道の夜』小泉八雲・新美南吉・木下順二
宮沢賢治(学研)
『五體字類』(西東書房)
『新選古語辞典』中田祝夫編(小学館)
『人類最後の日』宮脇昭(ちくま少年図書館)
『私の読書法』大内兵衛・茅誠司他(岩波新書)
『富嶽百景・走れメロス他八編』太宰治(岩波文庫)
『何とも知らない未来に』大江健三郎選(集英社文庫)
『「自分で考える」ということ』澤瀉久敬(角川文庫)
『羅生門・鼻・芋粥』芥川龍之介(角川文庫)

(3) 「読書感想文」集の発行

本校中学校では、図書部・国語科協賛のもとに、毎年夏季休暇中に、読書感想文を一編まとめてることを生徒に課している。これは全校的な規模で行っている。つまり各教科から学年ごとに推薦図書を出してもらい、それらを課題図書とするわけである。提出された感想文は、校内感想文コンクールとして、推薦者が作品を評価し、最終的には国語科教官が合議し、学年ごとに優秀作を選び



冊子としてまとめている。昭和38年以来発行されており、昭和60年度分で第23集となつた。この冊子が、生徒たちにとって読書入門書ともなつてゐる。この感想文集は国語科だけでなく、全教官による読書指導の成果であるといえよう。今後もこの特色長所をさらに伸ばせるように、充実させていきたいと考えている。紙面の都合で、推薦図書の中で、国語科のものだけをここに紹介しておきたい。

中学校読書感想文推薦図書（国語科推薦年度 ○印）

[中学校1年生]	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85
	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
二十四の瞳（壹井栄）			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
君たちの天分を生かそう（松）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
次郎物語（下村湖入）												○	○	○	○							○
十五少年漂流記（ヴェルヌ）					○					○	○	○	○	○	○							
海の日曜日（今江祥智）					○	○	○	○	○	○	○											
夕焼けの記憶（大野允子）												○										
銀色ラッコの涙（岡野薰子）												○										
天の園（六部作）（打木村治）												○										
めっちゃ医者伝（吉村昭）												○	○									
ちょうちん屋のままっ子（斎）												○										
日本民話選（木下順二）										○	○	○	○									
ジャン・バルジャン物語（ビ）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○											
赤毛のアン（モンゴメリー）	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○											
うみねこの空（いぬいとみこ）										○												
芥川龍之介集										○												
ヴィーチャと学校友だち									○													
シラサギ物語（岩崎京子）								○														
エイブ・リンクーン（吉野）					○	○	○	○														
野口英世（高山毅）					○	○																
宝島（スティーブンソン）					○	○																
君たちはどう生きるか（吉野）					○	○																
風の又三郎（宮沢賢治）												○										
路傍の石（山本有三）												○	○	○	○							
野性の叫び（ロンドン）												○										
いっせいに花咲く街（赤座）												○	○									
肥後の石工（今西祐行）												○	○	○								
吉備津の釜うらない（上田秋成）												○										
〈雨月ものがたり〉																						
牛をつないだつぱきの木（新美南吉）												○										
大関松三郎詩集（山茅）（寒川道夫）												○										
兎の眼（灰谷健次郎）												○										
あすなろ物語（井上靖）													○	○								
太陽の子（灰谷健次郎）													○	○								

[中学校1年生]	64年	65年	66年	67年	68年	69年	70年	71年	72年	73年	74年	75年	76年	77年	78年	79年	80年	81年	82年	83年	84年	85年
ガラスのうさぎ (高木敏子)																	○	○			○	
わたしの生涯 (ヘレン・ケラー)																	○					
杜子春 (芥川龍之介)																		○				
どくとるマンボウ昆虫記(北杜夫)																		○				
塩狩峰 (三浦綾子)																			○	○	○	
しろばんば (井上靖)																		○	○	○		
筏舟日記 (三浦哲郎)																		○				
生きとし生けるもの (山本有三)																		○				
夏の花・心願の国 (原民喜)																		○				
蜘蛛の糸・地獄変 (芥川龍之介)																		○				
われら動物みな兄弟 (畠正憲)																		○				
ぼくがぼくであること (山中恒)																		○				
どくとるマンボウ航海記(北杜夫)																			○			
鼻 (芥川龍之介)																			○			
百色のクレヨン (滝沢忠義)																			○			

[中学校2年生]	64年	65年	66年	67年	68年	69年	70年	71年	72年	73年	74年	75年	76年	77年	78年	79年	80年	81年	82年	83年	84年	85年
坊っちゃん (夏目漱石)			○	○							○						○	○				
星の王子さま (テグジュペリ)					○	○	○	○			○	○	○									
肥後の石工 (今西祐行)												○	○	○								
父帰る・恩讐の彼方に他 (菊)											○	○	○	○	○		○		○			
三国志 (全三巻) (吉川)									○		○	○										
いっせいに花咲く街 (赤座)												○										
中央アジア探検記 (ス)											○											
風の又三郎 (宮沢賢治)											○											
動物文学集 (1~3) (戸川)											○											
路傍の石 (山本有三)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○											
黒部ダム物語 (前川康男)											○											
小さき者へ(生まれ出づる悩み)																○	○	○				
シラサギ物語 (岩崎京子)						○	○		○	○	○											
日本語の年輪 (大野晋)																○						
あすなろ物語 (井上靖)											○	○	○									
コタンの口笛 (石森延男)							○	○	○	○												
キューポラのある街 (早船)							○								○	○	○					
アンネの日記 (アンネ)								○	○	○												
ビルマの豊琴 (竹山道雄)							○	○							○							
人間の尊さを守ろう (吉野)						○	○	○	○													
アルプスの山の少女 (スピリ)						○	○	○														
二十四の瞳 (壹井栄)						○	○	○														
愛の学校クオレ(アミーチス)						○	○	○														

[中学校2年生]	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85
軍記名作集（福田清人）			○																			
T N君の伝記（なだ いなだ）															○							
富士山頂（新田次郎）																○						
琢木歌集（久保田正文編）																○						
にっぽん三銃士（上・下）（五木寛之）																○						
心の底をのぞいたら（なだ いなだ）																○						
わたしの少女時代（池田理代子他）															○							
人類最後の日（宮脇昭）																○						
山椒大夫（森鷗外）																○						
赤い子馬（スタインベック）																○○						
どくとるマンボウ昆虫記（北杜夫）																○						
文車日記—私の古典散歩—（田辺聖子）																○	○○					
ふたりのイーダ（松谷みよ子）																	○					
おとうと（幸田文）																	○					
さぶ（山本周五郎）																	○○					
夜と霧の隅で（北杜夫）																	○					
少年たちの戦場（高井有一）																	○					
斜陽（太宰治）																		○				
風林火山（井上靖）																		○				
ぼくがぼくであること（山中恒）																		○				
百色のクレヨン（滝沢忠義）																		○				
熊嵐（吉村昭）																		○				
ひかりごけ（武田泰淳）																		○				
白い人・黄色い人（遠藤周作）																		○				
孤高の人（全二冊）（新田次郎）																		○				
人生論（トルストイ）																		○				

[中学校3年生]	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85
チボ一家のジャック（マ）	○○	○○○																				
論語物語・聖書物語（下村）		○○○																				
ロマン・ロラン名作集（ロ）			○																			
アンネの日記（アンネ）	○○○																					
コタンの口笛（石森延男）	○○																					
出家とその弟子（倉田百三）														○	○○							
さぶ（山本周五郎）														○								
胡椒息子（獅子文六）														○								
ドン松五郎の生活（井上ひ）														○								
若ものよ君らは（丸木政臣）														○								
おっちょこちょ医（なだ）														○								
ある町の高い煙突（新田次郎）														○								

[中学校3年生]	64年	65年	66年	67年	68年	69年	70年	71年	72年	73年	74年	75年	76年	77年	78年	79年	80年	81年	82年	83年	84年	85年
浦上の旅人たち（今西祐行）															○							
万葉のふるきと（清原和義）															○○							
あすなろ物語（井上靖）															○○							
語源散策（岩瀬悦太郎）															○							
ことばの歳時記（金田一春彦）															○							
どくとるマンボウ青春記（北）															○							
あすなろ物語・しろばんば											○○			○○								
魯迅作品集一（魯迅）															○							
三国志（全三卷）（吉川）															○		○○					
青い山脈（石坂洋次郎）															○							
姿三四郎（全三卷）（富田）															○							
夕鶴・彦市ばなし（木下順二）											○○			○								
山椒太夫・高瀬舟（森鷗外）															○			○				
生れ出づる悩み他（有島武郎）												○○○										
山椒魚（井伏鱒二）															○							
樽山節考（深沢七郎）															○		○○○○○	○				
第四間永期（安部公房）															○							
破戒（島崎藤村）		○	○	○	○	○	○	○			○○										○	
ユタとふしぎな仲間たち（三）															○							
次郎物語（全三巻）（下村）		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○					
父帰る・恩讐の彼方に（菊地）											○○○○○											
恋愛なんてやめておけ（松田）											○											
キュリー夫人（松岡洋子）											○○○											
たけくらべ（樋口一葉）																	○					
黒い雨（井伏鱒二）																	○○○		○			
あ・野麦峠（山本茂実）															○							
天平の甍（井上靖）																	○					
五重塔（幸田露伴）																	○					
野菊の墓（伊藤左千夫）																	○					
敦煌（井上靖）																	○					
人生論ノート（三木清）																	○	○				
苦海淨土（石牟礼道子）																	○					
人とつき合う法（河盛好藏）																	○					
命ある日（芦沢光治良）																	○					
阿Q正伝（魯迅）																	○					
海と毒薬（達藤周作）																	○					
こころ（夏目漱石）																	○					
変身（カフカ）																	○					
徒然草（吉田兼好）																	○					
風濤（井上靖）																		○				

[中学校3年生]	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	
百色のクレヨン (滝沢忠義)																		○					
ジョニーは戦場へ行った(トランボ)																			○				
ロバータさあ歩きましょう(佐々木たづ)																			○				
長距離走者の孤独 (シリートー)																			○				
桜守 (水上勉)																			○				
豆腐屋の四季 (松下竜一)																			○				

高校では昭和44年まで、図書部・国語科が協力し、生徒へのアンケート・教官からの推薦などをもとにして、推薦図書一覧を作っていたが、昭和45年、それらを総括し精選して『読書の手引』なる冊子にまとめた。高校3年間に読むべき本を掲げておりゆくゆくは本校卒業生が、最低線共通の読書基盤を持つことをねらいとしたものであった。ちなみにこの冊子の意図をその〔はしがき〕に見ると次の通りである。

書物を読むということは、人と出会うということである。書物のページを繰ることによって、漱石の「三四郎」と出会い、芥川の「禅智内供」と出会い、ドストエフスキイの「ラスコーリニコフ」と出会い。

私達は現実の日常生活のなかで多くの人と出会う。しかし、彼等の一人一人と真剣な人生の対話をかわすことはできない。何年も付きあっていても、平凡な挨拶を交わすにとどまる人の何と多いことか。

私達は、日常生活で出会う人達のかわりに、書物の中の人々と語る。ラスコーリニコフは、老婆に斧をふりかざした自分について語り、大地にひれふして許しをこう自分を伝える。美禰子に若い愛を覚える三四郎を私達は理解し、自分の内側に三四郎のいることを知る。古来の賢者の把握した人間模様を通じて私達は人生を知り、人と出会い、そして自分の経験することのできない、第二の人生を辿ることができる。

この「読書の手引」は、生徒諸君へのアンケートと、先生方に推薦していただいたものとをもとにして作った。つまり、よく読まれているものと、価値の高いものとの両方から考えて作ったものである。内容は、日本の小説を中心にし、外国の作品、文語体で書かれたもの、詩歌、評論などについては、できるだけ数をおさえた。評論などで同系統のものを挙げてあるのは、それら全部を読むというのではなく、それらの一冊を読んでもらいたいという意味である。従って、内外の名作のすべてを網羅してあるというのではなく、現在のあなた方が読むのに適しているだろうと思われるものを対象としている。

高校時代は、精読と速読の両方の力を身に付けるときである。いたずらに読んだ本の冊数を誇るべきではないが、年間30冊程度の本は読んでもらいたい。多読してゆくなかで、長く心に残る人物に、一生読み続けてゆくことのできる作家に出会うことができるだろう。授業で取り上げられる作品も多く、この「読書の手引」の中にはいろいろいるだろう。この「読書の手引」をもとにして、更に一層自分の世界を広げ深めていってもらいたい。

昭和48年以後は、毎年、高校図書委員会が「図書館ガイド」を作り、新刊案内推薦図書等を掲載している。その他に、毎年1回の図書新聞の発行、昭和51年以後発行を続けている「歳星」(「図書館の活動」の項参照)も読書指導の支えとなっている。ただ「図書館の活動」の項でも述べている通り、図書館の本の貸出冊数はこの10年間で

急激に下降している。国語の授業を図書館での一斉読書にするなどの取り組みもあって、わずかに上昇している学年もあるが、全体としては低迷期にあると言つてよい。

読書指導の1つの資料として得ているものに昭和51年の読書調査がある。本校高1から高3生徒を対象に行ったもので、それぞれ過去に読んだもののうち、特に印象深く覚えているものを挙げさせ、その集計をもとに、数の多いものから順に示したものである。

・特に印象深く覚えている図書（読んだ時期とその作品）

〈中1〉

- ①坊っちゃん
- ②次郎物語
- ③路傍の石
- ④どくとる（シリーズ）
- ⑤星の王子さま
- ⑥破戒
- ⑦車輪の下
- ⑧嵐が丘
- ⑨ジェーン・エア
- ⑩赤毛のアン
- ⑪シャーロック・ホームズ

〈中2〉

- ①老人と海
- ②走れメロス
- ③友情
- ④路傍の石
- ⑤坊っちゃん
- ⑥日本沈没
- ⑦次郎物語
- ⑧どくとる（シリーズ）
- ⑨星の王子さま
- ⑩しろばんば
- ⑪車輪の下
- ⑫日本語の年輪

〈中3〉

- ①どくとる（シリーズ）
- ②舞姫
- ③あすなろ物語
- ④老人と海
- ⑤城の崎にて
- ⑥高瀬舟
- ⑦こころ
- ⑧友情
- ⑨氷壁
- ⑩海と毒薬
- ⑪怒りの葡萄
- ⑫青春の門
- ⑬異邦人
- ⑭三四郎
- ⑮車輪の下
- ⑯しろばんば

〈高1〉

- ①三国志
- ②青春の蹉跌
- ③こころ
- ④自由と規律
- ⑤青春の門
- ⑥沈黙
- ⑦変身
- ⑧0.ヘンリー短編集
- ⑨孤高の人
- ⑩ジェーン・エア
- ⑪女の一生
- ⑫吾輩は猫である
- ⑬水滸伝
- ⑭異邦人

〈高2〉

- ①それから
- ②犬神家の一族
- ③限りなく透明に近いブルー
- ④水滸伝
- ⑤無の思想
- ⑥青春の蹉跌
- ⑦こころ
- ⑧青春の門
- ⑨三四郎
- ⑩壁
- ⑪第四間氷期
- ⑫暗夜行路
- ⑬春琴抄
- ⑭人生論ノート

〈高3〉

- ①パニック
- ②文学入門
- ③沈黙
- ④北の岬
- ⑤山月記
- ⑥火の鳥
- ⑦李陵
- ⑧限りなく透明に近いブルー
- ⑨源氏物語
- ⑩金閣寺
- ⑪舞姫
- ⑫されどわれらが日々
- ⑬犬神家の一族
- ⑭無常といふこと

⑨氷壁	⑤金閣寺	⑦堕落論
⑨ゼロの焦点	⑤赤頭巾ちゃん気をつけて	⑦われら戦友たち
	⑥されどわれらが日々	⑦明治精神史

これらのうち、「日本沈没」「ゼロの焦点」「犬神家の一族」等の数例を除いてほとんどが授業、推薦図書等で取り上げられたものである。

(4) 中・高 読書指導の系統化

読書指導を中・高一貫の重要な柱として取り組むため、昭和52年には中・高読書指導の系統化を試みた。今日まで継続しているものではないが、その意図は昭和45年の「読書の手引」作成の場合と軌を同じくし、本附中・高生の共通した読書基盤を築くためであり、読書指導の足跡を示すために挙げておきたい。尚、この系統化図書の選定に際しては各教科書の他、次のものを参考資料としている。

- ① 新選100冊の本(岩波文庫、昭和52年現在)
- ② 岩波文庫50年間ベストセラー(昭和52年4月現在)
- ③ 全国学校図書館協議会選定 必読図書リスト(昭和52年6月現在)
- ④ 中学校国語科文庫50冊本(本校昭和52年現在)
- ⑤ ベストセラーブック(読売新聞社会部編、昭和52年8月現在)

基本系列

		作 品	作者・訳者(備考)
中	1	ジャン・バルジャン物語 二十四の瞳 君たちの天分を生かそう	ピクトル・ユーゴー(豊島与志雄訳) 壹井 栄 松田道雄
		星の王子さま 路傍の石 アンネの日記	サン・テグジュペリ(内藤潔訳) 山本有三 アンネ・フランク(皆藤幸藏訳)
		あすなろ物語 破戒 生れ出づる悩み	井上 靖 島崎藤村 有島武郎
	2	(外国文学) こころ 自由と規律	(罪と罰、車輪の下) 夏目漱石 池田 潔(啓蒙書)
		(外国文学) 蟹工船 無の思想	(ジャン・クリストフ、三国志) 小林多喜二 森三樹三郎
		(明治文学) 評論	(舞姫) (考えるヒント、文学入門)
	3		

図書を限定して教材化することは、実は広範な読書を目指す立場からは逆行するものかもしれない。読書本来のあり方からもある種の危険性を含んでいる。しかし、今このような配列を試みる主たる目標は、少なくともこれだけは読ましておきたいとい

うことであり、この読書体験をもとに広範な読書への発展を期することにある。教科書教材を主とする前提に立てばあくまで発展教材の位置にとどまるであろうが、国語科本来の主たる目標からすれば単なる発展教材とはいえない。補足的・付属的な位置ではなく、主たる柱の一本としての位置を確認しておきたい。

これらの系統化に関わる問題点・留意点は次の通りである。

1. 各学年3冊を目標として指導する。
2. 教科書教材との有機的な配列を工夫する。
3. 文学・古典文学・非文学の三分野を配慮し、偏りを避ける。
4. 授業に組み込んだ形で全編を扱い、長文読解の基本を指導する。
5. 選定図書は限定しないが、指導案、指導経過等を記録し、資料を充実させる。
6. 指導記録・資料は中・高を通した指導者側で確認しておく。

要点の1つは、各人各様、好みあるいは得意な分野での読書指導はそれはそれで意義があり、事実そうあって然るべきであるが、教科指導及び中・高を通した視点においては教科内、全指導者の共通の認識が望ましいことである。系統化を目指す主要な目的もその点にある。教科書が一つのレールとするなら、どの駅で何を積み、何を運んだかの確認を通して正常な運行を目指したいのである。

2 表現指導

表現力の育成も本校における国語科の重要な柱であり、昭和53年より4年間にわたって中・高国語科の研究テーマとし、教育研究会等で発表したのもその証左である。先述の、中学校における、「読書感想文」集も表現指導の一端を担うものであり、概ね中学校では、作文用紙の使い方から始めて、身近な題材を生かした作文、読書感想文等による表現力の基礎指導に力点を置き、同時に、書くことに抵抗を感じさせない、所謂作文嫌いにさせない指導法も工夫している。例えば、昭和48年49年の「パロディ百人一首カルタ作り」（中1・

「課題プリント」による作文

〈課題プリント〉

次の留意点や参考図及び「文の内容と解説」に基づいて「麦打ち」と題する文章を書きなさい。
〈留意点〉

- (1) 「親はかえし（土を埋め起し）、子はくれうって（土を碎いて）、広いたんぼの麦まき」をした。その麦が実を結んだ。「風に吹かれてなま土踏んで、今日も朝から精出して」働いたのです。そして、「うち中が仲良くかせいだ」から「土が審美を下さる」のです。このような農家の人々のことを想像しておこう。
- (2) 収穫の平和な喜びと、田園生活の言い知れない和やかさ、それがよく写し出されるように書きなさい。
- (3) 「麦打ち」の有様や働いている人々の心持ちを想像し、それを生き生きと伝える表現を工夫して書きなさい。

〈参考〉

次の図を参考にして「麦打ち」の様子を想像しなさい。



〈文の内容と解説〉

（1）の文

- 正一の家の麦打ち。娘子三人水入らずの労働である。仕事がずんずんはかどってゆく様子と、子に対する親の心持ちはよく表れている。
- 「正一も大分役に立つようになったなあ。」と言う父と、「ほんとうにそうですねえ。おかげで今日中には大がい片付きます。」と言う会話がいかにも楽しげである。

2)、「4コマ漫画をもとにした要約文作り」(中1),「『附中新書』の作成」「私の辞書活用法」(中1),「古文作り—古文を真似る—」(中2)(以上、昭和58年、日本国語教育学会：大阪大会で発表)などがそれである。また同年度、中3、高2で行った「課題プリントによる作文」も、作文の内容を手引きしながら、楽しく、しかも生き生きとした表現を意識させたうえでの作文指導であった。その概要を上に示しておく。

(授業展開及び教材「麦打ち」本文等は省く)。

高校では、書く回数を増やして作文の習慣化を図ったり、長い文章(例『三国志』(吉川英治著)全巻のレポートや課題作文(例「三国志における人物像」)が書けること豊かな内容を持つ文章、確たる論拠を持った意見文が書けること、などに力を注いでいる。例えば年間18回作文(51年度高1)、一つの題について意見を交換した後での課題作文(昭和56年度高2)、同一課題で第三次まで作文を書き、その都度新たな題材を加えて内容を豊かにする作文(昭和57年度高2)などである。一例を上に示しておく。

同年(57年)には文種別作文指導の試みをまとめ、現代文、古文、漢文それぞれの指導事例も示した。現代文は『伝記・正岡子規』(松山市教育委員会編)を教材とした作文、古文は『徒然草』(第12、117、170段)、芭蕉の俳句、漢文は『孟子』の一章、『説難』の一章、を教材とし、その基本指導を次のようにしたものであった。

〈基本指導〉



- (注) ① 作品の筋を正しく把握しておく。
 ② 印象深い箇所・共感する箇所・疑問のある箇所を引用できるようにしておく。

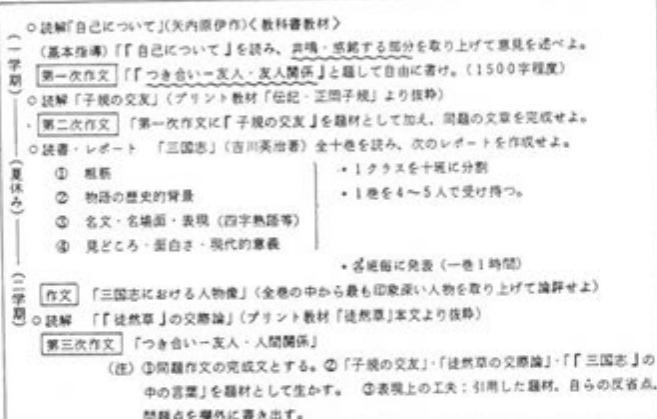
- 「きんきんきん、きんきんきん。」という吏を打つ音から書き起こしてあり、いかにも気持ちのよい穏やかな書き出しだる。
- 「どこからかにぎやかな歌が聞こえて来る。」と結んで、田舎の平和な、楽しい生活の有様をよく表している。

(二) の文

- 「正一のうちの人達に手伝いもまじって、七八人の男や女」が楽しく吏打ちをしている様子が描かれている。
- 「女たち」(赤いたさきを握っている)、「五平じいさん」(ひょうきん者)、「金次叔父さん」(分家、軍隊帰り)など、一人一人の描写が巧みで、それぞれの人物がはっきり分かる。
- 最後に、庭の隅の鳳仙花と、こぼれ葉を食う蝶を書いて、一層この文を鮮やかで、生き生きとさせている。

- (注) (1) 上記の「内容と解説」に従って二部構成の文を書きなさい。(一)(二)とも四百~五百字。
 (2) 原稿用紙の下欄〔表現上、工夫した部分〕には、自分で特に工夫した部分を書き抜きなさい。

(授業展開及び教材「麦打ち」本文等は省く)。



同年(57年)には文種別作文指導の試みをまとめ、現代文、古文、漢文それぞれの指導事例も示した。現代文は『伝記・正岡子規』(松山市教育委員会編)を教材とした作文、古文は『徒然草』(第12、117、170段)、芭蕉の俳句、漢文は『孟子』の一章、『説難』の一章、を教材とし、その基本指導を次のようにしたものであった。

〈基本指導〉

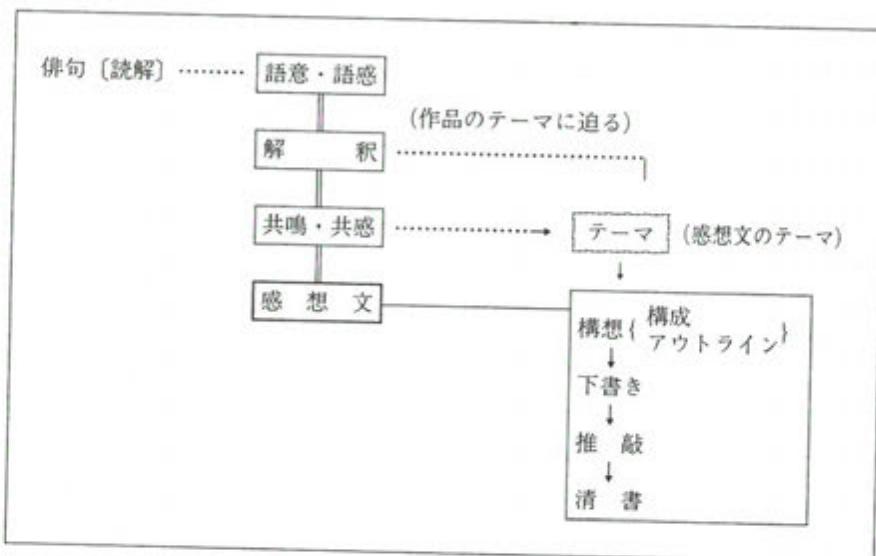


- (注) ① 作品の筋を正しく把握しておく。
 ② 印象深い箇所・共感する箇所・疑問のある箇所を引用できるようにしておく。

- ③ テーマ（主題）に迫るようにする。
- ④ 題材を選び、構想を練る。
- ⑤ 「である」体を基本とする。
- ⑥ 表現上の工夫（反語・疑問・倒置・省略・符号等）をする。
- ⑦ 推敲。

指導事例として、俳句感想文の指導の概略を示すと次の通りである。尚、この指導は昭和60年度、中3生徒にも試みている。

(ア) 俳句感想文の書き方（基本指導）



(イ) 感想文の内容（基本指導）

- | |
|---|
| (1) 主観的因素 |
| ①直観的印象 ②鋭い語感 ③人生観・思想 ④独創的な鑑賞・批評・意見 |
| (2) 客観的因素 |
| ①語意・正確な解釈 ②作者について ③出典について ④作品の背景(時代・場所・時) |
| (3) 表現上の注意 |
| ①用字用語 正確・丁寧 |
| ②表現上の工夫—⑦簡潔な文 ⑧明確な段落分け ⑨効果的な引用 ⑩文体統一(デルア体) |
| ④独創性(造語・独自の表現) ⑤効果的な表現技巧(現在時制—臨場感を出す・反語、疑問、倒置・中止法等を用いる・同一内容を言い換えて強調する・効果的な符号を用いる(！……／・？・：など)) |

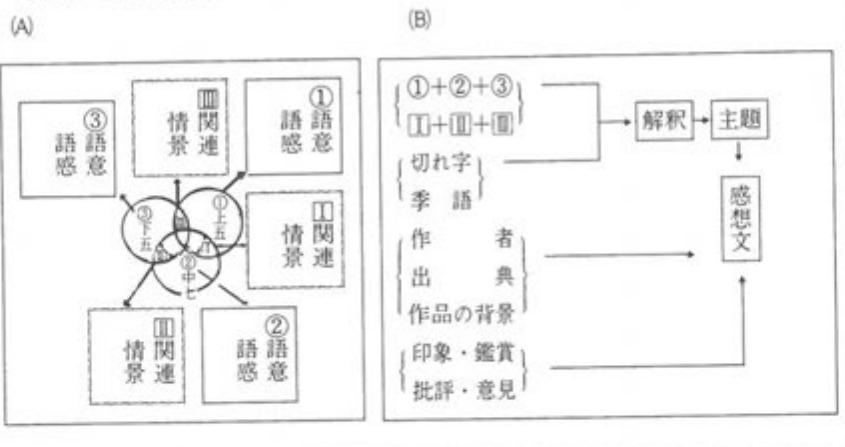
(ウ) 書く手順

〈作文メモ〉

- | |
|----------------------------------|
| (1) 語意・語感を把握する。 |
| (2) 語句相互の関連の中で意味を考える。 |
| (上五・中七・下五、それぞれの間の関連において情景を把握する)。 |

- (3) 一句全体の主題を探る。
- (4) (1)～(3)を基に、解釈する。
- (5) 作者・出典・作品の背景を調べる。
- (6) 解釈を基にしながら、作者・出典・作品の背景などに触れ、一句のテーマに迫る内容で文章を完成する。

〈作文メモ〉 図示説明



(工) 指導過程

- (A) ①(上五) ②(中七), ③(下五), それぞれ語意・語感を書く (発表・板書・メモ)
- (B) ④(①↔②), ⑤(②↔③), ⑥(③↔④), それぞれ相互関連の中で情景をつかむ。
- (C) 切れ字の意味。 (D) 季語・季感。 (E) 主題を探る。 (F) 作者・出典・作品。
- (G) 主題を述べるにふさわしい言葉 (語句) を①～③, ④～⑥のメモの中から選ぶ。
- (H) 解釈を基にしながら、作者・出典・作品の背景などに触れ、主題に迫る形で文章を完成する。

(エ) 実例指導 (基本指導)

◎「夏草や兵どもが夢の跡」

(指導過程)

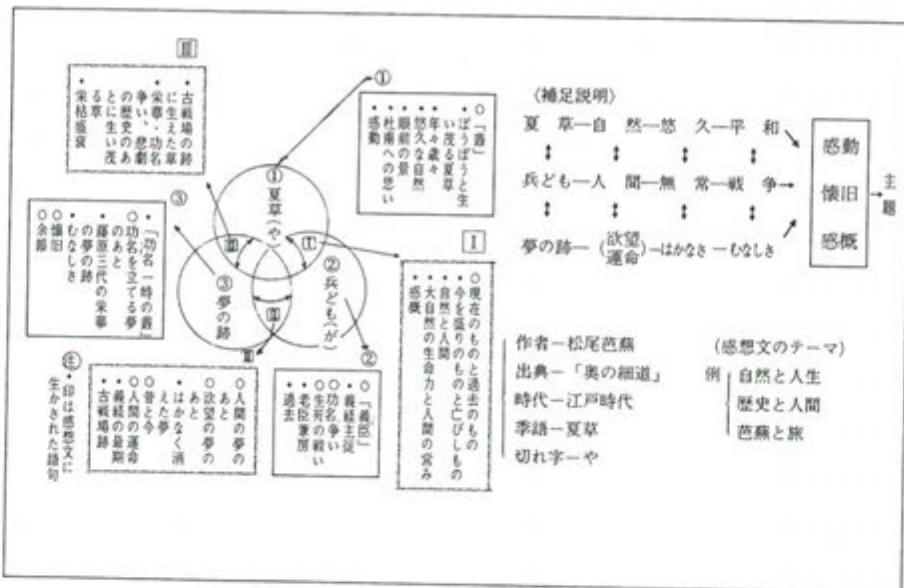
(補助プリント)

三代の榮耀一睡の中ににして、大門の跡は一里こなたにあり、秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。先づ高館にのぼれば、北上川南部より流れる大河なり、衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡等が旧跡は、衣が関を隔てて南部口をきし堅め、夷を防ぐと見えたり。猪も義臣すぐって此の城にこもり、功名一時の巣となる。国破れて山河あり、城春にして草春みたりと、笠うち敷きて時の移るまで泪を落とし侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花や兼房みゆる白毛哉

〈作文メモ〉 (板書)



〈構想〉

- | | |
|-----------------------------|--|
| 序論 | 芭蕉の思いはどのようなものであったのか。(感想文のテーマ設定) |
| | 具体的な事項(藤原三代の栄華の跡、義経・兼房の最期)でテーマを補う。 |
| 本論 | 自然の悠久さと人間の営みのはかなさを対比させ。芭蕉の思いを探る。
感動の核心に触れる。 |
| 結論 芭蕉の人生観に触れ、感想文のテーマを結論づける。 | |

3 入門期の古典指導

中・高6カ年一貫の方針にそって、中学校から高校へかけての古典指導を系統付けようという試みである。本校では、中学校の授業の一部分を高校の教官も分担し、古典指導では、朗読と暗誦に特に重点をおいている。ただ、期によって、使用教科書や指導者により、教材等に若干の相違があるので、本校で行った昭和58年度と昭和60年度の教育研究会の発表に基づき、その概略をあげて、その傾向を示すことにする。

〈中学校、高校を通しての重点〉

朗読、暗誦、古典への親しみ(特に、言葉の上での距離感を生徒にできるだけ持たせないように工夫する。)

各学年で扱った主な教材(中35期、高29期)

—中1—(年間10時数)

今昔物語「阿蘇の史」(28の16) 竹取物語(冒頭の6文) 蛇足 矛盾
竹取物語、蛇足を暗誦。

—中2—(年間15時数)

徒然草(序) 同「友とするに」(117) 同「堀池の僧正」(45) 同「神無月のこ

ろ」(11) 同「猫また」(89) 絶句(杜甫) 鹿柴(王維)

徒然草(序), 同「神無月のころ」, 絶句を暗誦。

—中3—(年間30時数)

万葉集・約10首, 枕草子「春はあけぼの」(1) 同「にくきもの」(28)

同「うつくしきもの」(151) 奥の細道「月日は百代の過客」(「…見送るなるべくべし。」まで) 黄鶴楼(李白) 静夜思(李白)

山部赤人の富士山についての長歌と反歌, 枕草子「春はあけぼの」, 奥の細道(初めから「……庵の柱に懸け置く。」まで), 静夜思を暗誦。

—高1—(年間80時数)

宇治拾遺物語「ちごのそら寝」 竹取物語(全編) 格言(漢文の基本構造) 故事(虎威, 塞翁馬, 刻舟求劍, 漁父之利, 守株, 五十歩百歩) 江雪(柳宗元) 江南春(杜牧) 送元二使安西(王維) 涼州詞(王翰) 子夜吳歌(李白) 香炉峰(白居易) 兵車行(杜甫) 史記(鴻門之会, 垣下之戰)

江雪、送元二使安西、涼州詞、香炉峰、竹取物語(「昇天」の「竹取心惑ひて泣き伏せる……空よりも落ちぬべき心地する。」の部分) 百人一首(百首)を暗誦。

中学校では漢文は書き下し文だけを扱い、訓読法はふれていない。中3の2学期から文語文法の用言(特に動詞を中心に)の基本活用を覚えることにした。

各学年で扱った主な教材(中37期)

—中1—(年間20時数)

平家物語「祇園精舎」「敷盛の最期」今昔物語「阿蘇の史」竹取物語「蓬萊の玉の枝」韓非子「矛盾」百人一首1~10。

「祇園精舎」「竹取物語」(冒頭の6文)「矛盾」「百人一首10首」暗誦。

—中2—(年間15時数)

徒然草(序)「屋根の縄」「友とするに」「堀池の僧正」世間胸算用「足切り八助」百人一首11~50

「徒然草」(序)「屋根の縄」「百人一首40首」暗誦。

—中3—(年間30時数)

方丈記(冒頭部分)枕草子「春はあけぼの」万葉集・古今和歌集・新古今和歌集約10首, 徒然草「丹波に出雲といふ……」「奥山に猫また……」奥の細道「月日は百代の……」芭蕉の俳句, 良寛和尚の「月と兔」, 鹿の子餅「牛と馬」, 春望, 百人一首51~100, 「方丈記」「枕草子」「奥の細道」「春望」, 百人一首50首暗誦。

暗誦以外に, 徒然草を利用した友人論の創作(「友とするに……」), 4コマ漫画の製作(「堀池の僧正」)などの興味付けを工夫した指導。古語辞典や図書館の利用をねらいとしたグループ発表学習(「万葉集・古今和歌集・新古今和歌集」)なども行った。また、「月の兔」や「牛と馬」などは, 読書からの古典入門を目指したものであり, 教材発掘を意図したものもある。

高2で, 陶淵明について, その伝承や時代背景を漢籍から深く調べてみることにより古典への親しみを深めるといった試みも併せて発表した。

次に示すのは, 自由選択による古典読書の結果を表したものである。

尚、これは中3、高1の授業を学期初め3週にわたって（週1回）図書館で行い、図書選択、読書をした後の集計である。

古典読書（自由選択）昭和60. 7.

中 3 (4クラス 160人)			高 1 (4クラス 183人)		
	%			%	
1 徒然草	24.3	39人	1 徒然草	29	53人
2 竹取物語	12.5	20	2 竹取物語	8.7	16
3 枕草子	11.3	18	平家物語	8.7	16
4 方丈記	10.6	17	源氏物語	8.2	15
5 平家物語	7.5	12	枕草子	7.6	14
6 今昔物語	6.9	11	奥の細道	6.6	12
7 源氏物語	5.0	8	今昔物語	3.8	7
8 東海道中膝栗毛	3.8	6	伊勢物語	3.3	6
9 奥の細道	2.5	4	雨月物語	2.7	5
10 更級日記	1.8	3	土佐日記		5
雨月物語		3	方丈記		4
宇治拾遺物語		2	宇治拾遺物語		4
太平記		1	東海道中膝栗毛		4
江戸小嘲			鹿の子餅		2
十八史略			十訓抄		2
土佐日記			世間胸算用		2
日本靈異記			日本永代藏		2
西鶴諸国咄			古事記		1
日本永代藏			堤中納言物語		
好色五人女			将門記		
古事記			落窓物語		
伊勢物語			更級日記		
御伽草子			太平記		
紫式部日記			増鏡		
他			他		

§ 2 教育研究活動

1 教育研究会（旧教官敬称略）

教育研究会の内容について、この10年間を振り返る意味で、年度順に掲げてみることにする。大きなテーマの流れとしては、「読書指導」→「表現指導」→「古文指導」という軌跡を見ることができる。上記において触れた部分もあるが、ここでは発表の要旨を記しておく。

昭和52年度

研究主題 「中学・高校における読書指導」

- 授業1 ○松田道雄「君たちの天分を生かそう」（中学1年） 上野 久男
読書の幅を広げることの大切さを気付かせる。読書によって考え方の
変わることを経験させる。
- 授業2 ○井伏鱒二「隠岐別付村の守吉」（高校1年） 石川 承紀
読書指導への展開。課題学習、長文読解、作文を三本柱とした指導法。
- 研究協議 「読書指導の実践と試み」—系統化をめざして—久下正己・河野文男
- 講 演 「文学の周辺」 （帝塚山学院大学） 庄野英二先生
- 昭和54年度
- 研究主題 「表現指導（作文）」
- 授業1 ○「作文」（中学1年） 久下正己
身近なものを題材に選び、その題材設定に従って、書く材料を集めさせること。
- 授業2 ○「表現指導」（高校2年） 河野文男
読書や見聞による素材を明確に活用しながら文章を完成し、同時に自己啓発につとめさせる。
- 提案1 「作文力を育てる本校の試み」 上野久男
読むことの関連・回覧文集・作文用紙・添削記号・評価・読書感想文・個人文集などをめぐる問題点。
- 提案2 「高1生作文指導」 篠原 修
高校1年生に対する「課題作文」の指導について。
- 講 演 「生きる力としての表現力の育成」 （兵庫教育大学） 長谷川孝士先生
- 昭和56年度
- 研究主題 「表現領域の研究」
- 授業1 ○「表現力の育成」（中学1年） 中西一彦
書くことに抵抗を感じさせず、しかも自分の思いを言葉にのせさせる作文指導の試み。
- 授業2 ○「表現力の育成」（高校2年） 篠原 修
1つの題のもとに意見を交換し、課題作文を資とさせる指導法
- 研究協議 「作文の自己評価」 孫磨昌一
高3の場合を中心に、自己評価の実態及び相互批評の実態を示し、問題提起。
- 講 演 「国語科教師論」 （土浦短期大学） 増渕恒吉先生
- 昭和58年度
- 研究主題 「古典入門期の指導」
- 授業1 ○「徒然草」より（中学2年） 平田達彦
徒然草 117段を取り上げ、朗読と暗誦に重点を置くとともに、古典に親しませる試みとして「擬古文」化による指導法。
- 授業2 ○「今昔物語集」より（高校1年） 孫磨昌一
「左衛門尉平致経、明尊僧正を導きし語」（『今昔物語集』卷23の第14）を取り上げ、朗読を入れた読解指導。

- 研究協議 「古典入門期の教材とその扱いについて」 篠原 修
 古典教材を中1から高1に至るまで、どのような配列及び段階で指導してきているか。本校の実態を示し、問題点を協議。
- 講演 「古典文学教育」 (大阪教育大学) 森 一郎先生
 昭和60年度
- 研究主題 「古典入門期の指導」
- 授業1 ○「徒然草」より (中学2年) 中村英治
 徒然草52段を取り上げ、原文(句読点などを省く)に句読点などを打つ作業を通して音読能力を養わせる指導法。
- 授業2 ○「伊勢物語」より (高校2年) 篠原 修
 できるだけ多くの生徒が、授業中それぞれの役割を分担し、それを通じて生徒達の「古典」への関心を高めさせる指導法。
- 研究協議 「古典入門期の教材とその扱いについて」 中西一彦
 使用教科書の古典教材・実際に取り扱った教材とその時間数・暗誦した教材・音読を主とした教材・興味付けを工夫した教材などを示し、中・高における実践を発表協議。
- 講演 「古典の不可思議さ」 (大阪教育大学) 横 克朗先生

2 近畿附属連盟中・高研究部会

近畿附属連盟では、昭和50年より「理解」領域に関する、昭和55年より「表現」領域に関する研究を行ってきた。「理解」領域とは読解および鑑賞の指導を意味し、「表現」領域とは主として作文の指導を意味する。原則として毎年2回、加盟各校が持ち回りで研究授業を含む研究会を主催し、その成果を発表するかたちをとった。ここでは全てを記録することができないので、本校の教官によって発表されたものを記するにとどめる。

昭和53年6月 (大教大附属天王寺中・高等学校)

- 授業 ○中野重治詩「波」 (中学2年) 上野久男
 なお京都教育大附属高校の廣瀬博先生による授業が同じ教材で高校2年を対象に行われた。

昭和53年11月 (大教大附属天王寺中・高等学校)

- 授業 ○宮沢賢治「よだかの星」 (高校1年) 琢磨昌一
 なお奈良女子大附属中学の已野欣一先生による授業が、中学1年を対象に同じ教材で行われた。

発表 ○「中・高詩教材について」 河野文男

以上は近畿附属連盟会の「理解」領域の共同研究にそってなされたものであり、教材の理解・鑑賞に関する指導を中心とする。

昭和58年6月 (大教大附属高校平野校舎)

- 授業 ○「表現から理解へ」 (平野校舎高校3年) 峰地右太郎
 授業 ○「想像力と表現力—『麦打ち』をめぐって—」 (平野校舎高校2年) 河野文男

発表 ○「作文の自己評価」

琢磨昌一

以上は近附連国語部会の「表現」領域の共同研究にそってなされたものである。

昭和58年6月（大教大附属平野中学校）

授業 ○「近代短歌を素材とした詩の創作」（平野中学校3年） 平田達彦

本校教官による授業・発表は以上のとおりであるが、近附連国語部会の研究成果をまとめたものに以下の冊子がある。これらは文部省の教育方法等改善経費の助成を受けて刊行されたものである。

(1). 国語科『理解』領域の指導研究—古典・現代文指導の中學・高校連続性の追求—
昭和53年3月に刊行され、昭和50年よりの「理解」領域の研究成果をまとめたものである。本校教官による執筆は、「中學・高校の連続性をふまえた読書指導一生徒の実態に基づく系統的指導」である。これは本校生徒の読書傾向を調査した上で生徒の発展段階に応じての読書指導を論じたものである。

(2). 国語科『表現』領域の指導研究—作文を中心として—

昭和57年3月に、昭和55年より始まった「表現」領域の研究成果の中間報告として刊行されたものである。ここでは本校中学教官によって「中学生作文にみる『推敲のもつ意味』」が書かれた。これは生徒の作文を生徒自身で推敲させ、最初の文章が推敲後いかに改善されたかを報告したものである。なお前年に大教大附属平野中・高等学校によって「中・高関連をふまえた語彙指導」と題する論稿が発表されている。これも近附連国語部会の「表現」の領域の共同研究の一環として刊行されたものである。

(3). 国語科『表現』領域の指導研究—中学校・高等学校の連続性を求めて—

昭和58年3月に「表現」領域に関する研究の最終的な結論として刊行された。ここでは本校中学教官による「生徒たちの表現意識をみたす指導法を求めて」と、本校高校教官による「学年別にみた表現の分析 その2」が掲載された。前者は生徒の作文の推敲個所を分析することによって、その表現意識をまとめたものであり、後者は学年別による作文指導の留意点を論じたものである。

3 全国附属連盟高等学校研究大会

(昭和52年10月) 発表題「中高を通しての読書指導」

河野文男

読書指導において、読書案内という程度にとどまらず、各学年で全員が必ずこれだけは読むという作品を設定する。そして、中・高6ヶ年を通してそれらを系統化し、更に作文への展開を試みる。

(昭和57年10月) 発表題「表現力の育成」—文種別指導—

河野文男

読書からの発展を重視する。伝記、小説、評論、古典（徒然草・孟子）、俳句といった種類の違う文章それぞれの鑑賞、批評を通して作文に進む。その際、読んだ作品中の素材・印象に残る表現を自分自身が平素から持っている問題点や考えと絡ませて内容をふくらませるよう工夫する。

(昭和57年10月) 発表題「わたしたちのテキスト〈漢文〉づくり」

峰地右太郎

過去10年間発掘を続け、教室で生徒と共に読んだ漢文教材をまとめ、今後の漢文學習の指針をさぐる。

(昭和58年10月) 発表題「想像力と表現力」—「麦打ち」をめぐって— 河野文男
「麦打ち」(尋常小学校5年生用教科書所載)を高校生に用い、「確かな表現」「簡潔な表現」を基にした表現意識を高めるもの。また、教材発掘の一つの試みである。

4 大阪教育大学関係・その他

- (昭和53年2月) 発表題「創造性を培う教育」 河野文男
(大阪教育大学教育研究所)
(昭和58年6月) 発表題「中・高作文指導の実践」 河野文男
(日本国語教育学会・大阪大会)
(昭和60年8月) 発表題「古典学習の基礎」 河野文男
(日本国語教育学会・全国大会)
(昭和60年9月) 発表題「読書からの古典入門」—作文指導への発展— 河野文男
(大阪府教育委員会研修会)

5 研究集録以外の誌上に発表したもの

- (昭和57年) 「推理読み」 中西一彦
(三省堂通信2号)
(昭和57年) 「読解・読書指導からの作文指導」 河野文男
(高等学校作文指導講座・有精堂)
(昭和57年) 「〈空中ブランコ乗りキキ〉の指導」 中西一彦
「全員参加の作文教室・俳句感想文」 河野文男
「課題作文の試み」 篠原 修
(教育大学教育実践シリーズ・国語科授業の課題と創造・第一法規)
(昭和58年) 「論説文教材の読みの学習反応のとらえ方」 中西一彦
(国語教育3月号・明治図書)

6 研究集録

『研究集録』は中学校・高等学校が合同して発行しているものである。

昭和51年度・第19集

「ある古典の1つの整理工作から」— 蜂地右太郎

64回本少年児童版『水滸』と88回本児童版『水滸』をめぐっての考察。

昭和52年・第20集

「中・高を通しての読書指導」— 河野文男

読書指導の位置付け、理解過程と読書、読書指導の基本、読書意識などに関する調査及び考察。

「読書指導」— 石川承紀

長文読解と書物紹介の授業を中心とした取り組みの実践報告。

- 「作文指導」その1—— 篠原 修
作文指導について。実施の方法、処理・評価、事前の指導などをめぐる諸問題についての考察及び実践報告。
- 「作文指導」その2—— 石川承紀
作文指導に関する基本的な考え方などを考察。読解・鑑賞の授業と関連づけた作文指導の実践報告。
- 昭和54年度・第22集
「表現力の育成」—— 河野文男
読書指導との関連及び素材の生かし方を中心とした考察及び実践報告。
- 昭和55年度・第23集
「生き生きとした国語教室をめざして」—— 中西一彦
文章による自己表現の実践報告。
- 昭和56年度・第24集
「生き生きとした国語教室をめざして（2）」—— 中西一彦
「巻き戻し読み」という読解方法を授業の中に取り入れた実践報告及び考察。
- 昭和57年度・第25集
「わたしたちのテキスト〈漢文〉づくり」から—— 峰地右太郎
10年ほどの間の、さまざまな折の、もうもろの事や物に触発されて、教室における生徒たちとの関わりのなかで、そこに提供して読むことを求め、また、求められていっしょに読んできた作品のまとめ及び考察。
- 「楽しい国語の授業とは」—— 平田達彦
作品化による表現指導の実践報告。
- 「生き生きとした国語教室をめざして（3）」—— 中西一彦
表現指導の実践報告～「附中新書」の作成～
- 昭和58年度・第26集
「楽しい国語の授業とは」—— 平田達彦
古典入門期の指導の実践報告。
- 「挨拶の難渋ということ」—— 峰地右太郎
先号第25集に引き続いだ、テキストについての考察。
- 昭和59年度・第27集
「生き生きとした国語教室をめざして（4）」—— 中西一彦
表現及び読書指導に関する実践報告。～「あなたに読ませたいこの小説」～
「作文の力をつけるために」—— 中村英治
作文指導に関する実践報告。～書くことの苦しさから楽しさへ～
- 昭和60年度・第28集
「生き生きとした国語教室をめざして（5）」—— 中西一彦
～「ここにちは、古典さん」～
古典入門期であることを意識しながら、中1～中3までの古典指導の実践報告。
「古文読解力につけるために」—— 中村英治
～読むことの苦しさから楽しさへ～

徒然草を中心とした古典指導の実践報告及び百人一首の指導方法について。

§ 3 書道・書写

はじめに

書写・書道についての集録をまとめるにあたって、この10年間の取り組みの資料がほとんど残されていない点を断つておく。そこで前回の記念研究集録の資料をふまえて、中学校創立から現在までを、およそ10年刻みに、4期に分けて、その間に行ってきたあとを振り返ってみる。

第1期（昭和22年～31年）

この期の附属中学校は、年ごとに中心となるテーマを決めて、全教科歩調をあわせて研究がすすめられ、時には教科のわくをはずしての研究も行われていた。また、毎年研究発表会を開いて、公開授業も行われていた。その1は、成田重明先生（転出）による「和歌のちらし書き」の指導。その2は、同先生による「年賀状の書き方」の指導。その3は、中邑元子先生（転出）による「自分の好きな詩を書く」指導。（詳しくは、研究集録18集参照）。

なお研究授業以外に当時の取り組みとして、夏休み作品展がある。この期においては、毛筆による美的な表現に重点がおかれ、かなりその成果があった。

第2期（昭和32年～41年）

第2期も校内において、夏休みの作品展と3学期の書き初め展が続けられていた。そのほかに、校外の展覧会に出品するようになり、文部大臣賞など多数の入賞者を出した。この期は、毛筆以外の用具を使って書く授業が多く実施され、臘写版原紙の切り方や印刷などの指導がなされていた。

第3期（昭和42年～50年）

昭和40年代に入って、「いかにして、書写に興味・関心をもたせるか」ということに重点がおかれた。書写についてのアンケートがとられ、嫌いと答えた生徒が約半数。その理由として、(1)道具が多く重い、(2)字が下手である。(3)現在の世の中にあまり役立たない。(4)墨をするのが面倒、などがあげられた。そこで、これらの解決として、書写・書道の教室に道具（硯・ぞうきん・筆おき・文鎮・下敷・紙ばさみ）がそろえられた。これらの道具は現在に至ってもそろえられている。

書写は嫌いだが、美術は好きだという生徒が多い。いろいろと内容に変化もあり、また独自の創造性を發揮できる喜びのあることが分かる。この点をふまえて、昭和46年度から、手本なしで書く授業も取り入れられ、「手本の字のような字だけがいい字でない、他にもいい字がたくさんある」という観点を知らせ、指導されている。これによって、手本どおり書けなくても、気にしなくてもいいし、各自の創意工夫が生かされるようになった。例としては、「ポスター作り」「字集め」や国語の教科書に載せられている短歌や俳句を自分なりに工夫して書くなどといったものがある。また、夏休みの宿題として小筆で小説を写したり、日記を小筆で書くなどが出されたが、生徒達の反応はよかったです。

昭和46年10月、本校の教育研究発表会において、「書写に興味・関心をもって学習させるには」というテーマで研究会が開かれた。公開授業も行われ、上野久男先生（転出）に

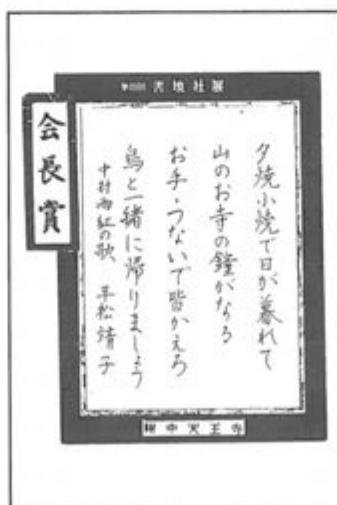
よる「いろいろな表紙」の指導がなされた。昭和47年からはOHPを使った書写指導をテーマにトラベントを作製し、効果的な利用法が検討された。この期は、「興味・関心」に重点をおいた指導がなされていた。

第4期（昭和51年～60年）

この期は第3期の継続期と考えられる。上野久男先生が昭和57年3月に転出されるまで上野先生を中心に書写教育が推進されていた。上野先生転出後は、国語科専任教官が書写・書道の授業を担当することが少なくなり、非常勤講師の先生方に委ねることが多くなっている。授業は、第1期・2期・3期で問題提起された点をふまえ、その指導の定着化をめざし現在に至っている。なお、現在は中1と高校担当が非常勤講師、中2担当が国語科専任教官となっている。書写・書道の教室（特別室）を中・高で使用している。その教室にビデオ・教材提示機が昭和60年度に設置され、視聴覚機器を利用した指導法が検討されつつある。特別室は生徒作品が多く掲示できるように壁面を広くとり、興味・関心と共に「刺激」も大切にしている。高校生の作品が中学生の目に入りやすい環境は、本校の特徴になっている。

各団体の書写・書道の作品展にも多く出品され、入賞者も多く出している。

以上、中学校における書写指導の実践（第1期・2期・3期については研究集録18集を参照し、要約した）のあとを振り返ってみたが、国語科の中の書写として、まだ検討しなければならないことが多い。この10年間の取り組みは非常勤講師に委ねることが多く、集録として載せる指導資料が十分に残されていない点も反省すべきことである。また、高等学校における書道担当が長時間にわたり非常勤講師に担当を委ね、日々の実践活動以外には、特に研究のまとめとしては残されていない点も気になる反省点である。これらの反省点をふまえ、本校における中学高校6カ年一貫というシステムの中で書写・書道教育はいかにるべきかを十分に検討すべきであろう。国語科専任教官による指導の充実化、講師の先生方との協力、連携なども今後の課題である。



38期生作品



38期生作品



39期生作品

§ 4 今後の課題

本校国語科教育の研究活動の昭和51年から昭和60年までを主に、部分的にはそれ以前に遡ってその歩みを概観した。顧みて、中・高一貫の立場から取り組んできた「読書指導」「表現指導」「古典入門期の指導」などにおいて、「本校の独自性」という観点からすれば、十分とは言い難いが、一定の成果を上げたであろう。現在も、これらの指導が本校国語科教育の大きな柱になっている。指導の柱が単年度でめまぐるしく変わる学校もあるだろうが、本校では少なくとも4年間ぐらいは柱を変えずに取り組んで来た。特に、「読書指導」については、昭和51年以前からの柱であり、歴史は古い。生徒は時代と共に変化し続けている。永遠の名作があると共に新しい時代の名作もあるはずである。生徒の読書離れという傾向の中で「読書指導」はいかにあるべきか、「どんな本を」「どのように」読ませるべきかという問題が当面の課題である。具体的に読書の実態・読書の傾向を把握することから、必読書、啓蒙書の選定、系統的な読書指導のあり方などを検討する必要がある。ひいては、授業として明確に取り込んだ読書指導（読書時間の設定）なども検討すべきであろう。

表現指導では、中・高を見通したうえで、どの時期にどのような指導をするかを再検討する時期に来ている。教官各人が独創的な表現力育成の工夫・研究を続けることは当然として、中学前期では短作文などによる基本文型、後期で読書感想文、高校前期ではレポートや説明文、後期で意見文・小論文、というように重点的に指導をするのも一方向である。これは、「楽しく書かす」「身近な題材を生かして書かす」「豊かな内容で書かす」といった個々の工夫とはまた別の意味を持って重要な指導のあり方のはずである。については、文章指導の系統化が当面の課題となる。

今後、各指導において、生徒の実態をふまえつつ、創意工夫を重ねて行かなければならぬことは言うまでもない。現在「音読」「朗誦」「暗誦」など音声に関する指導のあり方をテーマとした研究が始まっている。これは「入門期の古典指導」の流れから出てきたも

のであり、また「生徒は意欲的に授業に取り組んでいるか」という問題意識からも追究して行きたい。

「入門期の古典指導」についても、中3・高1を一応の入門期としているが、教材をはじめ、文法事項の扱い方、時間配当など、具体的検討は今後に残している。

本校が研究校である使命を念頭に置きながら、過去の研究テーマをより深化、工夫していくと共に、新しい時代の流れの中で生徒の実態に合った国語科教育を進めていかねばならない。例えば、中・高の段階を（中学前期）、（中学後期）、（高校前期）、（高校後期）、とする取り組み、（中1・2）、（中3・高1）、（高2・3）とする取り組み、ワープロ・視聴覚における機材利用の研究も含めて、新時代に即応した指導法の研究などが今後の課題である。

むすび

以上、主としてこの10年間の経過を追ってみたのであるが、中・高一貫教育については今後更に6ヶ年間の系統化を徹底させるよう工夫していかねばならない。また、高校では生徒の基礎学力や関心が、この10年間ますます多様化して来ているので、それに対応できるようなカリキュラムや授業内容の研究について一層の努力が必要である。

金藤 行雄
中西 一彦
河野 文男
中村 英治
篠原 修
平田 達彦
球磨 昌一

社 会

§ 1 本校社会科における教育研究活動

1 教育研究会

本校社会科の研究会発表は、昭和23年に始まる。以来、今日まで種々の実践の上に立った研究発表を行つて來た。昭和49年度（第22回教育研究会）までの研究発表は、研究集録第18集（中学校創立30周年・高等学校創立20周年を記念して）に報告をしているので、今回は昭和50年以降について報告するものである。中・高社会科は、「中・高社会科の再検討」をテーマに、中・高6ヶ年一貫教育体制下における研究発表を行つてゐる。

この機会をかりて、研究発表における基本的なものについて言及しておきたい。中・高の社会科の教科内容は一見内容の重複が目立つ。そのためか、一部の学校では重複をさける形でカリキュラムを作成しているようである。しかし、この形は地域の公立校における教育実践とかけはなれてしまいがちである。本校では、公立校と同じ形でカリキュラムを構成し教授する立場に立ち、中・高それぞれの学習内容の検討と中・高の学習内容の関連はどうあるべきなのかについて実践研究報告を行つて來ている。その研究方法は研究会発表のための研究にならないように、次の点を留意点としている。各教官は日常の授業ノートを研究の出発とする。すなわち日常の授業から問題点を見い出そうとする姿勢を大事にしたいと考えているのである。授業ノートと年間指導計画を相互に点検することにより、中・高それぞれの教官が、何を大切にして教材を構成しているか、生徒の発展段階をどのように理解しているかを明らかにして相互理解を深めようとしている。この相互理解を通じて、生徒の発達段階に応じた教材配列、学習内容の重要事項、中・高の関連性はいかにあるべきか模索し、よりよい内容を提示しようと考へてゐる。学習内容の再検討には、当然のことながら「教材の精選」が関係してゐる。教材の精選は、学習事項の重複をさける意味にとられる危険性があるが、本教科では、次のように考へてゐる。例えば、「ヨーロッパの農業」という学習事項があるとする。ヨーロッパの農業は中・高ともかならず学習する内容である。重複をさける意味で中学校で学習したからとして高校でほとんど扱わないとするならば、中学校段階で高校レベルの内容まで扱う必要性が出てくる。しかし、果たして可能であろうか。例えば、混合農業を理解させる場合、高校では三圃式農業にさか上つて理解させる。高校段階では歴史性が重視される面が強いのに、世界史の知識が充分ない中学生にいくら三圃式農業を説明してもそれは語句の説明に終つてしまい、混合農業の歴史的側面を理解させたことにならない。

我々が考へてゐる「教材の精選」は、単に教材の数が減少すれば良いと考える単線型のカリキュラムではなく、スパイク型のカリキュラムを指向してゐるのである。同じ教材を扱うにしても、中学生には何を重点にして、どの程度まで教えていくのか、また高校生には、中学校の学習成果の上に立つて、何を重点的に深化させるのかが大切と考える。すなわち、生徒の発達段階に応じた最適の学習形態、学習内容を研究することが

「教材の精選」の意味ではないかと考えているのである。我々は常に、中・高生の社会事象の受け止め方の違いや教科書の比較検討、生徒の社会事象に対する意識調査等を行いデーターを集め、よりよい成果を目指している。以下に10年間の研究発表の概要について報告しておく。

昭和51年度 第24回教育研究会

研究課題 中・高社会科の再検討 ——第2回 歴史分野——

- ①研究授業 I 日清戦争 中3 本校教諭 西田 光男
II 日清戦争 高3 本校教諭 白土 芳人

- ②研究協議 ○中・高独自の歴史教育をもとめて

- 研究の動機
- 中学と高校における歴史指導のちがいをどこにおくか
- 生徒の発展段階と学習内容
- 今後の問題点

指導講師 大阪教育大学教授 酒井 忠雄先生

指導講師 大阪府科学教育センター 永田 勇夫先生

司 会 本校教諭 高木 正喬

- ③講演 ○近代における日・朝関係

講師 奈良女子大学教授 中塚 明先生

昭和52年度 第25回教育研究会

研究主題 中・高社会科の再検討 ——第3回 歴史分野——

- ①研究授業 I ヨーロッパ世界の成立 高2 本校教諭 高木 正喬
II ヨーロッパ世界の発展 中2 本校教諭 場本 功

- ②研究協議 ○歴史教育における中・高の関連を求めて

- 生徒の発達段階と学習内容
- 中学と高校における歴史指導のちがいをどこにおくか
- 今後の問題点

指導講師 大阪教育大学教授 木谷 勤先生

指導講師 大阪教育大学教授 酒井 忠雄先生

司 会 本校教諭 白土 芳人

- ③講演 ○市民革命の再検討

講師 大阪教育大学教授 木谷 勤先生

昭和54年度 第27回教育研究会

研究主題 中・高社会科の再検討 ——第4回 公民・政経分野——

- ①研究授業 I 基本人権 中3 本校教諭 富田 健治
II 基本人権 高1 本校教諭 岩城 一郎

- ②研究協議 ○公民及び政経分野における中・高の関連を求めて

指導講師 大阪教育大学教授 酒井 忠雄先生

指導講師 大阪府科学教育センター 永田 勇夫先生

司 会 本校教諭 場本 功

③講演	○憲法と職場の問題について 講師 大阪市立大学教授	本多 淳亮先生
昭和56年度 第29回教育研究会		
研究主題	中・高社会科の再検討 ——地理的分野——	
①研究授業	I 地図指導 中2 本校教諭 富田 健治 II 地図指導 高1 本校教諭 田原悠紀男	
②研究協議 ○中・高の地図指導について • 地図指導でめざすもの • 中学校の地図指導の実際 • 高等学校での地図指導の実際 • 中・高の関連		
	指導講師 大阪市立梅香中学校校長 安井 司先生	
	指導講師 大阪教育大学教授 前田 昇先生	
	司 会 本校教諭 白土 芳人	
③講演	○地図教育の諸問題 講師 大阪教育大学教授	前田 昇先生
昭和58年度 第31回教育研究会		
研究主題	地域教材の活用 ——中・高歴史(日本史)学習——	
①研究授業	I 日本の近代工業の発達 中2 本校教諭 西田 光男 II 米騒動 高3 本校教諭 白土 芳人	
②研究協議 ○地域史学習の試み • 地域史学習の問題点 • 中学校における地域史学習の実際 • 高等学校での地域史学習の実際 • 今後の課題		
	指導講師 大阪教育大学教授 乾 宏巳先生	
	指導講師 大阪教育大学助教授 石井 郁子先生	
	司 会 本校教諭 場本 功	
③講演	○近世大阪の町人社会 講師 大阪教育大学教授	乾 宏巳先生
昭和60年度 第33回教育研究会		
研究主題	中・高社会科の再検討 ——公民(経済)分野——	
①研究授業	I 日本の国家財政 中3 本校教諭 場本 功 II 現代の日本経済 高2 本校教諭 岩城 一郎	
②研究協議	○中・高生の経済知識を比較して 本校教諭 場本 功 ○中・高教科書比較(経済分野) 本校教諭 高木 正喬 指導講師 大阪教育大学教授 福本 邦行先生 指導講師 大阪教育大学助教授 岩田 年治先生	
	司 会 本校教諭 白土 芳人	
③講演	○経済教育と経済学	

講師 大阪教育大学教授

福本 邦行先生

2 近畿附属学校連盟中・高研究部会

近附連中・高社会科部会は、昭和34年に第1回の研究会がもたれて以来、当番校を中心として研究活動報告、研修活動を行っている。以下は、本校が昭和54年度に当番校として研究会を開いたものを報告しておく。

日 時 昭和54年5月18日

内 容 1. 各校の研究活動の報告

2. 野外巡査 上町台地（天王寺界隈）

講師 安井 司先生（大阪市立梅香中学校校長）

3 全国附属連盟高等学校研究大会

全附連社会科部会において、過去10年間では、次の発表をした。

昭和53年度 第20回大会 於 広島大附高

世界史授業の実践例

高木 正喬

昭和59年度 第26回大会 於 金沢大附高

日本史における地域史授業の問題点

——教科書の記述を分析して——

白土 芳人

昭和60年度 第27回大会 於 東京学大附高

世界史の授業に地域教材を如何に活かすか

高木 正喬

——老農中村直三についての研究ノート——

4 その他

○中・高社会科教官が個人的に加入している学会、研究会における研究発表は割愛し、単行本として発行されている分のみここに記す。

○基本的文献をどう読むか—コンドルセ「人間精神進歩史」シリーズ・人間の教育を考える4『歴史と教育』（酒井忠雄編、講談社、1981年刊）所収 高木 正喬

○「港町の発達一堺一」・「日本の大恐慌」（『中学校地歴総合学習展開事例集』東京法令出版株式会社、1982年） 西田 光男

『変貌する大阪—その風土と歴史—』東京法令出版株式会社 1986年 富田 健治・西田 光男・場本 功他共著

§ 2 地理実習

中・高社会科では、昭和56年度から高1の生徒を対象に地理実習を実施している。本年で5回の実施をみた。この地理実習は、理科の地学実習と同時期に実施しているものである。以下に実施要項、実習レポートの課題を挙げておく。

1 高1地理実習要項

実習地域：河内長野市三日市町から高向地域の石川流域

(地形図：2万5千分の1 富田林)

A. 実習コースづくり：全コース約10km（約5時間）

中・高教師でコースの下見と検討

B. 教室での準備

ア. 地形図2枚（昭和53年発行の地形図、昭和33年発行コピー図）

イ. 地形図の説明、折り方、使用上の注意

ウ. 実習主題：段丘地形とその土地利用

エ. 読図（現地形と形成過程、地形図にみる人文現象）

○河岸段丘、丘陵地、沖積低地、山地、○大阪層群、○河川

○土地利用、○宅地造成、○三日市町（高野街道、市場町、宿場町、街村）

○近郊農業

オ. 実習コースの記入

カ. 生徒個人の主たる観察地点、観察事項の設定

C. 実習後のレポート

ア. 個人の自由レポート（Bのカを中心にして）

イ. 課題レポート

D. 新旧地形図の比較読図

E. 当日の実習

ア. 実習日と 9月下旬～10月上旬の土曜日 2クラス（地学実習と2クラスずつ

実習クラス 2クラス 交代して実施する）

イ. 班編成 1クラス3班、1班15名（男10名、女5名）

ウ. 指導者 （中・高教官6名、各班1名）

エ. 集合 現地（南海高野線三日市町駅前） 9時、9時30分

オ. 解散 現地（ 同 上 ）

2 実習レポートの課題項目を以下に挙げておく

① 自分が歩いている位置を地形図上で確かめることができたか。

ア. 100%できた イ. だいたいできた ウ. あまりできなかつた エ. 全くできなかつた

② 次の地図記号を現地で確かめることができたか。

X ④ □ ハシマ マル ♪ V△△文 □ 丘

③ 実習地で歩いた距離はおよそ何kmか。

④ 地形図の等高線から段丘面、段丘崖を読みとれたか。

	標高	土地利用
高位段丘面	m～ m	
中位段丘面	m～ m	
低位段丘面	m～ m	

⑤ 河岸段丘地形はどのようにしてできるか。また段丘面の土質、水の便についても考えてみよう。

どのようにしてできたか： 土質、水の便：

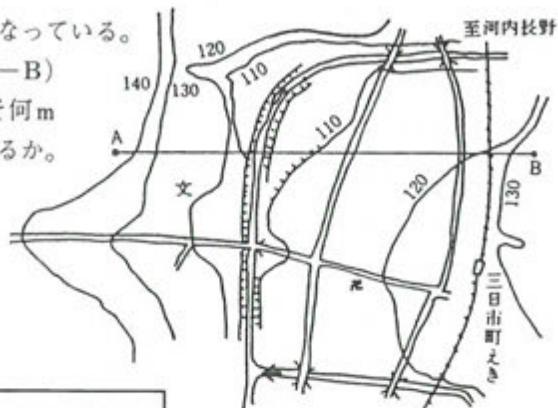
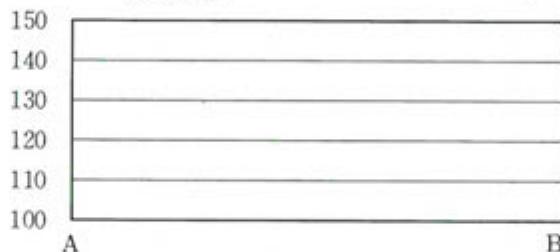
- ⑥ 三田市町はどんな町だったか。町並、町の規模、家屋の新旧、職業などについて考えてみよう。

街村についての説明：

- ⑦ 平和橋附近の等高線は次のようにになっている。

- a . 右の断面図をつくること。(A-B)
- b . この段丘面(低位置)はおよそ何mから何mくらいの高さになっているか。
- c . この河川の蛇行はどのようにしてできたと考えられるか。
- d . 三日市町は地形上どこに位置しているか。

(断面図)



- ⑧ 小塩町、楠ヶ丘団地について考えてみよう。

- a . 次のことわざは小塩町の集落、楠ヶ丘団地のどちらにあてはまると思うか。以下の表に記号を入れなさい。

- ①規則正しい直線的な道 ②曲った道が多い ③平家が多い ④二階建の家
- ⑤画一的な家の並び ⑥植木のある庭がある ⑦コンクリートが目立つ ⑧黒い瓦、土の壁
- ⑨色彩豊かな家 ⑩車庫 ⑪煙がある ⑫工場が点在する ⑬住むだけの家
- ⑭倉がある ⑮門構え ⑯丘陵地にある ⑰段丘面にある ⑱段丘礫を使った石垣
- ⑲道が狭い

- ⑨ 丘陵地の理解——露頭①の大坂層群

- a . 大阪層群について述べなさい。(地層をつくるもの、固結度、地質年代など)
- b . 丘陵地の植生と利用のしかたについて述べなさい。

- ⑩ 楠ヶ丘団地南西の地点(152mの独立標高地点の西)から石川左岸(西岸)を遠望して、三段の段丘面と三つの段丘崖(高位段丘面、中位段丘面、低位段丘面)を確認できただろうか。

④はっきりと確認した ⑤少しわかった ⑥よくわからなかった

	標 高	土 地 利 用
高位段丘面	() m ~ () m	
中位段丘面	() m ~ () m	
低位段丘面	() m ~ () m	

⑪ 南花台団地について考えてみよう。

- a . 南花台団地をみて感じたことを述べなさい。
- b . この丘陵地（矢伏丘陵）が新興住宅地として開発された利点を述べなさい。
また欠点があればそれについて述べなさい。

⑫ 高木地区の等高線は次のようにになっている。

- a . A—B の断面図をつくること。

b . 高木地区にあった家、ため池、道を図に描き入れなさい。また、地図記号で土地利用がわかるように図に描き入れなさい。

- c . 用水路はどこについていたか、図の中にわかり易く描き入れなさい。

d . 高木地区的地形を地形図の等高線と実際に観察したことから次のことを考えてみよう。

Ⓐ 等高線 170m～160m (ア.高位段丘面 イ.扇伏地)

Ⓑ ⏕ 160m～150m (ア.高位段丘面 イ.中位段丘面 ウ.扇伏地)

Ⓒ ⏕ 140m～130m (ア.中位段丘面 イ.低位段丘面 ウ.氾濫原)

Ⓓ ⏕ 130m～河床 (ア.低位段丘面 イ.氾濫原 ウ.氾濫原と小段丘群)

⑬ 平和橋附近の花崗岩の基盤の露出した峡谷をみて感じたこと、考えたことを述べなさい。

⑭ 高向集落が古い集落であると判断できる事柄を次の表にまとめてみよう。

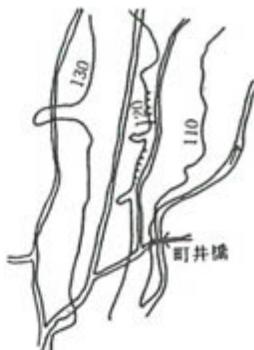
地形図だけから判断できる事柄	実際にみて判断できる事柄

⑮ a . A—B の断面図をかくこと。

- b . 丹保池の土堤は南側にはなぜつけてないのだろうか。

c . 水準点をみて感じたことを述べなさい。

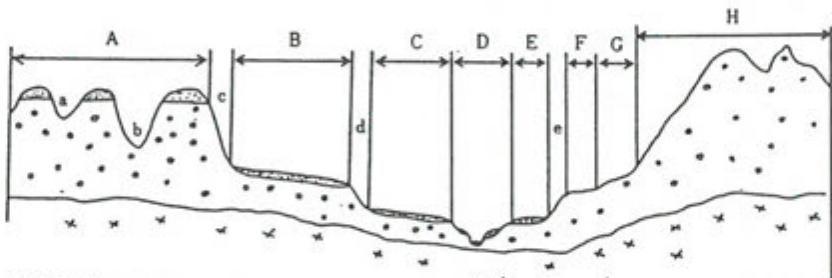




⑯ 上原町付近の等高線はだいたい次の図のようになっている。

- 130mの等高線、120mの等高線が段丘崖になっていると推測できる理由は何か。
- この集落は地形上どこに立地しているか。またその集落を図の中に描き入れなさい。
- この集落がこの場所にできた理由だと考えられることを地形的な面、土地利用の面から述べなさい。

⑰ 小山田台地から石川をはさんで矢伏丘陵に至る断面はだいたい下図のように考えられるのではないだろうか。（丹保池付近の横断面）



△ 段丘礫 ◆ 大阪層群

× 花崗岩（基盤） c. d. e 段丘崖

a. 次の表を完成させてみよう。

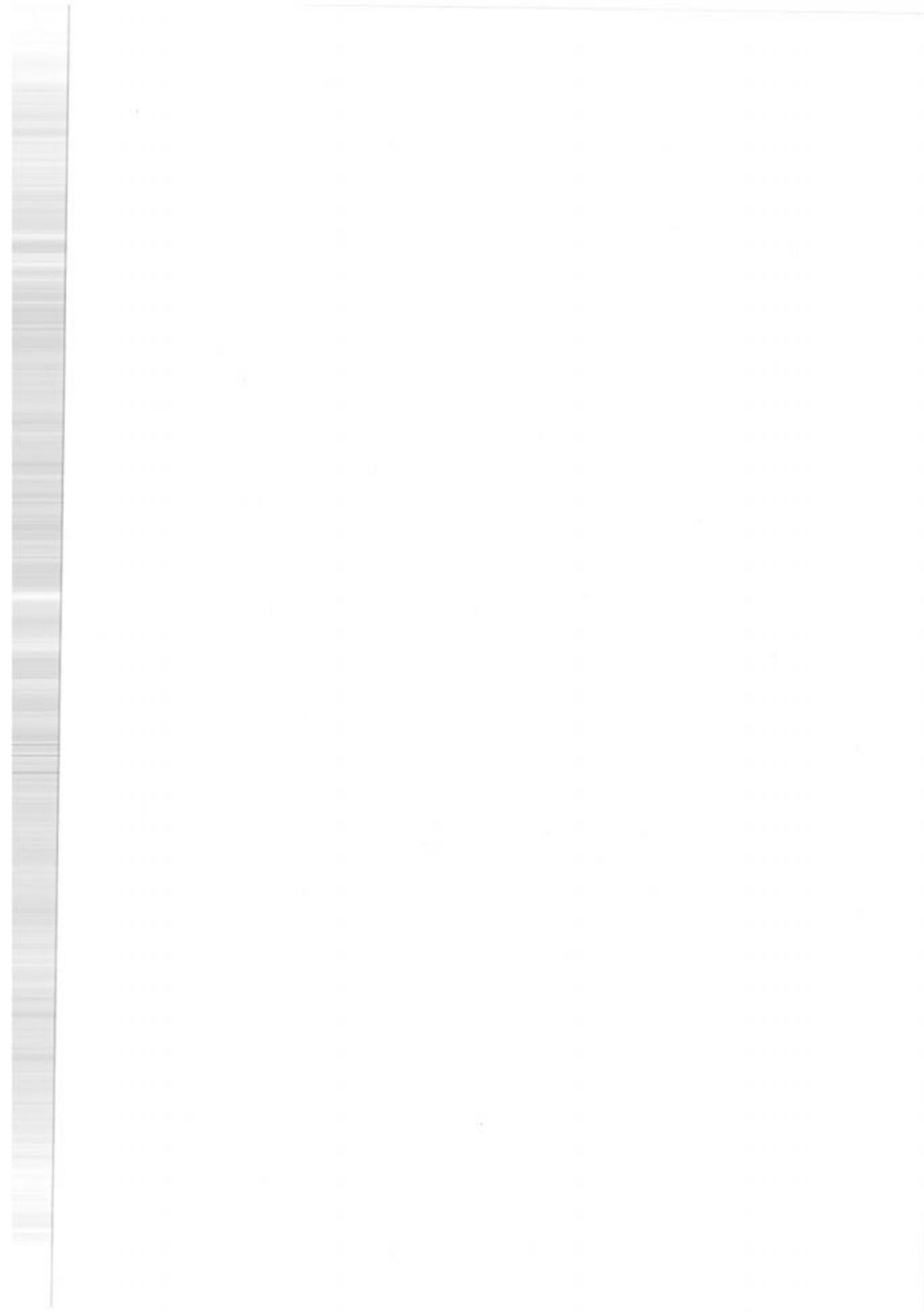
	地 形	標 高	集 落	土 地 利 用	その他の
A	高位段丘面 かなり侵食されている (小山田台地)	170m～180m	新興住宅 古い集落もある(路村)	侵食されたa. b. のところでは水田(ため池の利用)。段丘面は果樹園。崖は△。◎もある。	
B	中位段丘面				
C			な し		
D	石川の氾濫原 群小段丘をつくっている	110m～120m	な し	水 田	
E					
F					
G	小さな扇伏地	170m～140m	扇端部に4～5軒の古 い集落	果樹園、ため池を利用 した水田	わかり にくい
H		160m～210m	新興住宅	針葉樹、落葉樹	

⑲ 次の地名の起源について考えてみよう。（知識として知っていること、推測できること）

三日市 高向 水落 上原 野作 小山田

- ⑯ もう一度同じ場所で実習する場合、何を調べたいと思うか。
- ⑰ 実習してよかったです。悪かったことなどについて述べなさい。

岩城 一郎
白土 芳人
高木 正喬
田原悠紀男
富田 健治
西田 光男
場本 功



数 学 科

§ 1 本校数学科における中・高一貫教育

附属高等学校創設以来、数学科の研究課題は、中・高6ヶ年一貫のカリキュラムと指導のあり方にあったといってよいだろう。数学には数学の体系があり、基礎事項から順次論理的に組織立て体系を作っていく。ある内容を指導するとき、それ以前に学習したことが十分理解され、応用されるようになっていなければ学習効果は上がらない。従って、各教材が有機的なつながりを持つような無理のない系統的な配分が重要となる。一方、この時期の生徒は心身ともに著しい成長期にあり、知的にも飛躍的に発達する。従って、数学教育も生徒の知的・心理的発達の段階に応じたものでなければならず、それが適切であることによって、問題の発見・把握と分析・洞察力の働きや論理的思考などの数学的な考え方を養うことができる。

数学の特性から見ても、生徒の成長発達の流れから見ても、中等教育の時期が前期の3年で区切られ、中途半端なまとめがなされるのは不合理である。全体を大人への基礎づくり、基礎がための時期ととらえ、一貫した理念のもと生徒の実態に即した系統的な数学教育が行われることによって、数量的解決はもとより、問題を整理し、見通しを立て、適確な判断ができるというように、現在を生き、将来につながる望ましい学習体験をさせることが出来るであろう。

§ 2 教育研究活動の概要

本校数学科教育の研究活動の昭和22年から昭和50年までの歩みについては、20周年・30周年記念研究集録（昭和50年度・第18集）に記載されているので、ここではその後の歩みについて述べることにする。

1 教育研究会

中・高数学科では、週1回定期的に合同科会をもち、中高6ヶ年でどのような指導をすべきか、我々の考えている数学教育とは何かなどについて話し合ってきた。昭和45年頃に、日々の授業から、学習指導要領に盛られた内容が多過ぎ、次から次へと教えることになって生徒は思考することができず、知識のつめ込みになってしまっているのではないか、また、各教材が広く浅く取り扱われて真の良さを知らせることができない、などの問題が提起され、数学教育がもっと満足がいくように、そしてもっと多くの生徒が数学を学ぶことに興味を持つようにしていくにはどうすればよいかということについて話し合った。これを契機に「教材の精選」をテーマとした中・高数学科教官全員による共同研究が始まった。

昭和50年までの経過は次の通りである。

第1期（昭和45年度）

各教材についてポイント、取り扱い等を各社教科書について比較検討した。

第2期（昭和46・47年度）

「数学Ⅰ」の内容・教材について意図・指導方法・関連、各教材の必要性などを分析検討した。

第3期（昭和48・49年度）

教材の精選を進めていくにあたって、数学教育の目的について検討した。

以上の研究のうち「数学Ⅰ」を中心として、昭和49年度第22回教育研究会で、精選の観点、具体的試案を発表・提案した。更に、以上の研究全体について、昭和50年度日本数学教育学会（大阪大会）で「教材・内容の精選について」というテーマで発表した。

昭和50～52年度では、中高の数学の教材を、次の5分野に分けて検討した。

- (a) 集合・論理・その他
- (b) 数・式・方程式・不等式
- (c) 図形・行列・ベクトル
- (d) 関数・解析
- (e) 確率・統計

その結果、いずれの教材にも良さがあり軽重がつけ難い、また、教材によっては更に内容を充実した方がよいのではないかといったことがあり、精選は難航した。そこで、原点に戻り我々は生徒に何を教えるのか、数学教育の目的は何かを考え、これだけは残すべきだというものにしほって精選教材の項目を具体化した。これが第4期で、この研究内容は、昭和52年度全国附属連盟第19回高等学校研究大会で発表・提案した。

第5期は、昭和53～55年度で、精選された教材を具体的に学年配当するに当たって、まず生徒が何を考えて数学を学んでいるかについて、その実態を把握するための調査をし、分析・検討して生徒の認識の面から探り、カリキュラム編成の資料とした。生徒の認識の仕方を把握することは教育上欠かせないことがある。数学科は以前からその研究を重ねてきており、昭和51年度第24回教育研究会では、数・式などについて生徒の認識を調査・分析して発表している。昭和53年度では、数学を学習することについてどのように生徒は認識しているか、現在までに学習した教材に対する認識はどうあるかという生徒の認識の面から、本校の中・高生徒全員を対象に3回の調査を実施し、その分析・考察を通して教材の精選を進めていった。この調査・分析は、昭和53年度第26回教育研究会で、「中・高一貫をめざして」を研究主題として発表し、更に、全国附属連盟第20回高等学校研究大会で「中・高一貫をめざして——生徒の意識調査からの精選の方向をさぐる——」というテーマで発表した。昭和54・55年度では、第4期に具体化した精選教材を、数学の立場（教材の系統性）と生徒の認識面（発達段階）の両面を考慮して中・高6ヶ年の一貫した教材の学年配当の試案を作成した。しかし、これには削除された教材の教育的価値とか、生徒の進学との関係といついろいろな問題点が残されている。生徒の認識面については、更に研究を進めるために生徒の数学に対する意識調査を新たに作成し、毎年実施することにして、第1回目を昭和54年12月～55年1月に実施した。以上のことについては、昭和55年度第28回教育研究会で「中・高6ヶ年一貫をめざして」を研究主題として発表した。

中・高6ヶ年一貫をはかるカリキュラムと、それに立脚した教科書作成を目指して続

けられてきた共同研究であるが、更に具体化するとなると、教師一人一人の考え方や持ち味に違いがあり、教材研究も必ずしも十分でない点があるなどから、全員での共同研究は一応終止符を打ち、これまでの研究を基礎として、ゆとりをもち充実した授業を設計すべく個人あるいはグループで研究することになり現在に至っている。この間、昭和57年度第30回教育研究会では、「授業の実際」をテーマに柳本・横田が公開授業を、乾・網が発表を行い、昭和59年度第32回教育研究会では、「認識を高める授業」をテーマに柳本・網が公開授業を、乾・本間が発表を行った。現在も個人あるいはグループによる研究が続けられており、毎日の授業の中で生かされ、意見交換によって更に高められるよう努力している。なお、意識調査については、その目的・利用などの疑問がでて、昭和59年以降実施していない。

2 大阪教育大学数学会

大阪教育大学数学会は、大学学部の教官と天王寺・池田・平野の附属幼稚園・小学校・中学校・高等学校の算数・数学科担当の教官および旧教官で構成され、算数・数学教育研究にあたっている研究団体である。毎学期、持ち回りで学内で例会をもち、授業や研究発表を通して互いに研鑽を深め、更に、毎年1回小学校部会・中学校部会の「算数・数学科教育研究発表会」を開催し、学外へ研究の内容・成果を発表している。

この10年間の数学会における天王寺中高数学科の研究活動は次の通りである。

昭和51年度は、49年度から始まった「教材の精選」についての研究の3年目であり、まとめの年であった。天王寺校舎は、第52回研究発表会で「式教材の精選」について発表し、その中で生徒の実態に即し生徒の能力を育成する教育の重要性を述べている。また、49・50年の研究の継続として、平野校舎と共同で「関数教材の精選」をテーマに実態調査と指導実践の報告と、関数指導の重点と精選、を発表した。更に、本間は、中学校の幾何教材の指導あるいは精選の一助にと「高等学校における幾何教材」について報告した。

昭和52年に小学校及び中学校の学習指導要領が改訂されたが、共通していえることは、数学教育の形式的現代化への反省をふまえ、系統性を重視して内容を精選・集約したことである。また、中学校の内容は、高等学校への継続が意図されているといえよう。(高等学校の学習指導要領は昭和53年に改訂され、数学Ⅰだけが必修となつたが、これは、小・中合わせて数学Ⅰの内容が一応の到達点であると考えられる) 数学会では、算数・数学の内容を小学校・中学校・高等学校のそれぞれの立場から見直し、小・中・高一貫を目指して問題点を解明すると共に、発達段階に応じた内容と指導方法を継続研究することにし、研究主題を「小・中・高の一貫性を目指して」と定めた。中学校部会では、数と式・関数・図形に分けそれぞれの分野を天王寺・池田・平野校舎が分担して研究を進めた。まず新指導要領の内容と問題点について、第53回(昭和52年)・第54回(昭和53年)研究発表会で発表した。続いて小・中・高の一貫を図る方向での研究に入り、第55回(昭和54年)研究発表会では、天王寺校舎は、数と式の分野での実践上の問題点と小・中・高一貫についての問題点を発表したが、その中で指導内宮の一貫は当然として、生徒の考え方や教材のとらえ方など発達段階をふまえた小・中・高の一貫を図ることの必要性を指摘した。昭和55年度は、まとめて、第56回研究発表会を小学校部会・中学校

部会合同で開催し、幼稚園から高等学校までの同時公開授業を行った。数と式分科会では、天王寺小学校は矢谷、天王寺中学校は中田が小・中・高一貫における問題点と小・中・高の指導内容の関連について発表した。

昭和56年度からは、日々の授業を充実させることに主眼をおき、「指導内容の検討と指導の工夫」を研究主題として研究し今日に至っている。天王寺校舎は、数学的活動(生徒が自らの経験の中で数学を作り、また、数学を知る活動)を取り上げ、第57回(昭和56年)では確率、第58回(昭和57年)では図形、第59回(昭和58年)では文字と式について発表した。昭和59年度は、第60回を記念して「幼・小・中・高の相互理解を中心に」をテーマに幼稚園から高等学校までの公開授業を行い、発表協議は小学校部会と中学校部会に分かれて行った。中学校部会は、文字と式・量と測定・図形の3分科会とし、天王寺校舎は、文字と式分科会で小・中の関連を中心に発表した。なお、第60回を記念して第51回～第60回の全指導案を1冊にまとめた数学会研究資料集が作成された。第61回(昭和60年)研究発表会では「パソコンと数学教育」をテーマに、柳本がパソコンを利用して「資料の整理」の授業を行い、乾・本間が研究発表した。天王寺校舎では、以前から数学の学習をより効果的にするために電卓やパソコンを利用できているが、実践研究を通して有効性とともに問題点を指摘し、今後の課題を示した発表であった。参加者が多く、熱心であったが、これはパソコンに対する関心の高さを示すものであろう。

なお、数学会の研究に対して、教育方法等改善研究の経費が昭和52年度から3ヶ年間交付され、各年度毎に研究発表会の内容を中心にして研究紀要を作成した。大学と附属幼・小・中・高が協力して教育研究を継続して行ってきたことが評価されたものであり、今後の数学教育界の趨勢を考えるとき、大阪教育大学数学会の使命は、ますます重大となるといえよう。

3 全国附属連盟高校部会教育研究大会・近畿附属連盟中・高研究部会

ここ10年間で、全附連高等学校研究大会数学部会が開催されたのは、第19回(東京教育大学附属高校)、第20回(広島大学附属高校)、第24回(お茶の水女子大学附属高校)、第25回(金沢大学附属高校)の4回である。

第19回(昭和52年10月28・29日)では、「中・高一貫をめざして」をテーマに、第20回(昭和53年10月27・28日)では、「中・高一貫の教材化をめざして——生徒の意識調査から精選の方向をさぐる——」をテーマに研究発表した。これらは、すでに本校主催教育研究会のところで述べた。共同研究が発展的に終止符を打って以来、一人一人の教師が研究テーマを設定して、それぞれの研究を進めているが、その内容について第24回、(昭和58年10月21・22日)では、本間が「新課程数学Ⅰの関数指導より」をテーマに、第25回(昭和59年10月26・27日)では、平林が「中学生が収集した統計資料についての考察——中学校数学「資料の整理」の授業に関連して——」をテーマに発表した。

近附連算数・数学部会は、毎年開催され、各校の研究活動を中心に情報交換を行っている。天王寺校舎が当番校になった昭和55年度には、情報交換に加えて「数学科教育と教育実習について」をテーマに研究協議を行った。資料として「附属学校において、算数・数学科教員志望の学生に対し、より充実した教育実習を行うことは極めて大切であ

り、そのためには、学部における算数・数学科教育を充実させるとともに、附属学校における教育実習を効果的に行うことが必要である。」という主旨で、事前に各附属学校（幼・小・中・高）に対してアンケート調査を実施し、その結果をまとめた冊子を作成した。各校それぞれの事情があり、また、十分な時間をとることができず、結論を得るに至らなかったが、幾つかの問題点が明らかになったことは、改善のために有意義であった。

§ 3 教育研究活動のあゆみ

本校における数学科の研究活動に関して、ここでは本校主催教育研究会と大阪教育大学数学会主催算数・数学科教育研究発表会についてのみまとめ、その他については資料の収集をし、保管をしておく。（敬称略）

1 教育研究会

第1回教育研究会（昭和23年12月10日）	(数学科第1回)
主題 ガイダンス並びに単元学習	
第2回教育研究会（昭和25年2月3日）	(数学科第2回)
主題 ガイダンスの組織と実践	
第3回教育研究会（昭和25年12月1日）	(数学科第3回)
主題 ガイダンス計画の立案と展開	
第4回教育研究会（昭和26年10月31日）	(数学科第4回)
主題 中学校教育の全体計画と実践	
第5回教育研究会（昭和27年7月3日）	(数学科第5回)
主題 独立後の教育の在り方とその実践	
第6回教育研究会（昭和28年11月13日）	(数学科第6回)
主題 個人を育てる教育活動	
第7回教育研究会（昭和30年10月26日）	(数学科第7回)
主題 個人を育てる教育	
第8回教育研究会（昭和35年6月27日）	(数学科第8回)
主題 中・高通しての学習指導の問題について	
第10回教育研究会（昭和37年6月28日）	(数学科第9回)
主題 新指導要領について	
第12回教育研究会（昭和39年11月19日）	(数学科第10回)
主題 図形における論証指導について	
第16回教育研究会（昭和43年10月17日）	(数学科第11回)
主題 教材分析について	
第18回教育研究会（昭和45年10月22日）	(数学科第12回)
主題 高等学校の新指導要領の問題点	
第20回教育研究会（昭和47年11月16日）	(数学科第13回)
主題 高校新指導要領の問題点・その2	

——新数学Ⅰの内容の取扱いについて——

第22回教育研究会（昭和49年11月12日） (数学科第14回)

主題 教材の精選——数Ⅰの内容について

第24回教育研究会（昭和51年11月17日） (数学科第15回)

主題 生徒の認識をふまえた数学教育

授業 乾 東雄「二次方程式」（中3）

発表 松宮哲夫・中田孟邦・乾 東雄

「生徒の認識をふまえた数学教育——数・式 他——」

協議 岡森博和（本学） 北川英夫（松原中） 三杉正邦（生野中）

寺田文治（大阪府科学教育センター） 綱 健三 松宮哲夫

司会 中田孟邦

講演 岡森博和「数学教育をどのように考え、実践するか」

第26回教育研究会（昭和53年11月15日） (数学科第16回)

主題 中・高一貫をめざして

——中・高生徒の数学に関する意識について——

授業 平林宏朗「集合の濃度」（高1）

発表 乾 東雄・横田稔良

協議 高橋陸男（本学元学長） 三輪辰郎（本学） 司会 本間俊宏

講演 三輪辰郎「数学教育の新しい方向と教材の精選」

第28回教育研究会（昭和55年11月19日） (数学科第17回)

主題 中・高6ヶ年一貫をめざして

——生徒の意識調査と教材編成の試案——

授業 乾 東雄「関数」（中2）

越智治躬「関数」（高1）

発表 中田孟邦「教材の編成について（経過と試案）」

講演 笹田昭三（鳥取大）「中・高一貫カリキュラムと指導法の改善」

協議 数学教育の現状をめぐって

三輪辰郎（本学） 笹田昭三（鳥取大） 司会 平林宏朗

講演 三輪辰郎（本学）「中等教育における数学の位置」

第30回教育研究会（昭和57年11月17日） (数学科第18回)

主題 教材の精選

——授業の実際——

授業 柳本 哲「図形と論証」（中2）

横田稔良「論理」（高1）

発表 乾 東雄「授業の実際（中学校）」

綱 健三「授業の実際（高等学校）」

司会 平林宏朗

講演 峰 節子（本学）「ソビエトにおける数学教育の最近の動向」

第32回教育研究会（昭和59年11月14日） (数学科第19回)

主題 認識を高める授業

授業 柳本 哲「関数の導入」（中1）
網 優三「虚数の認識」（高1）
発表 乾 東雄「文字概念の育成——文字のもつ意味と生徒の認識——」
本間俊宏「導入——解析教材を中心にして——」
協議 岡森博和（本学） 松宮哲夫（本学） 司会 横田稔良

2 大阪教育大学数学会

ここでは第30回からの研究主題と、第52回からの本校教官による研究授業と研究発表についてのみまとめる。（敬称略）

第30回（昭和29年4月27～28日）

主題 学習指導の問題

第33回（昭和32年6月28日）

主題 学習指導の問題点

第34回（昭和33年9月17日）

主題 数学科学習指導要領改訂案と学習指導

第35回（昭和34年9月23日）

主題 数学科教材の系統的な発展体系

第36回（昭和35年5月24日）

主題 改訂指導要領における指導の留意点

——主として図形教材について——

第37回（昭和36年5月18日）

主題 新教材の指導法ならびに取扱いの程度

第38回（昭和37年5月10日）

主題 新教材の指導

第39回（昭和38年5月10日）

主題 関数教材の指導

第40回（昭和39年5月27日）

主題 代数教材取扱いの新しい試み

第41回（昭和40年5月25日）

主題 指導しにくい図形教材の扱い方

第42回（昭和41年7月4日）

主題 中学校における数学教育の現代化

第43回（昭和42年5月18日）

主題 数学教育の現代化について

第44回（昭和43年5月23日）

主題 数学教育の現代化について

第45回（昭和44年5月22日）

主題 改訂指導要領の問題点

第46回（昭和45年6月25日）

主題 改訂指導要領における新教材の取扱い方

第47回（昭和46年6月24日）

主題 新教材指導上の問題点

第48回（昭和47年6月22日）

主題 新教材の指導

第49回（昭和48年6月21日）

主題 新教材の指導の問題点

第50回（昭和49年6月20日）

主題 教材の精選をめざして——内容の程度と系統——

第51回（昭和50年6月26日）

主題 教材の精選について——内容の程度と系統——

第52回（昭和51年6月25日）

主題 教材の精選をめざして

授業 横田稔良「三角関数」（高1）

発表 乾 東雄・中田孟邦・松宮哲夫「式教材の精選」

仁張茂宣・檜本昌彦（平野）

中田孟邦・松宮哲夫

「関数教材の精選」

本間俊宏ほか「高校における幾何教材」

第53回（昭和52年6月30日）

主題 小・中・高の一貫性をめざして

——新学習指導要領案の内容をどう受けとめるか——

授業 乾 東雄「連立方程式の解の意味」（中2）

発表 松宮哲夫・中田孟邦・乾 東雄「数・式について」

第54回（昭和53年6月22日）

主題 小・中・高の一貫性をめざして

——新学習指導要領の内容の受けとめと指導上の留意点——

授業 乾 東雄「不等関係の問題の方程式による解決」

発表 中田孟邦「数・式について」

第55回（昭和54年6月20日）

主題 小・中・高の一貫性をめざして

——実践上の問題点をさぐる——

授業 乾 東雄「文字式を用いた論証」（中2）

本間俊宏「分数関数」（高1）

発表 松宮哲夫「数と式について」

第56回（昭和55年6月19日）

主題 小・中・高の一貫性をめざして

——三校種間の相互理解を中心——

授業 乾 東雄「連立方程式の解法」（中3）

網 倭三「符号法則（マイナス）×（マイナス）=（プラス）について」

発表 中田孟邦「数と式領域における一貫性について」

第57回（昭和56年6月25日）

主題 指導内容の検討と指導の工夫（1）

授業 乾 東雄「確率」（中3）

発表 中田孟邦「確率概念を育てるための一考察」

第58回（昭和57年6月24日）

主題 指導内容の検討と指導の工夫（2）

授業 柳本 哲「三角形の合同条件」（中2）

発表 乾 東雄「数学的活動を生かした指導」

第59回（昭和58年6月23日）

主題 指導内容の検討と指導の工夫（3）

授業 柳本 哲「文字の役割」（中1）

発表 乾 東雄「文字と式の指導について一考察」

第60回（昭和59年6月21日）

主題 指導内容の検討と指導の工夫（4）

——幼・小・中・高の相互理解を中心——

授業 乾 東雄「数量と文字式」（中1）

発表 柳本 哲「文字と式」

第61回（昭和60年6月20日）

主題 指導内容の検討と指導の工夫（5）

授業 柳本 哲「ヒストグラム」

発表 乾 東雄・本間俊宏「パソコンと数学教育——授業の中におけるパソコンの利用——」

§ 4 今後の課題

教育の目的は人間育成にあり、我々はこれを常に念頭に置きつつ日々の教育に当たり、また、より望ましい数学教育を求めて、中・高一貫してどのような内容をどのように指導すればよいかを、数学の面と生徒の認識面を並行させながら研究してきた。これは、生徒の実態に合った数学教育を進めるためである。生徒の実態は固定したものでなく常に変化しているからこの研究には終わりがない。生徒の興味・関心・必要に応じた、あるいは、教育機器を積極的に活用するなどしてそれらを喚起するような教育を心掛けつつ、より科学的に研究を進めることが望まれる。

ところで、学校数学は純粹数学そのものではないが、抽象性・一般性・形式性・論理性などを欠かすことはできない。これを教師が一方的に押しつけても生徒にとって無味乾燥であり、かえって数学嫌いにさせてしまうだけである。生徒が自分でじっくり思考し、自分で解決する過程において理解されるものであり、それが数学的な考え方の育成になる。従って、生徒の自発的な学習が必要であり、そのためには、生徒の発達段階に即した内容と適切な指導が求められる。特に、基礎の段階では、ふさわしい内容と適切な指導によって生徒の興味・関心が高められ、望ましい学習態度や習慣を身に付けることにつながるから、内容と指導法についての理論と実践の両面からの研究が必要であろう。一方、高校段

階では、進学との関係から様々な問題ができている。学校生活のあり方をよく理解させるとともに、自学自習の態度を養い、学ぶ喜びを味わうことができるようにするにはどうすればよいかもまた研究されるべきことであろう。

一人一人を大切に教育することが本校の6ヶ年一貫教育の基本理念であり、数学科の伝統でもある。教師と生徒のふれあいを基礎にして、生徒の認識と教育実践の質を如何に高めるかが課題である。

乾 東雄
越智 治躬
西谷 泉
平林 宏朗
本間 俊宏
柳本 哲
横田 稔良

理 科

§ 1 理科教育

1 物 理

(1) 指導要領の改訂と物理教育

前回の学習指導要領の改訂は、科学技術の進歩、高度成長の経済・社会を支える教育として、教育の現代化を目指したものであった。従来の知識注入、網羅主義への反省から、科学の立場から基本的科学概念として、物質とエネルギーを中心概念とし、「探究の過程」を重視し、知識を集積するというよりは、むしろ科学的方法の把握に重点を置くものであった。しかし、進学率の著しい向上に伴い、生徒の能力、適性・進路などが大幅に多様化されて来たため、①生徒の実体に応じた多用な教育課程の作成、②人間尊重の精神に基づいた教育本来の姿の具現、③ゆとりある教育、④勤労体験學習の重視、を基本方針として、知育、德育、体育の調和のとれた豊かな人間性を育てることを強調して、学習指導要領が改定され、中学校では、昭和56年、高等学校では昭和57年共に4月1日より施行されることになった。特に小・中学校では、ゆとりある教育が改善の最大のテーマであった。

本校では、この改訂の主旨に則り、理科の目標を「観察・実験などを通して、自然を探求する能力と態度を育てると共に、自然の事物・現象についての基本的な科学概念の理解を深め、科学的自然観を育てる」と定め、中・高における理科カリキュラムを次のようにした。即ち、中学校では、理科授業を4時間とし、高等学校では、高1で理科Ⅰ 6単位、高2で理科6単位とし、高3では、物理、化学、生物、地学各2単位のうち、1科目または2科目を選択することにした。ほとんどの高校生が大学進学を目指している本校としては、高2からの選択は、生徒達の学習の深さ、広さから考えて早過ぎるという事、また、理科の大重要な事項、大切な考え方も全生徒に指導したいという事から、高2までは必須とした。従って、高校物理分野についていえば、高1理科のなかで1単位、高2で2単位、高3選択で2単位で合計5単位となる。一方、学習内容の精選という立場から物理の基礎からはずれた内容に発展するおそれのある項目は削除された。そのため応用物理的分野が少なくなり、学習内容が日常生活に直接つながらないことになり、生徒達の物理離れの一因になっている。このことは、指導要領のねらう、自然と人間の関り合いを重視することに反することにもなる。物理ではこういった点も配慮して、日常生活と学習内容のつながりも大切にし、更に高等学校では、物理学の持つ哲学性をも生かした授業の展開を考えている。こういった観点から、中・高を通した理科カリキュラムをまとめ、研究集録第26集（昭和58年度）に発表した。

(2) 実験指導

理科はいうまでもなく、自然を対称とする教科であり、観察・実験を通して学習し

ていくことは当然のことであり、今までにも、「中・高を通しての基本的実験操作の指導」「探究の過程を大切にするための実験指導」等の研究を進め、教育研究会等を通じて発表して来た。現在、新課程における「中・高を通した物理実験」について検討を重ねている。一方、学校で行う実験は、一導入のため、法則性を見出すため検証のため……等いろいろ目標に従って行われるが、それらはいずれの場合でも、与えられた器具を用い、与えられた方法で（実験書に従って）行われる、いわば指導者側で作った過程一探究の過程一をたどることになる。科学の方法の一つの型というか、一つの考え方を学習することは非常に大切なことはいうまでもないが、生徒一人一人には、自身の探究の過程があり、十分に時間をかけて、試行錯誤を繰り返し実験していくなかで、現象の理解、知識の定着、総合的理解等が育まれていくのである。このような観点から、高校では「自由実験」、中学校では「動くおもちゃ」「卒業実験」といった形で、グループでテーマを選び、実験・考察を行ってレポートを提出するといったものを行っている。

(3) 研究発表等

- 教育研究会（昭和56年11月11日）

「物理実験の指導について」—中・高の関連を中心に—という研究主題で、中学校第1分野「物体の運動」を中3で、高等学校物理Ⅰ「力と加速度」を高1で、辻と武田が研究授業を行い、中・高の発達段階に応じて「力学分野をどのようにとり扱えばよいのか」を発表した。ついで研究協議では、「主体的に取り組む物理実験について」、中・高の立場から発表した。指導講師としては、府教委指導二課の林寿夫先生、指導一課の綱島先生、本学物理学科の下村教授をお招きした。また、中部工業大学教授の勝守先生には、「物は何からできているか（素粒子の構造）」の演題で講演をいただいた。

- 全附連高等学校部会（昭和56年第23回お茶の水大学附属高校）

(昭和57年第24回愛知教育大学附属高校)

「主体的にとりくむ物理実験」について、新指導要領が実施されることもあり、また、生徒達の体質の変化といったこともあるって、この機会に今までの成果を整理し発表した。

(4) 大学・大阪市・大阪府との連繋

本校は、大学の附属校であり、研究学校として、教育実習学校として、大学と一体になって、教育の理論および現場の教育の実際に関する科学的研究を行うという使命を持っている。昭和56年より、中学校、高等学校の立場から本学の学生の指導に当たって来たが、昭和57年よりは、大学の物理実験学の講座の中で、中学校・高等学校の実験を通した学習指導を行っている。また、辻は大阪府中学校理科教育研究会の幹事として、また全中理理事として、また武田は大阪府高等学校理化研究会幹事として、研究に参加している。

(5) 今後の課題

昭和50年代に入り、大阪府理化研究会で、生徒の学習意欲の低下、物理離れといった問題がクローズアップして來た。本校でも、高等学校では授業中は、ただノートをとるだけであり、学習内容を授業中に理解しようとしない生徒が多くなって來た。

そして、物理を実験・観察を通して学習する教科としてではなく、結果を暗記するというか、知識を吸収する教科としてとらえる傾向も現れて来ている。我々は、こういった生徒の体質の変化に対して、生徒達の学習意欲を高めるため、中・高6ヶ年を通した学習内容の再検討、実験内容の検討、実験の基本操作の発達段階に応じた指導等更にコンピューターシミュレーション等の利用による学習効果の問題等を検討していくねばならない。

2 化 学

昭和47年度から中学校、昭和48年度から高等学校において、いわゆる探求の過程を重視する学習指導要領が実施された。

- (1) 昭和50年度の第23回教育研究会において、教材の選び方として、生徒の興味や関心のあるものも考慮し、転移性の高い基本的学力を定着させることをねらった、中・高6ヶ年教育を有効に生かす指導計画を作成し発表した。その充実を図る為に、約1年半の時間をかけ、中学から高校低学年の生徒を対象にした副読本を作成出版した。それを中学校の授業で用いた。

昭和53年度から中学校において、「ゆとりと充実」の教育を目指して新指導要領での移行措置が始められた。昭和57年度からは高等学校においても新指導要領による教育が実施された。教材の精選の名のもとに、教材の切り捨て、順送りと、重複を避ける教材配列が行われた。本校では、理解しにくい内容はスパイラルで学習することが必要と考え、中学理科第一分野・理科I・化学の6ヶ年を通しての指導計画を再び検討すると共に、学習における生徒のつまずきに目を向けて教育実践して来た。

- (2) 昭和54年度 大阪府理科教育研究会 理科研究紀要 第9集 「イオン概念導入時の生徒のつまずき」、「イオン泳動実験法——寒天イオン泳動装置」を発表。

- (3) 昭和57年11月23日 第24回高等学校教育研究大会（愛知教育大）発表。
「中学・高校理科（化学分野）指導上の留意点——生徒の実態と用語についての一考察」 発表者 岡 博昭、井野口弘治、桜井 寛

- (4) 昭和58年11月16日 第31回教育研究会

テーマ「つまずきを少なくする中・高化学分野指導の試み」

○研究授業 中1 「鉄と硫黄の反応」 授業者 岡 博昭

〈目標〉実験により、加熱すると2つ以上の物質が化合することを確認させ、化学変化の理解を深めさせる。更に、加熱の意味を追求させ、温度による反応の激しさの違いに気付かせる。また、化学変化には熱の出入りが伴っていることを見出させる。

○研究授業 高2 「反応熱」 授業者 井野口 弘治

〈目標〉反応に伴う反応の系の温度変化は、内部エネルギーの形態の変化によることを知らせ、発熱反応・吸熱反応を理解させる。また、反応熱の定義とその意味するところを把握させる。

○発表と協議——つまずきを少なくする中・高化学分野の指導——

実験ノートを用いての授業 発表者 岡 博昭

資料 中1化学分野実験集、本校中・高6ヶ年の化学分野カリキュラム、実験ノ

ートによるレポート

生徒の実態と熱化学方程式の指導 発表者 井野口弘治

資料 中学・高校理科（化学分野）指導上の留意点、中学・高校理科（化学分野）に関する生徒の実態

指導講師 森 泰先生（大阪教育大）、小出 力先生（大阪教育大）

（主旨）生徒がつまずく原因の一つに、化学での言葉遣い、用語の問題があり、あいまいさのない概念を持つ用語の使用が、生徒の実態の適切な把握と共に重要である具体例の紹介。つまずかせないための教材配列、家庭学習をも取り込んだ実験中心の授業形態、化学分野における熱概念形成のための展開例を試案として発表した。

○講演 「化学熱学の窓から覗いた物質系」小出 力先生（大阪教育大学）

生徒の実態調査から明らかになったその他の問題点、すなわち、「物質」の認識の仕方や粒子性・不連続性の認識の実態、化学式やモルに関する理解の仕方の特徴、分子の存在状態の認識の具体性の欠陥などを改善する方策を課題として研究に取り組んで来た。

(5) 昭和59年度には、水の電気分解を利用して、定比例の法則、気体反応の法則が無理なく生徒の実験結果から導き出せるように指導法を改善した（本校研究集録 第27集に発表）。

(6) 昭和60年度には、より粒子概念の定着を目指し、粒子の大きさと空間中の数に関する調査及び指導法の工夫を行った（本校研究集録 本号（28集）に発表）。

また、大阪府理化研究会化学委員会とも連絡を密にし、実験中心の授業の実践に努力している。実験指導では中学校低学年より基礎操作を徹底指導し、高校ではそれを応用発展させることによって、論理的に進める主体的な思考活動が学習の中核となるようにしたい。

(7) 昭和59年度には、実験指導中に見つかった現象から、普段何げなく用いている蒸留水・水道水についての研究、強酸性における指示薬の呈色の研究を行った（本校研究集録 第27集に発表）。また、生徒の実験希望には出来るだけの援助を行っている。

その中で「納豆菌によるグルタミン酸ポリペプチドの形成」などの中学生の研究が生まれた（日本化学会 化学教育Vol.34No.1 小中高のページに掲載）

昭和60年度には、大阪教育大附属の中学校・高校化学分野担当者の研修会を初め、情報交換、及び、菜嶋健夫先生（大阪教育大）による「中・高化学教育への希望」の講演と協議の2回の会を持った。

理科教育の改善を画る目的で、近藤精一先生（大阪教育大）と共に井野口弘治は、科学カリキュラム開発研究会を作り、児童生徒における科学概念の発達段階の調査と科学的思考力を養う科学教育の研究に取り組んだ（大阪教育大学理科教室研究施設 理科教育年報 No.5（昭56）～No.8（昭59）及び、日本理科教育学会研究紀要 Vol.22, No.3 (1981), Vol.26, No.1 (1985) に発表）。

3 生 物

中学校・高等学校6ヶ年一貫教育を進める中で、他の科目や教科との関連性を十分考

慮した上で、生物教材の在り方とその指導目標や指導内容を総括的に再検討して来た。小・中・高校の指導要領をみると、学習内容に多くの重複がみられる。特に中・高一貫教育の中ではこの重複が、時には生徒の学習の系統的一貫性の流れを淀ませる傾向がないでもない。このような立場に立って、まず、中学校の生物教材を高校とのからみの中で精選することから進めていった。これをまとめて、昭和51年10月に、全附連高校部会教育研究大会(金沢大附属高校)で「生物教材の中・高一貫に関する試案(1)」と題して発表した。

しかし、日常の授業を進める中で多くの問題点・反省点に気付き、少しづつではあるが手直しを続けていった。その間に、中学校は昭和56年度から、また高等学校は昭和57年度から指導要領の全面改定があり、これに即して更に検討を加えた。これについては、昭和59年3月発行の研究集録第26集「中学・高校を通した理科カリキュラム」の中で、生物分野として発表した。なお、このカリキュラムを作成する段階で、生物教育の目標を次の点に置いている。

1. 学習を通して、生物が生きている姿を実感として体得させること。
2. 生命現象を生徒の発達段階に応じてその原理や法則を理解し、生物進化の事実を把握し、生命の神秘性を感じ、生命への畏敬の念をいだかせること。
3. 破壊されてゆく地球上の自然の実体を正しく認識し、21世紀に向かって、生命維持の厳しい現状を地球レベルで理解し、自然と人間の関係に深く思いいたらしめること。
4. 将来、更に急速に発展することが予想される生命科学を、一般人として関心を持ち、多少なりとも理解しうる能力を身に付けること。

また、教材の配列に当たって、中学校・高等学校の教材の一部を入れ換えたり、統括しながらある程度の流れをつくるよう配慮した。その主要な留意点は、次の通りである。

1. 低学年で、出来るだけ多くの生物名に接し、その関連知識と共に覚えるようにした。
2. 中学校1年の教材は、中学校2年の春に実施する磯観察で、潮間帯動物の生態を具体的に観察実習するための予備知識としての配慮をした。従って、中学校1年の「生物の世界」の学習は可能な限り生きた教材を使用し、補助的に標本や生態写真などのスライドを利用する。
3. 「動物の行動」は、生徒の理解し得る内容で中学校3年に置き、「受容体及び神経系の構造と機能」の基本を併せて学習するようにした。
4. 「生態系と物質循環」は、その内容を深く理解するためには、生物の個体レベルでのエネルギー交代と物質交代の知識と理解が不可欠であることと、高等学校3年での「生物の集團」との密接な関連性から、これを統括して、高等学校3年の最後に位置させた。

さて、中・高一貫カリキュラムを作成する中で、前述のように生物分野での野外実習の必要性を痛感し、いろいろ検討した結果、中学校1年で学習する「動物の世界」のまとめとして『磯観察』を中学校2年の春に実施することに決定した。初年度は、昭和52年5月21日(金)に行った。場所は、和歌山県和歌山市加太町城ヶ崎である。その後も、毎年ほぼ5月の中旬に実施している。その間、53年度と60年度は雨天により中止したが、

多くの生徒や教官の方々からの強い要望があり、61年度からは予備日を設定して、出来るだけ実施する方向で検討している。本実習は、中学校・高等学校理科教官全員と理科助手の方々の協力と参加、更に中学校2年の学年担当教官の援助のもとに続けられている。なお、本実習の中間報告として、昭和57年3月発行の研究集録第24集に、「生物教材としての野外実習（予報）」と題して発表した。

この間、昭和54年11月14日の本校の教育研究会に、生物科は次のようなプログラムと内容で参加した。

主題：「野外における生物教育——小・中・高の現状——」

(1) 話題提起

小学校理科生物教材の野外学習 箕面市教育研究所長 岸 博幸先生

本校における野外実習の実際（中2） 大仲政憲

(2) 協議

指導講師 大阪教育大学教授 水野寿彦先生

指導講師 箕面市教育研究所長 岸 博幸先生

司会 浅野浅春

(3) 講演

「太陽と緑の熱帯アジアにおける動物生態」

大阪教育大学教授 水野寿彦先生

4 地学

地学科の目指すものの一つは、環境科学であり、歴史科学である。すなわち、我々が生かされている環境についての正しい認識を得ようということにある。その目的に沿っての教科活動が行われて来た。具体的には、気象分野においても、天文分野、地質分野においても実習、観察を抜きにしては考えられない。もっとも成果を挙げたと考えられるのは地質分野である。後述の野外実習の項で詳述するように、都市を地学教材として開発した。1978年（昭和53年）大阪教育大学紀要第V部門、第27巻、第1号に、「都市における地域地学教材の開発（第1報）—上町台地を中心とした地質教材—」のテーマで、次のような前書きの論文で、その成果を著した。

中学校における理科第2分野、高等学校における地学科は環境科学としての重要な役割を持っている。それでは、どのような教材を生徒に提供すればよいか。

この報告はそれに応えるべく、従来コンクリートで覆われ、ビルディングが林立しているがゆえに、あまり取り扱われてこなかった大都市に焦点を当てて教材を開発したものである。具体的には、上町台地の地史を考え、巡査コースを作った。その実践の結果は、主に第四紀の地史を扱うことから、人間との関連において、いろいろな問題、例えば古気候や古生物についても生き生きと学ぶ機会になったし、生徒自らが正しい自然観・歴史観をえる機会になったと考えている。

はじめに、(何故、都市を扱うか)

中学生・高校生に向かって地学教材を通して何を話すべきか、何を理解させようとするのか、どのような体験をさせたいのか、というような自問は常のことでありながら、答えることは難しい、いや、答えは出るが具体的に日々の授業をどう組み立てればよいか

ということが難しい。しかし、これは現場の教師にとって大切な役割である。さて、地学科が他の教科（物理・生物・化学）と共に持つ一方で、クローズアップされねばならない部分は歴史科学ということにおいてであり、環境科学という点においてである。そして大上段にかまえると、「生物の棲み処としての地球について、また地球が存在する空間に関して、ひいては宇宙に関して、その生い立ちを歴史的に解き明かすこと、それらの構成物質について研究すること、そして総合的に自然を正しく把握することにある」ということが出来る。あとは具体的に教材を掘り出し、中学生・高校生の自然認識を把握した上で、教材を提供することになる。もちろん、中学1年生と高校3年生とは比較にならないくらい知識量と思考の深さに違いがある。あるとき、中学1年生のある生徒に、「君の回りに見られる山々は、いつ頃出来たと思うか。」と質問した。その生徒は「百年前」と答えた。彼にとって百年は長い長い年月であって、逆算して明治時代であると知って答えたわけではなかった。つまり、彼にとって歴史、過去は全く生きていないのである。高校生の場合であると、生駒山はいつごろ、どのようにして出来たとか、六甲山はどうか、二上山はどうかとか、というように指導者が期待するものに近い答えが返ってくる。これは、中学以来身に付けた知識によることはいうまでもない。彼らは、教室や他の場所で得た知識や野外実習での体験を豊富に持っているのである。ところが、そのような彼らにとっても、コンクリートの舗装道路とビルディングの下のことについては、ほとんど関心を寄せていない。こちらが問い合わせれば、沖積平野とか、沈下しているとか答える。その程度である。つまり「地学とは、山へ出かけて切り通しを見て、何千万年も前や何億年も前に起こったことを考えるものだ。」ということになってしまっている。このことは、我々、指導者が、教材の対象外としてきたことによるのではないだろうか。では、環境科学として、歴史科学としての地学というところに注目すれば、どのような教材が必要になって来るのか。これに対する一つの試みは、露頭の無い都市をも地学の教材の中に組み込むことである。これは、大都市の中にある学校（我が校を含めて）にとっては重要なことだと思う。筆者等は、以上の点を考慮して我が校（大阪市天王寺区南河堀町）の建っている上町台地を対象として、講義を行った。以下はその実践の報告である。

以上の成果は、大阪府高等学校地学教育研究会による地質見学ルート案内の一として府下の高校生達に利用され、都市の地下について認識するきっかけを与えている。この地質教材の開発の成果は、その第2報が、大阪教育大学紀要第V部門、第28巻（1979年）、第1号に、第3報が、同じく第30巻、第1・2号（1981年10月）、地学教育、第36巻、第1号（1983年1月号）に著されている。

昭和52年の第25回教育研究会では、これら都市の地学をテーマとした研究授業が浅野と柴山によってなされ、それに関する研究協議が持たれた。なお、そのとき、神戸大の杉村 新先生による「プレート・テクトニクス」をテーマとする講演が行われ、多くの先生方に新しい知見をもたらすことが出来た。

地質分野以外では、月食の観察をもとにした「天体の運動について」をテーマとした研究や、降雹の際に、その地域がどのように移動したかを生徒の居住地域との関連でとらえた研究が成果を上げた。また、昭和60年度の第33回教育研究会では「雪氷の結晶を教材として何を教えることができるか」をテーマにした研究授業や研究協議がもた

れた。研究授業では「雲のできかた」と「氷晶の成長」をテーマとして行われたが、従来、理論だけで進めていた「雨滴の成長」を観察を通して、上空の雲の中で起こっている現象を理解しようとしたものである。なお、研究協議には、大阪教育大学の山下晃先生に雪に関する示唆に富む話をしていただいた。以下に、教育研究会便覧に掲載した「雪氷の結晶を教材として何を教えることができるか」についての著述の「まえがき」と「おわりに」を記してその精神を確認したい。

「まえがき」

日本列島の地理的・地学的な位置や構造がそれぞれの地域に獨得の風土をもたらし、そこに住む人々に獨得の思いをもたらす。雪に対する思いもその一つである。雪国の人たちにとっての雪とわれわれの近畿圏に住む者にとっての雪に対する思いは、かなり異なるものである。雪国の人たちは雪に苦しめられてはいるが、同時に雪からの恵みも認識しているという。われわれは、いかがであろうか。

さて、人工雪を最初に創ったのは中谷宇吉郎であるというのは衆知の事であるが、日本の風土が世界にさきがけて人工雪を日本人に創らせたともいえるのではないか。人工雪は直接には何の役にも立たない。この役に立たないものの研究が中谷以来、受け継がれているということも日本の風土によるものではないか。人工雪は科学する心・美を愛する心・遊び心から生まれたと思う。これらの心の融和するところに知恵が生まれるのではないか。

雪氷から多方面のことを学ぶことができるが、まず、自然との深い関わりの中で生まれる人間の知恵を学びたい。そして、雪氷に対する、いろいろな地域の人たちの思いを知ることが他地域の人たちの理解に役立ち、ひいては、己が地域の風土・文化の深い理解につながることを学びたい。

「おわりに」

一般的に言って、人の得る体験や知識は、単に学校生活や書物から与えられるものではなく、彼らが属している地域社会と自然から生々しく与えられる。その地域社会のことばは、その地域の気象の特色やそれらに対する土地の人々の認識の仕方をかなり明確に反映するものであるから、人は生まれながらにして、その環境に応じての学びをする。とりわけ、日本列島の地理・地学的な位置や構造が、それぞれの地域に独特の風土をもたらし、そこに住む人々に独特の思いをもたらすのである。そして、日常はその独特さを意識しないで己が風土の中で受け継がれてきた幾つかの伝統にのっとって生きている。それが文化でもあり、現在の情報化社会に於いてもその基本は変わらない。それでは、ある地域の風土や文化は他地域の人によっては理解され得ないであろうか。また、相互理解は不要なのだろうか。このことに関して、科学は、その理解を可能ならしめ、教育は、相互理解の必要性を説くのである。情報があるだけで、科学がなければ、決して相互理解とはつながらない。科学というものは、独特といわれているもの相互の中に共通性・普遍性を発見したり、一見つながりのないものの間に深い関連性のあることを教える。

「国境の長いトンネルをぬけると雪国であった。」そのトンネルの北の人たちと南の人たちとはトンネルというパイプでつながっている。この人たちは、そのパイプが、できたがゆえに相互理解ができるのだろうか。決してそうではなく、このトンネルを掘ら

ねば往来できない山岳地帯の存在の深い認識が雪に関する認識ともつながり、己が地域の風土のみならず他地域の風土や文化の理解の出発点の一つになるのだと思う。そして、そのことが人間相互の理解にもつながるのである。

自然科学としての雪を学ぶことと雪を通して人間を理解することの両方を指導者は忘れることが出来ない。雪を教材化するに当たって、それをとりまく世界の多様さと重要性を再認識するに至ったが、雪に限らず、気象分野の教材は、人間生活とその相互理解に直接結び付くという意味において、その持つ役割は大きい。

5 総合

昭和58年以來、大阪教育大学及び附属天王寺小学校と協同で、文部省国立大学・学部附属学校教育方法等改善研究として「自然認識の発達段階の調査と理科教育の改善の研究」を行ってきた。

本校では野外実習（地学）を実施して20年以上にもなるが、その中で、地層の立体構造の時間的変化の理解と表現を生徒に求めている。10年以上も前の野外実習において、生駒山を見ながら「あの山は、いつ頃出来たと思うか」との問いに、当時中1の女子が「100年前」と答えたことが本研究の出発点である。

天王寺の小・中・高の理科の教官が定期的に集まり、野外観察についての問題点を話し合った。その中で、児童・生徒の発達と合致して、適切な指導がなされて、有効な学習活動になっているかどうかの点検を行わなければならないということが問題となつた。

そこで、昭和55年度に調査を行い、次のような結論が出た。小学生では、高さと距離についての認識は、高学年程良く出来るが、全体としては不充分である。中学生では、空間的な広がりについての認識は、個々の生徒で大きな差がある。高校生では、空間認識度はやや高くなっているが、垂直方向の距離感覚は高学年でもかなりあいまいである。

しかし、調査が具体例を使っているため、学年が進むにつれてどのように空間的な概念を身に付けていくかを定量的に解決することが不可能であるという反省を得た。そこで、児童・生徒の空間的認識についての調査及びその育成ということについて話し合いを行い、昭和57年度から、2次元の平面に図示された3次元空間の理解の程度を知る目的で、アンケート調査を行った。

まず、昭和57年に、平面に描かれたものから立体像を想像出来るのは、小学校何年生ぐらいかを調べるために、附属天王寺小学校において予備調査を実施した。対象は、3年生～6年生の1クラスずつであった。この調査の結果、この方法は比較的有効な方法と結論出来たので、問題を補充追加して、中・高校でも実施できる形に修正した。

第1回目の調査は、昭和58年度に、附属天王寺小学校（3年生～6年生）各学年約120名、附属天王寺中学校（1年生～3年生）各学年約160名、附属高等学校天王寺校舎（1年生～3年生）各学年約180名、大阪府下公立高等学校（1年～3年）1年生45名、2年生64名、3年生88名も対象に調査を行った。

第2回目の調査は昭和59年度に、1回目の調査結果を補充、確認する目的で、附属天王寺小学校（3年生～6年生）各学年約120名、附属天王寺中学校（1年生～3年生）

各学年 160名、附属高等学校天王寺校舎（1年生～3年生）各学年約 180名、大阪府下公立小学校（4年生～6年生）各学年約45名、及び大学生（主に大阪教育大学の教育実習生）95名を対象に調査した。この2年間で調査した対象は、附属小・中・高校で、約3,000名、大阪府下公立小・中・高校で約450名、大学生95名で計 3,500名に及んだ。

この調査の問題は45問あるが、問題番号については特に考慮していない。およそ簡単なものから複雑なものという程度であった。解析については、正答率及び難易度を出した。これは、正答率の高いものから低いものへ問題を並べ、順位を付け、各学年で平均したものである。よって、値の大きいものほど正答率が高く、小さいものほど児童・生徒は考えにくいということになる。なお、これらデーターの処理の作業には、パーソナルコンピューター（NEC. PC-9800）を使用した。

この調査の方法及び結果については、昭和60年3月にすでに中間報告書を作成し、そこで詳しく述べられているので、ここでは簡単に触れる程度にしておく。

次頁の表は、第1回目の調査の結果で、各問題の学年別正答率を示している。特に顕著な傾向としては、半数以上の問題、特に23番以降の問題について、小学校6年生と中学校1年生との間に大きな正答率の隔たりがある。これは一般性を持っているのか、あるいはこの学年の特徴であるのかという疑問が持たれた。

その一般性を調べるために、第2回目の調査結果を検討したところ、多少の違いはあるが、中学校1年生付近で大きな正答率の隔たりが見られた。更にこれが附属の特質であるのかどうかという疑問も持たれたので、大阪府下公立の小・中・高校の調査結果を検討してみたが、附属と同じような傾向が見られた。

これについては、他の教科たとえば数学の幾何などのカリキュラム等について、詳しく調べてみる必要があるが、そのような外的要因が関与していないなら、ある概念の形成に関して連続的に成長するものではなく、ある時期に飛躍的に成長するものがあるということ、また、更に高等学校以上の年令に達すると成長しないものがあることを示唆しているように思われる。

更に、この一般性を裏付けるためには、他の概念についても調査する必要があるようと思われ、現在、この調査の細かい解析と、距離・数・エネルギー等についての概念形成の調査を進めているところである。

問題番号	学年										平均
	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	
1	88	96	94	95	100	99	98	99	99	99	97
2	56	68	59	69	87	87	95	94	95	94	80
3	95	94	96	100	100	99	100	100	97	100	98
4	47	59	44	56	77	82	86	89	88	85	71
5	92	99	90	93	99	98	98	97	97	97	96
6	92	90	87	97	98	98	98	97	95	99	95
7	68	65	59	59	78	87	90	91	95	93	79
8	68	81	79	95	97	98	98	96	97	98	91
9	24	19	22	29	70	71	76	78	82	74	55
10	99	98	96	97	98	99	100	99	97	99	98
11	96	98	98	100	97	99	99	98	97	99	98
12	99	94	91	95	98	98	98	99	97	98	97
13	23	21	24	35	65	67	70	75	73	72	53
14	21	25	28	24	35	29	32	38	33	32	30
15	86	93	83	88	92	95	94	97	95	98	92
16	67	67	62	68	60	79	77	62	73	84	70
17	70	56	62	70	63	59	67	57	69	59	63
18	66	85	92	84	97	98	96	94	95	98	91
19	52	36	34	40	55	57	63	64	56	64	52
20	90	94	91	92	98	98	98	99	95	100	96
21	30	35	44	44	65	53	58	45	50	61	49
22	94	94	87	90	95	98	96	98	96	99	95
23	61	62	67	61	73	72	72	74	70	79	69
24	40	43	44	44	56	59	54	59	51	66	52
25	33	54	42	60	85	88	92	91	85	97	73
26	68	66	66	66	89	93	92	97	91	98	83
27	43	29	42	36	66	67	76	78	64	87	59
28	54	50	57	51	82	85	90	90	90	93	74
29	40	39	40	52	68	51	55	75	66	73	56
30	64	73	70	66	88	93	93	92	93	98	83
31	6	10	22	13	21	20	18	25	24	30	19
32	16	25	24	26	55	50	46	43	42	53	38
33	11	12	20	30	45	51	51	63	65	80	43
34	19	19	25	26	58	63	63	67	52	77	47
35	57	56	59	71	91	96	94	96	92	99	81
36	43	54	58	78	91	97	94	95	91	98	80
37	57	63	74	66	84	92	95	91	83	88	79
38	57	74	57	70	90	92	93	95	84	93	81
39	69	77	55	72	89	90	92	89	84	89	81
40	57	72	66	66	92	94	98	96	87	96	82
41	59	69	65	62	99	99	96	97	93	100	84
42	57	72	59	68	87	91	96	88	92	94	80
43	55	49	58	54	89	95	94	90	88	80	75
44	86	81	68	76	94	95	97	98	95	98	89
45	49	46	43	42	81	83	82	88	72	83	67
46	33	19	17	13	53	62	65	59	60	61	44

§ 2 理科教育研究の歩み

本校における理科教育研究の歩みを、昭和51年より60年までについてまとめておく。次のものを主として記す。

本校教育研究会

全国附属連盟高校部会教育研究大会（全附連）

近畿附属連盟中・高研究部会（近附連）

本校の研究集録

なお、このまとめは、研究集録第18集（昭和50年度）における「理科 沿革史」に続くものである。

昭和51年	第18回全附連（金沢大附高） 「中高の生物教材の関連について」 発表者 濱谷 巍，大仲政憲 「天体の運動について」 発表者 浅野浅春，柴山元彦 『研究集録』第19集 「天体の運動」一月食を素材として 浅野浅春，柴山元彦
昭和52年	『研究集録』第20集 「地学野外実習について」 柴山元彦，浅野浅春 第25回教育研究会 「都市における地域地質教材の取り扱いについて」 研究授業「平野と台地」 中3 柴山元彦 研究授業「大阪の地史」 高2 浅野浅春
昭和53年	『研究集録』第21集 「地学野外実習について—その2」 ——生徒の評価と指導者の評価—— 柴山元彦，浅野浅春
昭和54年	第27回教育研究会 「野外における生物教育一小・中・高の実状」 本校における野外実習の実際 大仲政憲 府下中学・高校における野外実習の実状 浜谷 巍 「自然認識の発達段階の調査を始める。」
昭和55年	『研究集録』第23集 「地学野外実習について—その3」—野外実習評価 柴山元彦，浅野浅春 「マイクロコンピューターを導入した 授業分析用録画装置の開発とその利用」

		濱谷 巍, 井野口弘治 第23回全附連（筑波大駒場） 「主体的にとりくむ物理実験について」 武田和生 「都市における地学——大阪市内を例として——」 柴山元彦, 浅野浅春 『研究集録』第24集 「主体的にとりくむ物理実験について」 武田和生, 辻 退一 「生物教材としての野外実習—観察」 大仲政憲, 濱谷 巍 「アフリカ・リフトバレーの教材化」 浅野浅春
昭和56年		第29回教育研究会 「物理実験の指導について」 ——中・高の関連を中心に—— 研究授業「物体の運動」 中3 辻 退一 研究授業「力と加速度」 高1 武田和生
昭和57年	井野口弘治 中学専任から高校専任に配置換え 岡博和着任	第24回全附連（愛知教育大） 「主体的にとりくむ物理実験について」 武田和生 「中・高理科（化学分野）指導上の留意点」 —生徒の実態と用語についての一考察 井野口弘治, 櫻井 寛, 岡 博昭 『研究集録』第25集 「中学・高校理科（化学分野）に関する生徒の実態」 櫻井 寛, 井野口弘治, 岡 博昭 「降竜域とその移動（1982年6月21日）」 一本校のような広域通学範囲を利用して— 柴山元彦
昭和58年		第31回教育研究会 「つまずきを少なくする中・高化学分野指導の試み」 研究授業「化合」 中1 岡 博昭 研究授業「化学変化と熱」 高2 井野口弘治 『研究集録』第26集 「中学・高校を通した理科カリキュラム」 浅野浅春, 井野口弘治, 大仲政憲, 岡 博昭, 櫻井 寛, 柴山元彦, 武田和生, 辻 退一, 濱谷 巍

	「つまずきを少なくする中学・高校理科（化学分野）の指導の試み」 櫻井 寛, 井野口弘治, 岡 博昭 「小・中・高生の発達段階における自然認識の調査と理科教育の改善への試み」をテーマとするプロジェクト研究を、文部省教育方法等改善経費によって始める。 『研究集録』第27集
昭和59年	「つまずきを少なくする中学・高校理科（化学分野）指導の試み——水の電気分解を素材として——」 岡 博昭, 井野口弘治, 櫻井 寛 「蒸留水と水道水」 井野口弘治, 岡 博昭, 櫻井 寛 第33回教育研究会 「雪氷の結晶を教材として何を教えることができるか」 研究授業「雪のできかた」 中2 浅野浅春 研究授業「水晶の成長」 高2 浅野浅春
昭和60年	

§ 3 野外実習

1 地学実習

地学分野においては、高校は1965年から中学は1969年から理科全教官と地学部の卒業生の手で行われて来た。

生物分野においては、52年から中学2年生を対象に行われて来た。

(1) 中学校

1969年には中学1年生を対象に、また1970年から1974年までは3年生を対象に摂津峡において行われて来た。この内容については20周年冊子に記されているので、ここでは、1978年以後に行われた3年生を対象にした上町台地付近の野外学習について記す。

○野外実習の方法

1) 地学野外実習用ノート作製

中学3年生の2学期に「大地の変化」を学ぶが、この中で「地形と地殻変動」の項があり、これと関連させるために上町台地の野外実習を行うことにした。しかし、学校から歩いて2時間以内に終えるという時間制限があることと、野外実習に慣れていないということを考慮して、彼等自身が実習コースでの観察の要点を読み、それに従って観察スケッチしたり、1/5000の縮尺の地図上に坂の向きや傾斜の違いを矢印とその長さで記入出来るようになっている実習用ノートを作成した。ただ見学・観察したことだけでは能力の差が出過ぎてしまうことがある。すなわち、何を、どう見て、どのようにノートするかは難しいことである。すなわち、このノートは個別の生徒が同じ約束のもとで観察したことを記入し、少し定量的思考を進めるには、

正しい観察の重要性を認識させもできるというところにある。

2) 実習用ノートの概要

- ・大阪での上町台地の位置と地形的特徴の分かる図。
- ・観察事項の内容。
 - 例・台地の西斜面の急崖の高度差の観察（神社の階段の数を数えることによって知る）。
 - ・地下水の流れであるようすを見学し、記入する。
 - ・地層のようすをスケッチする。
 - ・寺の墓地にある種々の岩石の観察（江戸時代からの上方芸能人の墓を集めており、おもしろい形の墓がある）。
- ・野外実習のまとめをするページ。

3) 野外実習の実施

中学3年生4クラスについて11月に野外実習を行った。コースは学校から出て2時間以内で帰ることのできる範囲とし、上町台地の地形の特徴が観察でき、また地層および地下水もみることの出来るコースを決めた（実習コース①～④……図3及び図4参照）。実施に当たっては、1日に2クラスとして、3班（1班27名）に分かれそれぞれの班に教官1名ずつついて指導に当たった。1班10名くらいで行うのが理想的かも知れないが、指導者の数が揃わなかった。今後の課題でもある。

○まとめ

野外実習ノートの最後のページに感想文を書く欄がある。160人分を読んでみると次のような傾向に分けられる。

- ・上町台地を実際に歩いてみると意外と起伏が多いことに驚いた。
- ・身近な所にこのような地形があることを知った。
- ・都会のビルやアスファルトの所が、海底だった時のことを自分なりに想像できて楽しかった。
- ・教室で学習したことが実際に自分の目で見られてよかった。
- ・自分の住んでいる大阪の町について、改めて見直すことが出来た。
- ・今まで何とはなしに見のがしてきた坂や傾きに気が付いた。
- ・都会の中のほとんど目につかない痕跡を辿って、それがこういうことなどと資料と合わせていくというのは、一種のなぞとき的な面があり、ぞくぞくして楽しかった。

以上のような感想文にあるように、中学生の場合は、小学生にくらべて爆発的に知識量が増えるかわりに経験が伴っていないというアンバランスがあり、個々の生徒の中では、それがなんとなく落着きの悪い状態で存在しているが、この実習では、そのアンバランスの一部でも解消できたようである。さらに高校・大学と進むにつれて知識量がはるかに多くなっていくが、その過渡期にあたる中学生の場合は、やはり体験が重要なのであろう。

○実施要項

1. 日的 本校周辺の地形観察（台地と平野）と地層観察
2. 日時 昭和60年12月16日（月）
1・2限（A・B組） 3・4限（C・D組）
雨天の場合 中止
3. 実習コース（右の地図参照）
 - A・B組 大江神社→清水寺→安居神社→一心寺→茶臼山→庚申堂→本校
 - C・D組 本校——（上の逆コース）————→大江神社
4. 引率者 本校教官（辻教官・大仲教官・岡教官・浅野教官・柴山教官）
5. 集合場所・時刻

○ A・B組	大江神社	8時30分
	○ C・D組	本校正門
6. 実施方法と観察事項



7. 当日の時間割

	1	2	3	4	5	6
A	←	→				
B	←	→				
C			←	→		
D			←	→		

(2) 高等学校

理科の性質上、野外実習は欠かせないものである。1965年（昭和40年）以来、毎年高1年生を対象として全員の地質野外実習を行ってきた。1979年（昭和53年）以来は以下に記す（詳しくは、昭和53年度研究集録、第21集にある）ような実習を行ってきた。

はじめに

本校では昭和40年以来、中学生及び高校生に地学野外実習を実施してきた。特に高校1年生全員を対象とした実習を毎年行ってきた。そして特記したいことは、理科教官と助手の総勢9名が講師にあたっているということである。（本校研究集録第20集昭和53年3月発行で報告）しかし、この実習に関して、毎年幾つかの問題点が浮んでくる。そのうちの重要なものは、この実習自体をわれわれ指導者及び生徒はどう評価しているのか。ということである。今回は我々が行っている野外実習の形態と、この実習を生徒はどうとらえ、どう思っているのかをアンケートを通して検討したものと、評価に関する問題の三点について報告する。但し、評価に関する報告は次回以後に続く予定である。

現行の野外実習の形態

前報（柴山・浅野1978年）に、昭和40年から昭和52年までの実習形態の変遷を述べてあるので、本報では、昭和53年9月～10月に行った実習の形態を記すこととする。

(1) 実施日

前年までは、期末試験後の休みの日や、日曜日におこなっていたが、この年から土曜日に実施することにした。A B C D 4クラスを2クラスずつ2回の土曜日に分けて行うためには、他の教科からその日の授業を地学に振り替えてもらわなければならぬし、理科の教官が全員ぬけるため他学年の理科の教官の授業は、他の日に変えておかなければならぬなど、他の教科の協力と理解を得なければならぬ。本校の場合、この実習は、学校行事として実施しているので、新年度が始まる前に、学校の年間行事予定の中に入れてしまう。その日が雨の場合は、他の土曜日に延期ということができない。その日は4時間地学の授業をすることになり、その後の日曜日に実施せざるを得ない。昨年は晴だったので実施できた。9月30日と10月14日の土曜日であった。

季節はやはり気候条件のよい秋がよいだろう。以前に、冬や夏に実施して来たが、生徒の学習意欲は寒い時期・暑い時期は、野外実習をすることよりもその気候条件に耐える方が主となって、実習への集中力が欠けることが、秋に実施して見て明確になって来た。

(2) 集合時間

1日2クラス実施するが、その2クラスの集合時刻は、それぞれ異なり、1クラスは午前9時30分、他の1クラスは11時である。これは、1台のバスをチャーターし、それでピストン運転する。9時30分に集合したクラスは、4～5班に分かれて10時から実習を始める。集合地から実習地までバスで約30分である。折り返しそのバスが集合地にもどると、10時30分頃になり、次の11時集合のクラスを待つことになる。

(3) 集合場所

国鉄、阪和線東岸和田駅

(4) 実習地

貝塚市 萩原

(5) 実習地で10時から実習を始めているクラスが4～5班、11時30分から始めるクラスも4～5班に分かれて、できるだけ班と班の間隔を開けるようにしてまわる。班の指導者は、理科教官が全員であるが、他に理科助手や、本校卒業生で大学の理学部に籍を置く学生が手伝ってくれる。これは1班の人数が10名以内であることが実習効果を高めるという経験則に基づいている。

実習は、あらかじめ用意してあるポイント番号の入った地図と、各ポイントでの観察事項を説明したプリントに従って観察を進めていく。教官は各々の個性、持ち味をいかして現地での説明を行う。地質現象のみでなく道ばたの植物や畑の野菜や人々の暮らし等についても話しが及ぶ。

実習も回を重ねるとマンネリに陥ることにもなる。従って、評価が必要となる。野外実習の評価については、昭和53年度研究集録第21集、昭和56年度研究集録、第23集にある。ここでは、第21集の「まとめ」「おわり」にを掲載する。

「まとめ」

地学の基礎概念等が習得できているかどうかを知るためのペーパーテストまたは、その習得を目的とするペーパーテストの内容が充分検討されたものであったとしてもそのテストが試問という一つの形にはまってしまうがゆえに、その底にある深い意味は忘れさせて、表面的な言葉の習得に陥りやすくなる。それをさけるためには記述式の問題を与え、その生徒の持っている自然に対する素朴な感性を見付けて、それに良い評価を与えるということを一番大切にしなければ、最も大切な物である、「生徒が生き生きとしている状態」をペーパーテストで崩壊し去ってしまい、折角、野外実習で開いた心を教室のテストや授業で閉じさせてしまうということになってしまふ。これでは、野外実習をしても、それをしたという教師の独善、自己満足を脱し得ない。かように、テストというものは重要な物である。

「おわりに」

以上評価に関する問題点をさぐってきた。この中で思うことは、テストの形式と試問が日常われわれが生徒に授業を通して習得してほしいという願いに比較すれば、随分軽んじられているということである。筆者ら自身の反省を含めて「もっとテストをすることに対して、それがいかなるものであろうとも、慎重に考えなければならない。授業で望んでいる探究心や知的好奇心や素朴な感性が、無神経につくられたテストとその試問によって簡単に紛糾されることがあることを認識しなければならない。」「レポートがどのように生徒の中で生き続けるかを考えなくてはならない。」ということを声高に叫びたい。今日も共通一次テストを代表とするテスト形式が生徒を押しつぶしている。これは教師のサラリーマン化とどこかでつながるのだ。何故なら、共通一次テストのような形式のテストは、機械が行うが、人間一人一人を大切にする為に行うテストは、それをつくるときも、評価するときも、生き生きした人間でなければ出来ないからだ。そして、生き生きした人間には時間を要するのである。

以上に記したように高1生徒全員を貝塚市・萬原に引率する。生徒は、1年生の実習の体験をもとにして2年生の終りまでに、各自で主として次に記す地域についての実習を行い、それに関するレポートを提出することが義務付けられている。

地域は、箕面公園付近、生駒山付近、泉北ニュータウン、二上山付近である。しかし指導者なしの地質調査は難しいこともあり、多くの生徒は上町台地の見学に関するレポート提出で義務を果している。

次に、上町台地見学実習に関する論文（地学教育 第36巻 第1号 1983年1月）の一部を掲載する。

本校高校生は第1年時の秋に全員が郊外で地質野外実習し、その地域の地質図・地質断面図を描き、地史を考察してまとめのレポートを提出している。筆者（浅野）の授業もその野外実習を柱として展開していく。また、第2年時の終了までに、第1年時の実習地域とは別の地域について任意のグループをつくって自主的に巡査をし、その結果をレポートにして提出させるようにしている。本研究に扱っている上町台地も任意巡査コースの一つになって、毎年約50名の生徒がこのコースを選んでいる。以下、巡査した生徒の提出したレポートを分析しながら、高校生にとっての大都市の地学実習の結果を報告する。

(1) 目的

- 1) 上町台地を中心として、その地形的・地質的特徴を知り、上町台地の地史を考察する。
- 2) 上町台地の原地形を推測し、人々がこの地形をどのように利用し、どのように開発して来たかを考察する。
- 3) 上町台地の地学的考察を基にして、第4紀についての理解を深める。

(2) アンケート調査について

筆者（浅野）は第四紀の地史をテーマとする授業を進める際に、学習の動機付けの意味もふくめて、生徒自身が日常生活をしている場について地学的方向（たとえば、自分の家の付近の自然環境や地質について）からの認識度をアンケート調査している。ここでは、その調査のうち、都市の地学との関係のある事項について報告する。なお、調査対象としたのは、郊外で地層の観察や、化石採集等の野外実習をして詳しい実習レポートを提出している高校1年生の中から無作為で選んだ約85名の生徒である。

問) 大都市や舗装道路について

- それらの下がどのようなものでできているかを考えたことがありますか。
結果一 ある51人 ない34人
- 大きな建物の土台がどのような地質のところにあるか考えたことがありますか。
結果一 ある57人 ない29人
- 地下鉄に乗った際に、その電車が走っているところはどんなところかを考えたことがありますか。
結果一 ある46人 ない38人
- 大都市をつくる地層は海の下にまで続いていると思いますか。
結果一 思う76人 思わない7人 わからない3人

この調査の結果からわることは、郊外での地質実習を通して、地学的な基礎概念を

習得していると思われる生徒達であっても、都市（そこは、ある生徒達の居住区であり毎日通う学校の建っているところもある）のことについては、必ずしも地学的考察の対象物になっていないということがわかる。

(3) レポートについて

1981年度の1年生3学期の地学授業の際は、日本列島の地史をテーマにして授業を進めた。そして、その期間に希望者を募って上町台地を対象として地質実習を行った。実習コースは図3に図示してある①～⑧の範囲である。この実習では、特別に多くの説明をせず、彼等の観察するにまかせた。そのことや、また、授業で、その実習コースのスライドを見せて「大阪平野の地史」を展開させたりしたこともある。生徒は大いに興味を持ち、レポートを提出するまでに、再び現地に足を運んだり、その地域の区役所で資料を調べたり、公の図書館で文献を調べたりというような自主的な学習を行った。従って、提出されたレポートの内容は以下に示すように、ただ実習コースである上町台地についての記述だけではなく、その期間の授業の流れに関わる内容の記述が目立っている。主な内容を列記する。

- ・上町台地の地質断面図やその周辺のボーリング資料等を用いて、その成り立ちを考察している。
- ・海平面の大変動による海岸線移動図を描いて、上町台地の成り立ちを考察している。
- ・上町台地実習ルート中の唯一の露頭を詳しく観察して、それが何故地層であると断定できるかということについて考察している。
- ・上町台地の地形断面図を見て、地下鉄のトンネルの深さや駅の位置について考察している。
- ・上町台地での難波宮の誕生についての思いから発して、そこで生活してきた人達と水の関係についての考察をしている。
- ・遺跡の分布に基づく海岸線推定図を無土器時代及び弥生時代について文献を調べ、相対的な土地の隆起、沈降を考察している。
- ・上町台地での人間の遺跡と、そこで発達した町とその地名について考察している。
- ・大阪平野の変遷史や日本列島の地史をまとめている。

次にレポート中に書かれた感想文の中で、この実習から彼等が受けた印象のよく表れているものをいくつか列記する。

- a) 大きな坂、急な坂や階段の上り下りは、実習前にはただそれだけであったのに、実習後は上町台地という地学のあるいは歴史的産物と結びつけて坂の上り下りをしている。急な上りもつらくなくなった。
- b) 上町台地の坂について考察して以来、かって訪れた日本の町の坂だけでなく、サンフランシスコの坂のことについても、その町の成立と関係付けて考えてしまう。
- c) 地学の材料が山に行かなければ見つかないとと思っていたことに対する認識を改めさせた。地学では、地下深くのことや大きな視野でのものを見ることばかりを行ってきたので、そこに人が住んでいることなど、まして地形をいかに利用して住んでいるかなどということは考えなかった。今までの実習はわざわざ山奥の人のいないところへ行ったりして……中略……上町台地の巡査で人々の生活は自然と一体となっているのだということがわかる。

- d) それまで理科と社会を分けて考えていたが、上町台地実習後、地学と地理とが大変密接な関係にあることがわかった。
- e) こんな大都市の中でも、自然や地形に応じた生活や工夫がなされていることがわかった。
- f) 彼等の知らないところでも、上町台地のように自然と人間はかけ離せない関係になっていることだろう。
- g) 大阪の原点は上町台地の存在にある。
- h) 教室での知識と体験が一致するということは、とても愉快である。
- i) このレポートは社会科の「わが町」というテーマのレポートになってしまった。

(4) まとめ

前述したレポート内容や彼等を引率したときの感触から高校生にとっての上町台地野外実習のまとめを以下に述べよう。

彼等は、上町台地の勉強をして歩くわけだが、まず彼等は郊外での地質野外実習での経験をもとにして巡査する。そして、レポート内容にあるように、人間と自然のかかわりあいにうちあたるのである。その結果として、生徒の中では感想文 i) にあるような内容、すなわち、自分の書いている内容ではレポートとして成立しないのではないかという不安をもつ。彼等のレポートや感想文を読んでみると次のようなことがいえる。すなわち、一般に出される地学のレポートというものは、彼等に地学的見方をせよとの一種の拘束を与えることになり、ある意味では彼等の自由な発想を封じることになる。しかしながら、このたびの上町台地の野外実習では、そのことと同時に、教科書の壁をとり除き、生徒個人の好みの方向を彼等みずからに認識させながらその方向を軸として知識欲や探求心を發揮させたと考えられる。高校生の発達段階からして、これは妥当なことと思う。このように、このたびの実習は地学的知識・概念・思考以外に歴史や地理や文学さらに政治にまでおよぶ考察をさせる契機になった。

最後に、前述した感想文以外に心に残るものがあるので下記に付する。

「私はよいところに住んでいる。少し時間をかけてれば都会にでることができ、それでいて自然が残っていて……略……」（注：この生徒は上町台地巡査後、自分の住む郊外についてこのように書いている）。これは、至極当然の感想である。すなわち、自然の中で生活したいという願い、だが、都會にはそれがない。日本の都會は、この嘆きをまったく無視した形で急速に開発されてきたのである。この上町台地の調査は、彼等に自分の住んでいる環境を見直させてくれたよい機会になったと考えられる。

2 研究観察

(1) 野外学習の目的

野外の諸条件を教室にそのまま持ち込むことは不可能である。このために、ややもすると短絡的に知識の暗記に終わることになる。せいぜい映画やスライド等で、生徒にさきやかな臨場感を味わわせる程度で終わることになる場合が多い。眞の臨場感は、やはり野外の現場に生徒自身が立つことから始まる。

本校では、中学2年の生物の学習に、主として次の4つの目的を重視して野外学習を実施している。

- ① 自然界における生物の生活を実地に観察し、生物の生きようとする姿を具体的に把握し、一見無秩序に見える生物の個体やその群集の生活にも規則性があることを発見させる。
 - ② 動植物の豊富な野外で、多くの生物を実際に見ることによって、生物の多様性を認識し、生物の系統性の理解を深めさせる。
 - ③ 生きものを含む自然界に関心をもち、それを理解しようとする意欲を育てると共に、環境保全の精神を養う。
- 海辺の磯を選んだ理由として、次の第4の目的を考えている。
- ④ 潮間帯が、生物進化のモデルとして、学習に極めて有効な場である。

(2) 場所

和歌山県和歌山市加太町城ヶ崎で行っている。干潮時に南に約130mの長さで大きく広がり、傾斜はゆるく、磯観察の場としては好都合であり、かつ大形のタイドプールがないので中学生にとって安全である。本校から実習効果の期待できる場所として格好である。

(3) 実施日

磯観察は春の大潮を利用するのが最もよい。学校行事が盛り沢山な本校では、実施日の設定は極めて困難を伴なう。過去の実施日は下記の通りである。なお、この時期は、海辺の生物相が最も豊富であること、野外活動に無理のない気温や水温であること、梅雨前であることなどの点で好都合である。

磯観察を実施した日の加太における干潮時刻と潮高

(大阪気象協会の潮汐表から概算して求めた)

年 度	月 日 (曜)	干潮時刻	潮高(cm)	備 考
52	5月21日(土)	14時42分	18	
53	5月6日(土)	12時16分	20	雨天中止
54	5月26日(土)	12時58分	7	
55	5月17日(土)	14時43分	1	
56	6月3日(水)	13時19分	-7	
57	6月5日(土)	12時06分	26	
58	6月11日(土)	12時54分	-4	
59	5月17日(木)	14時06分	-4	
60	5月20日(月)	12時36分	10	雨天中止

(4) 指導及び付添教官

中学校・高等学校の理科教官全員が、直接あるいは間接的に生徒の指導に当たる。また、生徒が中学生であることを配慮して、当該学年から1~2名の教官が付き添う。他に理科助手が、すり傷等の応急手当に当たる。

第1回実施要項

中2理科野外実習（磯観察）

1. 日 時 昭和52年5月21日(土)

(中止の場合は、6時30分に決定し連絡網で連絡する)

2. 場 所 和歌山県 加太海岸（城ヶ崎）
3. 集合・解散 南海難波駅 北口改札前（2階）
集合 8時20分 解散 5時30分
4. 交通機関 南海電鉄 南海線、加太線
難波 和歌山 加太
(のりかえ)

 8:41 → 9:49 (急行)
 10:09 → 10:35 (各停)
 (海岸まで徒歩)
 約30分
 17:25 ← 16:20 (急行)
 15:59 ← 15:35 (各停)
5. 持ち物 個人……野帳、エンピツ、タオル、弁当、水筒、雨具、
ルーペ、ピンセット（なくてもよい）
運動靴（現地ではきかえる）
班……ドライバー(1), ビニール袋(10枚)
(すべて、ナップサックに入れること)
6. 服 装 私服（長袖シャツ、ズボン）、制帽（男子）、ビケ帽（女子）
7. 費 用 ¥600-
8. 諸注意
 • 礁はすべり易いから、絶対ふざけないこと。
 • 単独行動はとらない。（班単位で行動する）
 • 採集は、できるだけ最小限にすること。
9. 引率 理科教官（8名） 理科助手（3名） 学年より（2名）

§ 4 理科教育とクラブ活動

1 中学校

昭和28年に電気工作部を母体として発足した科学部が、その後、必ず1つのクラブに入るべき時代、中・高合同の時代（昭和33年～昭和38年）、運動部に入った上で文化部にも入る時代（昭和37年～昭和44年）を経て、昭和45年以後はどれか1つのクラブに必ず入って活動するようになって、それが現在まで続いている。これは中学校のクラブ活動の指導方針の変遷によるところが大きいと言える。さて、この科学クラブは、昭和44年より、生徒の興味・関心の対象、施設・設備、指導者を考えて、現在の化学班、生物班、地学班の3班が設けられ、1人の部長と各班の班長を中心各班ごとに活動し、時々、全体で話し合い、文化クラブ発表会・展示会で1年間の成果を発表して締めくくることになる。また、科学クラブが高校のクラブと同じ部屋（理科の各実験室など）で、同時に平行して活動をしていることが多く、その中で高校の先輩から教えてもらったり、陰に陽に影響を受けつつ活動ができることが大きな利点である。さらに、理科の各研究室を利用しているが、その中で研究室内での態度や心構えなどの基本的なことも学ぶことが出来るし、薬品や材料、実験器具の扱い方や部屋の利用のし方も自然に身に付けていくよう、各教官が配慮している。出来ればクラブ員が、この中・高6ヶ年一貫教育の

恵まれた環境を自覚し、十分活用して、さらに意欲的に取り組んでほしいし、中・高のクラブのパイプが太くなるように望みたい。

最近の10年間のクラブ員の数は、最大56名（昭和52年）から最小13名（昭和60年）の範囲内で変化している。これは生徒の興味・関心の変化とも無縁ではないよう思う。各班の主な活動内容は次のようなものである。

- 化学班は、化学実験室で活動し、結晶の形についての研究や、鉱物、イオン反応、酸と金属の反応で特に、アルミニウムと硝酸の濃度による反応の速さとの関係、ビスコースを中心とした化学繊維の研究、銀鏡反応を利用した鏡づくりなどを取り上げてきている。

- 生物班は、生物実験室で主として活動し、校内の雑草の分布、プランクトンの採集と同定、校内を中心とした土壤動物の採集と観察、コウボ菌の繁殖とその観察などの研究を行っている。

- 地学班は、地学教室で主として活動し、3～4年がかりで、苦労し改良を重ねてプラネタリウムを完成したり、マイコンを利用して星の位置を計算し、時刻と場所を指定してその時の星空を出したり、天気図や観天望気、夜間の天体観測で惑星や星雲の写真の撮影、分光器による観測などの活動を行っている。

昭和52年度の部長がクラブについて述べた文の一部を次に示す。

「活動は非常に地味で、地味な実験を何度も地味にくり返し、非常に地味な実験結果がでて、地味に考察し、地味な結論が出るのである。こう書くと、非常に地味に感じるが、事実、非常に地味である。しかし、地味である中で地味な結論がでた時は非常にうれしい。感激する訳である。そして、もう一つ、我が班においての縦のつながりは非常に気さくで、後輩達はとても楽しそうに活動している。これから後、この後輩達が我が班を良い方向へ持っていく事は確実であろう。」クラブの人数について増減はあるが、このような気持ちで活動が続いていることを望みたい。

2 高等学校

〈物理クラブ〉

昭和45年度より、中学校技術部でハムをやっていた生徒諸君が、高校でも活動したいけれども、高校にはハムのクラブがないので何んとか出来ないかという相談があり、クラブに活気がでればという事もあって、物理クラブの中にアマチュア無線班をつくることにした。当初は、さらに上級のテストを受けることや送信、受信機を自作することも行い、かなり日常の活動が活発になったように思えたが、1～2年で単に通信カードを交換することのみに終始するようになり、かえって従来の物理部の活動がおろそかになって來たので、ハムに熱心な生徒達の卒業と同時にハム班をなくして、従来の物理部の活動に返ることにした。そのため昭和48年度より、部員数が減少し、活動も低調になって自治会規定により同好会となつた。以後部員及び顧問教官の努力によって、昭和54年度より再びクラブになった。以後入賞はしていないが大阪府学生科学賞に出品したりして活動を続けている。この4～5年目立つ事は、他クラブとの掛け持ち部員が多くなったことである。昭和60年度では、部員数は12名であるが、すべての部員が他の文化クラブと掛け持ちであり、3つのクラブ掛け持ちという生徒も数人いる。従って、平常の活

動は非常に低調であり、クラブの活性化が重要な問題である。

主な活動内容

昭和51年（同好会）	エアテーブルの自作、マイコン
昭和52年（　　）	グラスハーモニカの研究、マイコン
昭和53年（　　）	グラスハーモニカの研究、マイコン
昭和54年（以後クラブ）	グラスハーモニカの研究、アトウッドの滑車の製作・研究
昭和55年	ミルククラウンの研究、アトウッドの滑車の製作・研究
昭和56年	流体中の球状物体の運動、アトウッドの滑車の製作・研究
昭和57年	流体中の球状物体の運動、空気中の自由落下運動と空気の抵抗
昭和58年	動く力学的オモチャの研究
昭和59年	レーザー光、落体の運動
昭和60年	レーザー光、リサーチの図形

〈化学クラブ〉

経済の高度成長期に多発した公害、化学肥料・殺虫除草剤・合成洗剤等への不信から生じた化学離れか、大学共通一次試験と学習塾繁盛の影響か、趣味・娯楽・スポーツ情報の氾濫で忙しすぎるのか、週1回の全校クラブ活動の悪影響か、授業での化学実験とレポートで食傷ぎみなのか、入部者の数が減るとともに、先輩との活動をしづぶる生徒が増し、一人でも活動し続ける生徒が減り、先輩・後輩の縦のつながりが断ち切られ、クラブ存続の危機がここ数年続いている。女生徒の参加が減ったこともめだつ。活動内容は、1人またはグループで自発的に見つけてテーマとしている。器具・薬品はクラブ予算でまかなうほかに、化学研究室のものを利用して活動している。週3回の活動日には平均3名が活動している。

○主な活動内容：昭和51年～60年の主なテーマは次のようなものである。

化学平衡、有機合成、ガラス作工、分子模型、中国の周期表、再生・合成繊維、合成樹脂、実用電池、電解着色、炎色反応と花火、星色反応、螢光、光電池、銅の錯イオン。

〈生物クラブ〉

この10年間の後半は急速に衰退の一途を辿っている。従来毎年度発行してきた部誌、「自然と共に」が、昭和58年度を最後に跡絶えている。次に年度を追って、クラブ員による研究テーマを記す。

昭和51年度 和歌山県串本町の潮岬及び大島の岩礁性潮間帯動物の生態研究・アメリカシロヒトリ幼虫の生態の観察。

昭和52年度 タバコの煙がニワトリの胚の発生に及ぼす影響・アルテミア幼生の生理生態・土壤動物の垂直分布と植生樹との関係・プロダクトメーターを利用した光合成の研究・蘇苔類の着生分布と環境要因の関係。

昭和53年度 上記（昭和52年度）の各研究テーマの継続研究・三重県答志島におけるカメノテの着生分布と環境要因の関係（合宿研究）

昭和54年度 上記（昭和53年度）のカメノテに関する継続研究を和歌山県串本町の大島で実施（合宿研究）・大阪近郊の帰化植物の帰化率と土地利用の関係

- 和泉葛城山の陸産貝の分布と生態の研究（合宿研究）
- 昭和55年度 タバコを用いた植物の無機代謝（ホウ素による影響）・ムラサキウニの正常発生・植物の種子に貯えられたエネルギーの測定・メダカのテリトリーについて・琵琶湖の自然の現状について・府下小中学生の自然認識の調査報告。
- 昭和56年度 大和川のプランクトンの生態調査・ピラニアの飼育による生態観察・メダカの飼育による生態観察。
- 昭和58年度 池の昆虫（特にゲンゴロウの仲間）の飼育による生態観察・枚方市御殿山の雑木林における土壤中の節足動物の生態研究・コーラがマウスに与える影響について。

〈地学クラブ〉

昭和50年までの活動については前回の20周年冊子に記されているので、ここでは51年から、60年までの10年間の活動について記す。

○部員数

年 度	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
部員数	8	9	21	28	18	12	21	21	15	26

○主な活動内容

(地質分野)

昭和48年～52年：周参見地域の地質構造の研究（大阪府学生科学賞展で最優秀）

昭和53年～57年：和歌山県南部古座の生いたち（……………）

昭和58年～：和歌山県田辺付近の田辺層群について（継続中）

(気象分野)

昭和50年～52年：地上天気図から分析した日本付近の気圧分布とその変化

（大阪府学生科学賞展で最優秀）

昭和55年～57年：都市公園の気温（日本学生科学賞展で1等賞）

昭和57年～59年：視程の研究（日本学生科学賞展で最優秀読売新聞社賞）

昭和59年～：高層ビル周辺の風について（継続中）

(天文分野)

昭和57年～：視力と星の等級の関係について（継続中）

この他、日常的には月例巡検、天体観測、活動報告紙「カノーブス」の発行等を行っている。また研究発表する機会は、学生科学賞展への出品、附高祭での展示、大阪府高等学校地学教育研究会の地学クラブ発表会で発表などがある。

§ 5 今後の課題

1 中・高一貫教育について

理科では、高校創設以来、中・高の一貫教育の実践に努めてきた。具体的には、幾度かの「中・高を通した理科カリキュラム」の検討と作製（最近のものは昭和58年度の研究集録第26集に掲載），中学・高校各々の専任教官の高校・中学への相互乗り入れ等を行ってきた。これらの実践から、さまざまな問題が提起された。その一つは、教官が認

識している教材に対する難易度と、生徒がそれらの教材に対して示す難易度とのずれであり、別の一つは、中1～高3生徒に関して、ある概念や実体把握の成長度曲線は決して単調増加を示すものではないということであった。これらの問題を解決すべく、昭和58年度から3ヶ年計画で、文部省教育方法等改善経費による「小・中・高生徒の発達段階における自然認識の調査と理科教育の改善への試み」をテーマとする研究を行ってきた。これらの研究から、我々が期待した成果が得られるならば、中1～高3生徒までのどの段階で、どの教材を提示するのがベターかということが明らかになり、理想的な中・高一貫理科カリキュラムに一步近付くことになろう。

上記のこと以外の検討課題として重要なものを、もう一つあげる。従来、我々が行ってきた理科教育は、中学・高校を通して、物理・化学・生物・地学の四つの専門科目分担制であった。従ってカリキュラムも、中・高通して上の四つに分けて検討されてきた。即ち、教科間相互の関係は検討されずに残っている。四つの教科には各々がもつ特殊性があるが、普遍することもある。各科の一貫カリキュラムを普遍性・共通性によって理科全体カリキュラムにする方向性も必要と思われる。いわば、物・化・生・地の4本柱の相互に横パイプを通して教材をスライドしてみるという試みである。この検討も急務と思われる。

2 評価の問題について

理科の授業には、講義・作業・実験・実習等さまざまな形式がある。これらの授業の中で、指導者が期待する“生徒による理解度及び新たな問題の発見”をいかなる方法で知り得ているのか、即ち、「われわれの教育活動をいかなる方法で評価しているのか」の問題は非常に重要である。従来、ペーパーテストやレポート提出によって、それが行なわれてきたが、ペーパーテストの問題や、レポートの形式をもっと工夫して、指導者が自身の行っている活動のより確かな評価をすることが必要である。このことは生徒のより確かな実体把握と結びつくことが期待できる。

浅野 浅春
井野口弘治
大仲 政憲
岡 博昭
櫻井 寛
柴山 元彦
武田 和生
辻 退一
濱谷 巍

音 楽 科

§ 1 本校音楽科の指導方針及びカリキュラム

1 指導方針

本校音楽科の指導方針や研究内容は、この10年間で大きく変わってきた。もともとは、西洋音楽（クラシック音楽）中心の授業や研究が行われており、それが身近なものになり、普及させることができるか、がその主眼であった。しかし、同時に考えていたのは、西洋音楽だけが唯一正当な音楽とは限らないのではないかということである。折りも折り、西洋音楽中心のわが国の音楽教育を反省する声が高まるなか、本校においても、従来の授業や研究のままでよいのかという疑問や迷いが生じた。そこで、ここ数年間、さまざまな試みを実施しながら、本校なりの指導や研究を進めてきた。その基本は次のようなことである。

- ①各自の有する音楽的才能、言い換れば、生来の音楽性を生かす。（わらべうたの利用による、各自の音楽的才能の再発見と確認など）
- ②クラシック音楽以外の音楽活動や技量を尊重する。
- ③音楽というものは、古来、それのみが独歩してきたのではなく、自然、歴史、言語、社会、風俗習慣などと深く関わってきたことを重視する。
- ④異なる価値観や尺度を尊重し、幅広く音楽と親しみ、多くの楽しみが持てるようになる。（日本、アジアの音楽など）
- ⑤学校内だけではなく、日常生活に音楽が生き、長く付き合えることを目指す。

誤解されたくないのは、決して西洋音楽を排斥しようとしているのではないということである。また、日本音楽を尊重することは、単に伝統音楽や古典芸能に親しむことではない。かと言って、非西洋の音楽をひとくくりにして、「民族音楽」の名の下に、特別扱いをしていると解釈されるのも困りものである。目先のことではなく、広い視野に立ち、将来を展望しつつ、各学年に教科書・参考資料代りのプリントを毎時間のように作成し、少しずつ進めているところである。だが、社会全体の傾向がそうであるように、まだまだ欧米偏重が強く、アジアなど非欧米地域の音楽に対する差別や反発は、かなり多い。国際化時代、アジアの時代と、盛んに言われる昨今だが、裏を返せば問題が多いということである。音楽分野は、そういう風をまともに受けていると言えるだろう。生徒たちが、卒業後も豊かな音楽生活を送っていくために、ますます研究を深め、より先んじた指導を行わなければならないと考える。

2 カリキュラム

カリキュラムは、中学校の授業時数が、中1、中2、中3、それぞれ、2、2、1、高校の単位数が、高1、高2、高3、それぞれ、2、2、0で継続してきた。高校の場合、音楽は、美術・書道とともに芸術科を形成しており、生徒はその中から1科目を選

んで必修する。音楽の定員は、高1、高2とともに、おおよそ2クラス分（90名～100名）であり、それを2つに分け、同時に授業を行っている。その場合、教室は、本校音楽室と、大学音楽教室（昭和56年度から授業時間帯に限って借用。それ以前は本校小講堂を使用）を、原則として1週間交代で使用している。授業は、50分間のものが、10分間の休憩をはさんで2時限連続しており、実技と鑑賞の組み合わせが基本であった。昭和58年度からは、鑑賞領域を、担当教官の個性を生かしたテーマによる、通年のシリーズ形式の講座にした。また、実技領域は、合唱や器楽グループアンサンブルが主体であったが、教室・練習室の不足から、充分なパート練習やグループ活動ができない。そのため、昭和59年度からは、グループ活動や電鳴楽器の使用を避け、高1、高2いずれも、音楽選択生徒全員による合唱を始めた。こうして、少ない活動場所を有効に使い、2クラス相互の交流を図っている。高2は、昭和59年度から音楽祭に出場し、発表の場を得た。

中学校の場合は、すべて音楽室で授業を行ってはいるが、様々な面での不自由さは、高校と大差ない。中学校では、音楽科主催による音楽会が年1回行われている。それについて、次の項で取り上げる。

§ 2 中学校音楽会

音楽科主催の唯一の行事である中学校音楽会は、この10年間も継続して行われてきた。文化クラブ発表会と合わせて行われたり、やや規模を縮少したり、紆余曲折があったが、昭和55年度から現行の形になった。毎年、工夫、改良が加えられている。

1 音楽会のあゆみ

昭和54年まで

文化クラブ発表会と併催。各クラスの演奏（合唱・合奏）、教官合唱、全体合唱を行う。昭和54年度からは、音楽科教官・講師の演奏が加わる。また、音楽会のための練習や討議は音楽の授業内と音楽科の範囲におさめることになった。

昭和55・56年度

文化クラブ発表会から独立。12月中旬の土曜日午前中を当てる。担任の了承があれば、H.R. 等でも練習ができるようになった。内容に変化はないが、現行の音楽会の基本型ができ上がった。

昭和57年度

合奏（主にリコーダー）をやめ、合唱に統一。女声合唱（母親コーラス）の初出場、ひな段の使用などが新しい点。特筆すべきは、生徒の盛り上がりが最高潮に達し、音楽会の存在価値を高めた。更に、合唱の楽譜を、本校の実状に合うよう編曲・改良し、演奏効果を増した。以降も同じ方法を採用。すべての点で、この行事の範となつた年である。

昭和58年度

全体合唱を会の初めにも歌うこととした。（昭和59年度からは校歌）

昭和59・60年度

3年生全員による学年合唱を、昭和59年度から始めた。昭和60年度は、自由曲については3年生に限った。

以上が、中学校音楽会の、この10年間におけるごく大まかな変遷である。会全体や曲の趣向、形式の工夫など、もっと細かな変化が多くあったのだが、ここではそのすべてを記すことはできない。昭和54年度から58年度の音楽会については、研究集録第26集を参照されたい。

中学校音楽会は、年度・学年によって、その取り組み方や盛り上がりに差はあるが、生徒の心に残る、すばらしい音楽会にするため、アイデアを出していきたい。

なお、高校では、自治会企画による音楽祭がある。詳細は「自治会」の項にゆずるが、中学校音楽会での指導が、役に立っているようである。



大阪教育大学 教育学部
附属天王寺中学校

‘82音楽会

12月18日(土) 大講堂

昭和59年度 音楽会

12月21日(土)



大阪教育大学 教育学部附属天王寺中学校



大阪教育大学 教育学部附属天王寺中学校

●これまでの音楽会（昭和51年度～60年度） 会場：本学講堂

昭和51年度……52年2月22日(火)・文化クラブ発表会と併催

- タ 52年度……53年3月11日(土)・
- タ 53年度……54年1月23日(火)・
- タ 54年度……55年2月19日(火)・
- タ 55年度……55年12月20日(土)・単独開催
- タ 56年度……56年12月19日(土)・
- タ 57年度……57年12月18日(土)・
- タ 58年度……58年12月17日(土)・
- タ 59年度……59年12月21日(金)
- タ 60年度……60年12月21日(土)・

2 音楽会実施要項（昭和60年度プログラムより）



■ 高原・岡田明子(3-8)

♪ フラ プログラム ♪ ♪ ♪ ♪

1. 開会のことば—— 楽曲提供者: 藤島義仁、北澤 葵 (3-C)

2. 歌歌齊唱 ----- 代表指揮: 舟田和美 (3-C)
代表ピア: 舟田和美 (C)

3. 混声合唱 ----- 2年C組

■ ミロディ (桑田佳祐)
指揮: 黒石国宏 ピア: 舟田和美
山のいぶき (川崎耕悟)
指揮: 舟田和美 ピア: 幸田真子

4. 演奏合奏(ムージカル) 猫 OUR CATS! ~君にさきのネコ~ 4B

(原作: 井上みさし 作曲: 藤島義仁)

—— 1年B組

これはスティーヴンソンのニャンコの物語らしい。過去には、家庭らしい2年生の伴
舞が最も印象的だったが、5年生は大変を尋ねた。これまでの手本では珍しい。

おにぎりごとソング ----- 3年C組
■ 指揮: 田中 文、吉曾美智
おニギヤ大通歌 (辻井) ピア: 南 あゆ子、宮西典子
おののだく。たマーチ ピア: 吉曾美智

5. 混声合唱 ----- 3年C組

■ 猫は捕獲方まで (テト河内)
指揮: 三井晶己 ピア: 清崎季代
かわづ (野泽邦雄) ピア: 清木彌久

■ おののく (野泽邦雄) ピア: 木村康雄

6. 混声合唱 ----- 2年B組

■ 大空賀歌 (東洋吉選)
■ 雪原に宿すよ~タガミラクまにおもう~ (平吉賀州)
指揮: 佐藤和子 ピア: 鈴川晶子

■ オののく (加藤和也) ピア: 大田美子

7. OUR CATS! ~君にさきのネコ~ 4B ----- 1年A組

歌詞をうながす。歌うより、歌う歌う。だけひとつもいはばる。歌う歌う思ひ出

おにぎりは、おにぎりむかひおにぎりまよし、こひでやまれおにぎりむよし。おにぎりおにぎりおにぎり。
おにぎりおにぎり。おにぎりのむかひおにぎりがおいて、おにぎりおにぎりおにぎり。さあ、せんせう?

8. 混声合唱 (3-C)
■ おにぎりの足跡につけたの間香歌
○○こんじきまわいくまは へりうどん
おにぎりのねうわが脚に當たる
指揮: 渡中智紀、西浦 宏
ピア: ふじ田勝子、中川知香
セウ: 若元良馬
指揮: 安藤 順、芦野雅彦

9. 混声合唱 ----- 3年D組

■ 夏をあきらめて (森田桂樹)
指揮: 岩山武志 ピア: 西村春一郎
■ 松田の少年歌 (森田桂樹)
指揮: 木村創凡 ピア: 志布嶺子

10. 合 唱 ----- 教官准志

■ 春日歌 (柳原洋輔)
■ 旗のリクエスト (岸沢慶輔)
④

11. 混声合唱 ----- 中学生基根生・寺澤豊、お母さん方

■ キリエ (アレベツ)
■ 歌を説いて (小畠正正)
■ ぬる水流歌は誰よ。4B 唱-渡だけ

12. ピアノ独奏 ----- 球石孝文
■ ラード第1番 (ショパン)

13. 混声合唱 ----- 2年A組

■ マイ・ウェイ (ブルーノ・C・ラシット)
指揮: 丹波高志 ピア: 平 真子
■ 走れメロス (野田暉行)
指揮: 鈴木栄美 ピア: 中江真子

14. OUR CATS! ~君にさきのネコ~ 4B ----- 1年C組

歌詞をうながす。歌うより、歌う歌う。だけひとつもいはばる。歌う歌う思ひ出
おにぎりおにぎりおにぎり。おにぎりおにぎりおにぎり。おにぎりおにぎりおにぎり。
おにぎりおにぎり。おにぎりのむかひおにぎりがおいて、おにぎりおにぎりおにぎり。さあ、せんせう?

13. ならだソング 山田昌子	・曲: 太田幸也、吉田昌子 ・ピアノ: 高橋理恵、横井静子 ・セリフ: 山田昌子 ・打撃楽: 遠藤邦子、高橋子、中川千加
15. 演 声 合 唱 —————— 3年B組	• おごり歌 (かみこみ) 指導: 松尾昌治 ピアノ: 宇野さおり 草 (柴村新司) 指導: 片山晶子 ピアノ: 沢尻恵美
16. 演 声 合 唱 —————— 2年D組	• 野生の鳥 (若狭三郎) 指導: 渡井一幸 ピアノ: 鹿田さやか さよならをするために (坂田昇一) 指導: 鶴見正樹 ピアノ: 松浦美子
17. OUR CATS! —!!さきめオコーねる————— 1年D組	これはいいねるね。櫻井が大きらいですか。でも実際に見てます。でも 結構、ここに似合つてます。どうですか? ここもどうなの問題にしちゃ どうですか?
18. キコの歌謡 しゃんざわの歌歌 19. 鶴岡六一にども 朝日をたとえようソング 20. ラネコ美國ソング	・歌: 遠藤一也、寺本智也 ・指導: 渡辺優子、秋尾美里 ・歌: 田代智也、寺本智也 ・指導: 鶴岡六一 ・歌: 北尾美里
18. 演 声 合 唱 —————— 3年A組	• 愛を止めないで (小畠和正) 指導: 戸野司由 ピアノ: 前田達子 ・夢夜譚 (横井一幸) 指導: 村田智史 ピアノ: 北尾美里
19. 演 声 合 唱 —————— 3年生全員	• わらわらわらわら 歌舞の場 (ヴェルディ) 指導: 加藤雄 実 ピアノ: 沢尻恵美 (3-B)
20. 全 荷 合 唱 —————— 全 真	・見上げてさらなる星を (川柳井友) 代役指導: 旗野司由 (3-A) 代役ピアノ: 北尾美里 (3-B)
21. 団会のことば —————— 加藤雄 実 指導	



§ 3 教育研究活動

1 教育研究会

昭和56年11月11日、第29回本校教育研究会において、研究授業、研究発表、協議会を行ったが、教官の異動による事情のため、この10年間では1回だけである。おもな内容は次のとおりである。

研究主題：非欧米音楽による授業を始めて

①研究授業：高校第26期1年生 A B組音楽選択生徒

「日本の音楽とその周辺を訪ねる」

アイヌと台湾高砂族の音楽を取り上げ、研究および演奏をする

- ②研究発表：非欧米音楽教材による授業を始めて
- ③協議：中・高音楽科授業における教材の取り扱いについて
——非欧米音楽をどのようにとり入れるか——
 - ・授業と発表……和田垣 究（本校教諭）
 - ・指導講師……松村直行先生（大阪教育大学教授）
 - ・司会……田中盾臣先生（大阪教育大学附属平野中学校教諭）

2 近畿附属連盟中・高研究部会

昭和58年1月26日、大阪教育大学附属天王寺小・中・高等学校の担当で行われた。研究授業と協議会を、小学校と中・高等学校で別々に行い、午後から合流する計画であった。本校では、中学校第36期1年生B組で研究授業を行うことになっていたが、当日、流感による学校閉鎖となったため、情報交換のみが行われた。なお、小学校と合同で、午後からのザ・シンフォニーホール見学は予定どおり行われた。

本校外では、神戸大学附属明石中学校（55年度）、京都教育大学附属桃山中学校（59年度）、大阪教育大学附属池田中学校（60年度）で開かれた例会に参加し、研究授業参観と協議・情報交換を行った。

3 全国附属連盟高校部会教育研究会

昭和60年8月8日・9日、全附連・小中高音楽研究会が、東京・竹橋会館で開催され、参会した。61年度は、大阪が会場になり、本学附属校が担当する。また、第27回高等学校教育研究会（主催：全附連高校部会、教大協第三部高校部会）が、昭和60年10月25日・26日、東京学芸大学附属高校で開催、音楽部会が15年ぶりに行われ、参会した。いずれも、本校は研究発表を行わなかったが、協議・情報交換の際、§1.の1.に関するなどを発言した。

4 研究集録

昭和57年、58年、59年、60年度の4回、本校研究集録に執筆し、日ごろの研究活動をまとめた。

- ・昭和57年度・第25集「音楽の授業・最近の2年間」
～長くつき合える音楽を目指して～
- ・昭和58年度・第26集「中学校音楽会小史」（昭和54年度～58年度）
- ・昭和59年度・第27集「アジアの音楽を授業に」～長くつき合える音楽を目指して～
- ・昭和60年度・第28集「統・アジアの音楽を授業に」～～～

§ 4 教官の異動

昭和53年度をもって、石見周而が退官した後、昭和54年4月から、和田垣 究が着任して現在に至っている。非常勤講師は、昭和55年度までが、海野優子（その間、53年度に林桂子も）、昭和56年度は黒田章子、昭和57、58年度は林純子、昭和59、60年度は、中学校と高校で各1名ずつになり、中学校を両年度とも諸石孝文が、高校は、昭和59年度が馬場

智子，昭和60年度は，勝見やよいが担当した。（敬称略）

和田垣 究

美術科

§ 1 本校美術科における中・高一貫教育

1 中・高の美術科教育カリキュラムの概要

現段階において、中・高の美術の目標は、中学校においては表現することの意味の堀り下げを中心に、人格特性に結び付いたところで、〈ふくよかな表現力〉、〈自分にとって深みのある内容〉、〈表現すること、創ることの苦しさと楽しさ〉などといった、どちらかというと表現することの技術（ポエシス）よりは、観想（テオリア）や行為（プラクシス）に重きを置いている。高等学校では、その土台の上に、より技術的なことや、製作する態度や意味の探究を中心に行っている。さて各学年の目標を決める場合注意していることは、「表現及び鑑賞の能力を伸ばし、造形的な創造活動の喜びを味わわせるとともに、美術を愛好する心情を育て、豊かな情操を養う」という円満な美術することの能力を伸ばすことである。この目標の内容の次元差を、学年に応じて深化、展開していくように工夫している。

また本校の生徒の要求特性として認められることは、ある程度、知的、技術的、かつ情緒や精神性の困難度がある学習に集中する生徒が、割合高い比率でいるということである。反面、まだ主体性が形成されず、しかも無気力な生徒もあり、両者の差は大きい。そのため美術することの自覚に応じつつ、その自覚の先を行く個別指導を心がけている。

また目標の設定をより具体化する方向として、生徒に対して、表現及び自己の自覚の関係の把握とその深化を促すようにしている。つまり美術することによって絶えず表現や自分自身の「超越の世界」を考えさせることを心掛けている。内容の選択に関しては、人間が持つ、始源感覚という、表現全体を系統発的にとらえて、その始まりの部分のブリミティブな構造を絶えず考えて題材を選択し、開発している。また内容の配列に関して注意している点は、なるべく1学期期間を通して使用する大きな題材を、表現分野の偏重がないよう考慮しつつ必ず学期ごとに入れるように工夫している。中学校では、1学期には、主題材として重みのあるものを1つ、副題材として1~2週で出来るものを1つ設定している。次に夏休みには、授業では時間の取りにくい風景画的なもの、2学期は教育実習があるので、4週用と2週用の題材を、その実習生との話し合いによって決めている。場合によっては大きな題材をこちらが設定しそれを研究させることもある。だいたいにおいて2学期は授業が細切れになりやすく、表現することの内容を思索させることに不向きなので、彫塑、工芸など、その授業ごとにのめり込みやすい題材を考えて配列している。3学期はじっくり取り組める題材を1つする。1・3学期は平面、2学期に立体という扱いが多い。高等学校では1学期に1つの作品を中心にして、スケッチから始まり、作品の完成まで、計画性、客觀性が要求される度合の高い作品製作を行っている。

§ 2 本校美術科教育研究のあゆみ

1 創立から昭和51年3月まで（敬称略）

昭和22年、附中の開校年次は、故高妻巳子雄が美術担当であった。

昭和23年から33年まで、故木村茂が担当であった。木村は人間養成のための美術教育、美術全般に伸びる基本の修得を中心に、分析的研究と指導をした。また昭和30年頃より「一本線描法」の研究をし、当時の附中の美術教育の基本として指導した。

附高は、昭和31年に発足し、34年から47年まで木村が本教育大に移っても、ずっと非常勤講師として本校の美術教育にあたってきた。

昭和34年度から38年度まで、萩原直が指導にあたり、主に創造性の問題と、思春期の表現を研究主題とし、「構想表現の幅」（本校研究発表会の研究主題）や「描画不振時代（思春期の美術）をいかに指導するか」（本校研究集録）などの発表・研究がある。

昭和39年度から45年度までは、岡田博（現大阪教育大）が指導にあたった。研究の内容は、主に木版画の教材研究と新教材の開発、実用主義による教材史の編纂等、美術教育の革新を図ることを目標に、絶えず多くの研究活動をした。また大学へ移っても、49年度まで本校の非常勤講師をした。

昭和46年度から51年度まで、河村徳治（現大阪教育大）が附中・高の指導にあたった。河村は全人教育をモットーにした、中・高一貫教育を柱に、美術教育が単なる色や形の操作という一般的な理解を超えて、人間の感覚を磨き、豊かな感情と開かれた心を作り上げる教育を目指して実践した。

2 昭和51年4月から55年8月まで

美術科はその教科の特質から、たとえ同じ素材を同じ手順で指導する場合にも、指導者の考え方、方向によって、その実際的な意味は大きく変化する。しかし中・高6ヶ年一貫教育という本校の特筆すべき特徴、および毎年それぞれの学年の、集団としての性格がそれぞれあるにもかかわらず、前任の教官が築き上げた、広い意味での伝統は、有形、無形のうちに後任者にも影響を与えるであろうことも、また事実であろう。美術科は他の教科のように、主として知識とその使い方を通して、個々の生徒の人間性に影響を与える、というよりはむしろ、表現活動がそのまま直接、個々の生徒そのものの表出行為であるところから、美術科における教授活動は、それがそのまま教官と個々の生徒との一対一の対話である、という要素を強く持っていると考えられる。従って美術科における指導、授業内容は、その時々の教官の個人の全人格を生徒にぶつけ、それに対する生徒の反射性の中で、学級集団対教官個人でのかかわりという形式をとりながらも、実は教官と生徒個々との関係を樹立する、というところに存在している。そこで教官の個人的な研究分野、専門分野、好み、生活、知識等々のすべては、授業の場において生徒に投射される、とも言えると考えられる。

このような考え方のもとで、長町は昭和51年4月から、河村徳治先生の後任として、昭和55年8月までの4年4ヶ月にわたって、本校の美術科を担当した。昭和51年度の丸1年間は、前々任者である岡田博先生、および河村先生が、「新教材の開発」という研

究のもとで開拓、開発された教材を主として取り上げてきた。昭和52年度においては、それらの教材に加え、さらに新しい教材として、「ロウ（実物にせまる）」を、15週間にわたって取り上げた。その内容の詳細については、第25回研究会便覧(昭和52年11月)を参照されたいが、一言で述べると、食堂のショーケースに並べられている食品のサンプルと同じ制作過程をとりながら、その対象を教育的視点から、さらに広げようというものであった。しかしこの教材も基本的には、岡田、河村両先生の遺産ともよばれるべきものであった。実践はされていなかったが、そのアイデアは既にあり、長町がこれを教材化するきっかけは、河村先生との会話の中で生まれたものである。この内容についての検討は、附中・高研究集録第21集（昭和53年度）で行った。昭和54年度には「8mm 映画製作」を2学期いっぱいを使い行った。この詳細は本校研究集録第22集（昭和54年度）で報告したのであるが、まだビデオが現在ほど普及していなかった当時、附中・高の特色ある学校行事と関連させ、映像にその焦点をあてたものである。この内容の検討については、次の年の研究集録でなされるべきであったが、長町の転出のために実現していない。このほかにも、より短期間で取り上げた教材としては、国土地理院の地図を利用した「地図をかえよう」、レタリングと構想画を組み合わせた「字をうめこんだ絵」などの平面教材、「更紙一枚で何ができる」という題材名の、思考・発想の転換をねらった教材、附高の文化祭でのクラス毎の作品制作から逆に教えられた自由制作等々の教材がある。

美術科には中・高併せ専任教官が1人しかいないため、長町の在任中は直接担当した学年は、中学校の2学年のみであった。高校および中学校の1学年については、講師の先生方にお願いをしたのであるが、これは中・高一貫教育という点からは、長短両所を併せ持っていると考える。個人的な希望からすれば、中学校の延長として、高校生の指導も是非行いたかった。なぜなら先に述べたように、美術教育は指導者個人と先生との個人的な対話であると考えているので、途中断続的ではあっても、出発点の中学校1年生へと、最終点である高校2年生は、自らの責任、あるいはこれを制作にたとえるなら、最初の着手と最後の完成は、自分の手でやりたかったという、教育を創造活動として考えたいという志向があったからである。しかし逆の視点から考えれば、高校生を担当していないということは、1つには高校生の指導の場合、進学にそなえての、教育的指導というよりはむしろ受験対策としての指導という現実的な問題があるが、今一つは、中学校の限られた時間の中で、高校にまでその影響を及ぼさねばならない、というある種の個人的責任感から、中学校の指導で高い緊張感をもたらす、という長所があった。講師の先生方の指導内容にかかわらず、あるいは（実際にそうであったが）その内容が良ければ良いほど、そこにはある種の対抗意識が芽生えるものである。教わる立場である生徒の側からすれば、このことはきわめて望ましいものであると言えよう。彼等にとっては、同じ1つの教科である美術が、教える者の考え方や思慮によって、どれほど大きく変化できるものであるかということを、実際に体験することは、美術の広がり、美術の各個人とのかかわりの深さを、認識させるためには、きわめて有効であるとも言える。ここにおける中・高一貫教育の意味は、他の教科での系統性、一貫性とは別の、多様な対話を経験し、その中で自分の方向を見つけ出すという、美術のみが（おそらく）持ち得ている、知識とその使い方に重点を置くものではない、生徒一人一人を、それぞれ完

全な1個人の人間として認めるという立場でのものであろう。しかしこのことも、6ヶ年一貫教育という場においてのみ、言い得ることであることは言うまでもない。以上が中・高一貫教育の場である本校において、長町が実践し課題としてきたことである。

(前本校教官 長町充家・記)

3 昭和55年9月から現在まで（敬称略）

昭和55年の2学期から長町充家の大学への転出に伴い、武田薫が着任した。昭和55年美術科は教育研究会で発表する年であったが、着任すぐであるので次年度へ伸ばし、翌年度の発表を目指して題材の開発と研究を始める。内容としては「表現の獲得の基本論理とは何か」ということを研究テーマとした。昭和56年度（第29回）の教育研究会では美術の授業において、一般的なカテゴリー論をしっかり考えることの必要性と、それを美術の題材にどう応用するか「表現力を身に付けさせる基本論理とは何か」という研究主題で発表した。その時開発した題材が「神話」であり、生徒に神話を創作させて、それをもとに表現形式・内容を考えさせる、次いで仮面に描き込ませるというもので、その創造プロセスで、生徒自身による教材解釈の方法を獲得させる内容を盛り込んだものであった。また昭和56年度の美術科の研究テーマが「美術科における表現力について」であり、その成果の一つとして、表現力獲得のプロセスを考察した「表現の獲得」の第1報を、大学の研究紀要に執筆した。また昭和56年の1学期に、以後の研究の基本モチーフの一つとなる「聖と俗」「場の異質性と均質性」を扱った、「聖なる木」という題材を開発した。以後、表現における個人の異質性を中心にする研究方向を明確化してきた。また同年の2学期には、生徒の「原風景」を扱った「精靈」という題材、3学期には、構想力の育成と、生徒指導を関連させた、「私の家」という題材を開発。ここで、生徒指導、人格形成と、美術することの関連、及び学力としての志向性と構想力の問題が浮かび上がった。

昭和57年度の美術科の研究テーマは、「表現の関心の構造」であった。内容は生徒の関心自体が表現を伸ばす最大の力ではないかと仮定して授業を展開していく。昭和57年度の題材開発は、上記のテーマに沿って、「イニシェーション」とか「面の解釈」等であった。前者は通過儀礼についての問題提起、後者は能面的思考をもとに、述語となることを、それぞれ自分というものを起点として考えさせたものであった。ここまで研究の流れで分かるように、生徒の人格・主体性などを、題材にどう連関させるかを続けてきたので、その成果として、「主体的表現行為の生成を求めて」（教育大美術科紀要）と「表現の獲得」第2報を、本学の紀要に、また美術科教育学会に於いて、「表現力獲得の構想」を発表した。昭和57年度は人格の構造や美術教育の構造の解釈に明け暮れた年度であった。

昭和58年度の美術科の研究テーマは「中学生の世界観の形成と美術教育の関わり」とした。中学生が実際どのように自分と諸々の事象との関係を自覚し反省しているのか、そのことがどう表現に生かされ生徒指導にも役立つかを考えた。そのために開発した題材が「マンダラ」である。これは先ず自分と自分、自分と他者、自分と事……というようにあらゆる事象への関係を集合論的に知る限り箇条書きにさせ、それをもとにマンダラを作る方法でもって、マンダラとして描かせた。次に開発したのが「私の日常」とい

う題材で、自分の均質的日常から、特に注視するものを発見し、自分の原風景の一つとして思索させ、描かせるというものである。また研究紀要としては、「表現の獲得」第3報を本学の紀要に、美術科教育学会の紀要に「表現力獲得の構想」を、また近附連の当番校にもあたっていたので、その時、教育実習生の指導をテーマとして選び、発表・討議した。その時の発表内容をもとに、本校の研究集録に、「美術科における教育実習生の指導」を発表した。

昭和59年度の研究テーマは「美術教育における人格構造の生成」として、表現の構造と人格の構造について更に深く考えることにした。開発した題材としては、「地図をつくる」であり、風景という日常世界と、地図という反省世界とを、人にとっての地図と風景の関係として考えさせつつ、全く新しいと自分が思う地図を作らせた。また次に今まで4年間の実践例を教材解説し、その内容を、第7回の美術科教育学会にて「表現力獲得の構想Ⅱ」として発表、本学の紀要に、「表現の獲得」第4報を発表した。この頃までに表現することの深み、観念の大切さを自覚し、メンタリズム（意識中心主義）、メタフィジック（形而上学）を大切にした美術教育を考えることにした。

昭和60年度の研究テーマは「志向性と構想力」とした。また本年度は本校の研究発表の年でもあり、「美術教育における新しい学力観とその題材」を発表した。研究授業は「マンダラを描く」と、本年度開発した「石になる」であった。石になるでは、石を丸く丸く磨くその行為過程での、主客合一の集中体験や表現のフェティシズム性を考えた。この題材によって、表現の深みと自覚の深化との関連を図った。その論的押えは昭和60年度の本学の紀要に「表現の獲得」第5報として発表した。一応ここまでで研究のテーマとして、志向性、構想力、自覚を中心に扱うことが決定した。以上が現在までの本校美術科の展開である。

§ 3 問題点と課題

高校におけるカリキュラムにおいて、芸術科は選択教科となっているため、中学美術を学習した生徒の一部が連続して高校で学習することになる。そのため、中・高の5年間（高3での美術の授業はない）の流れのなかで、前半の3年間で1つの区切りとしなければならず、中学校における教材の開発及びその指導と、高校のそれとの一貫性を関連づける難しさがある。

専任教官が1名ということも指導上の困難さの1つである。中・高の美術教育の多くの部分を非常勤講師に依存せざるを得ず、本校の美術教育についての連続的、本格的な研究、討議が難しい状況を招いている。また、美術科の内容はその扱う幅の広さに比して授業時数が少ないので、各教師の専門分野の特性により、学習させる内容の統一化が難しい。しかも、美術の授業以外の生徒指導や行事等にかかわるところまで講師に依存することはできない。早急な美術科担当スタッフの安定が望まれる。

また、美術教室が、中・高施設全体のなかで1教室のため、時間割編成上、中学校の授業と高校の授業とが一部重なり、高校の授業は普通教室で行っている。そのため、中・高とも工芸的、彫塑的なものが少なくなったり、生徒作品を保管、展示するなど、美術教育の特徴を生かすことができない。施設の拡充が望まれるところである。

授業外の美術指導の一つに「美術クラブ」の指導があるが、ここにも問題点を抱えている。

美術クラブは中・高共に部員数は少なく、また以前ほどクラブ活動に打ち込む生徒がいなくなった。手頃な趣味の1つとして取り組んでいる場合が多い。このような生徒をどう主体的に活動させるかが当時の課題である。更には、美術系大学進学希望者の場合の指導にも苦慮している。美大進学の近道として美大受験予備校に通うものもあり、美術の場合、表現技術が、描く時間とある程度比例してくるし、そういう試練を乗りこえるのも必要な場合もあり、否定しにくい面もある。しかし、本来、美術科が個性を尊重し、それを伸ばす教科である点からすれば、合格を第一義とする予備校の受験勉強によって面一化され、個を捨て去る事態は憂うべきことである。この様な矛盾をかかえ、進学指導に苦慮する所以である。

武田 薫

保健体育科

§ 1 本校保健体育科における中・高一貫教育

1 保健体育科のねらい

教育の目標となるものには、社会の変化、学習者の変化に対応して、その教科の責を果たし、教育効果を上げいかねばならないものと、教科固有の特性から、比較的、社会の変化にかかわらず、恒久的にその目標を追求し、教育効果を上げていこうとするものがある。保健体育科の中で、後者の恒久的な目標となり得るものは、生徒の健康と安全にかかわるものである。これは、人が社会的な存在であると同時に、動物的な存在であり、より強い生命力、たくましい心身をつくり上げていくために必要な、適度な発達刺激としての運動量を確保し、その基礎を中学校、高等学校時代に築き上げていこうとするものである。また、将来において、余暇活動としての運動に親しむことの出来る技術を身に付けさせるということも含まれるべきであろう。しかし人としての発達だけではなく、人間としての発達を考える場合、社会の中でより善く生き、自己の生活を形成し、社会に貢献する豊かな感受性を有した人格の形成が重要である。そのためには生徒に提示する教材の持つ意味合いを練り、発達段階に応じたつくり変えを行い、それらを学習させる学習の仕方などが課題となる。これらはいずれも学習過程の中に含まれるべき内容であり、学習者の発達段階や、教材内容等に対応し、最適なものをつくり上げていく動的なものである。これらはどちらかといえば前者に含まれるものである。しかし、これらのねらいは相反するものでなく、むしろ学習する者にとって実践と認識として両立するものであり、実践が認識を生み出し、認識が実践を支える関係にあるべきものである。

さて、本校の保健体育科の流れをたどってみると、学習者の主体性、個を重視したテーマが主流であるのは、単に体育を発達刺激機として理解していないからである。昭和40年代の体力論についても、体力づくりの体操領域よりは、スポーツ領域の運動量を増加する工夫をしていることもその流れにある。現在、中学校、高等学校で一貫して付けるべき力は「運動実践にかかわって生じる諸問題を解決する力」であり、具体的には次の各項目となる。

- (1) 教師から与えられるよりは、自らに課した容易でない技や力を伸ばしていく力
- (2) その努力の中で友達と一緒にになって助け合い、学び合いながら技や力を伸ばしていく力
- (3) その過程で、あるいは結果として、運動の感覚を自分でしっかりと感じとる力

身体が大変によく発達する第2成長期、精神面で自立に向かう青年期を受け持つ中学校、高等学校の6年間において、共通の目標を持って授業に臨むことが、学習者にとって好条件であることはいうまでもない。特に、近年問題となっている運動不足等に伴う身体上の問題、グループ活動の機会の不足、抑圧を促す社会条件、そして生涯スポーツ

等の健康への関心等を考えてみた場合、中学校、高等学校の共通した目標を、6年間のカリキュラムに具現化することが望ましいことである。そして、その中に、中学校、高等学校それぞれの果たすべき役割、受け負うべき内容を設定する必要がある。

2 中・高6ヶ年の課題

本校の保健体育科の目標を中心とした研究テーマの流れは、次の項に記述されているが、昭和50年台以降の中学校、高等学校の目標における役割にしづらってまとめてみると次のようになる。中・高6年間の1年ごとに、連続的な課題を設定し、その課題を一段ずつ積み重ねて6年間で達成していくとするものではなく、6年間の大きな課題を持ち、さながら一本の原木から荒削りな、素朴な型をつくり、それを少しずつ洗練させながら上げていくとするものである。具体的には、中学時代には基礎的な体力づくりを中心として行い、その上に高校時代に技能を中心とした学習を行おうとするものなく、その教材の個別の特性（教材を成立させている内容）を十分に含んだ教材をつくり、中学1年生から不十分ながらも触れさせていく、徐々に洗練させていくことである。従って大事なことは、教材の成立要因について十分吟味し、学習内容が含まれ、生かされるように、発達段階に応じて教材をつくり出していくことがある。更に中学校では、その教材に対してもっともふさわしい学習パターンを確立させていくことが必要である。しかし、同一教材を6年間実施し、常に新鮮な状態で学習をさせるということは難かしく、また社会に出て、余暇活動に生かせるスポーツに触れさせることも大事であり、教材の拡大が要求されてくる。同時に種目に対する嗜好を生かし、自分の得意なものを持つという意味において、選択種目も考慮して授業を進めている。

以上1、2と述べて来たが、保健体育科としてのねらいから教材を見直し、ふさわしい教材につくり直し、より最適な学習過程を見出していくことが、現在の本校の課題であるが、それに至る課程を研究主題の流れの中でまとめてみたい。

§ 2 教育研究活動

1 本校保健体育科研究活動のあゆみ

(1) 昭和20年代前半（カリキュラムの研究）

終戦により、教材のスポーツ中心化、レクリエーション種目の重視、班別指導など、従来とかなり異った方向付けがなされる折、昭和22年学校体育指導要領が出され、カリキュラムの編成が現場教師に委ねられ、各学校独自で作成・計画することになった。また、コア・カリキュラムに対する関心の高まりとも相まって、体育は、コア・カリキュラムでいかに扱われるか、などのカリキュラム研究が行われ、この研究が本校体育科の研究活動の緒となった。

(2) 昭和20年代後半（ガイダンスの研究）

教科の学習が、教科外の活動につながるようにするとか、校内競技を、教科指導との関連において生活指導に役立てようとするなど、体育科の役割が、学校生活における大きな柱となり、必然的に体育科教育の関心の重点は、カリキュラムからガイダンス（生活指導）へと移行してきた。このような状況のもとで、授業の中で好ましい人

間関係の向上のための指導内容や方法、あるいは、自由時における体育指導のあり方や道徳教育との関連について、かなり広い領域にわたってのガイダンスの研究が行われた。

昭和23年12月10日

「ガイダンス並に単元学習指導」

研究授業 「バレー・ボール」 1年男・女 (本校教諭) 星野 義行

昭和25年2月3日～4日

研究授業 「ポートボール」 1年男子 (本校教諭) 庄司 正一

昭和25年12月1日

「ガイダンス計画の立案と展開」

研究授業 「ポートボール」 1年男子 (本校教諭) 庄司 正一

研究発表 「ポートボールについて」 (本校教諭) 庄司 正一

(本校教諭) 森口 肇

昭和26年10月31日

「中学校教育の全体計画と実践」——カリキュラムガイダンスと道徳教育——

指導講師 大阪市教育委員会 東野 兵次先生

研究授業 「ポートボール」 1年男子 (本校教諭) 森 勝治

昭和27年7月3日

「独立後の教育のあり方」 —— 各教科の指導実践 ——

指導講師 大阪学芸大学 重田 為司先生

大阪市教育委員会 東野 兵次先生

研究発表 「自由における体育指導(I)」 (本校教諭) 庄司 正一

(本校教諭) 辻江 正夫

研究授業 「柔道」 2年男子 (本校教諭) 辻江 正夫

昭和28年11月13日

「個人を育てる教育活動」

指導講師 大阪学芸大学 重田 為司先生

大阪市教育委員会 東野 兵次先生

研究授業 「柔道」 3年男 (本校教諭) 辻江 正夫

「バスケットボール」 1年女子 (本校教諭) 保田 喬

(3) 昭和30年代（グループ学習・系統学習の研究）

指導要領の改訂に伴い、団体的種目の指導についてグループ学習を強調し、生徒の学習意欲や自主性を重んじ、教師の計画的指導のもとで具体的目標を持たせ、異質グループによる話し合いによって学習が行われる授業の実践的研究を行った。その後、技術の獲得を合理的に効果的に行うためには、という観点から教材を系統化し、段階的指導による技能学習のための実験的研究を続けた。また、昭和31年に高等学校が併設され、いよいよ中・高6ヶ年一貫教育に向けてのテーマにした研究発表が行われた。

昭和30年10月26日

「個人を育てる教育活動」——中・高6ヶ年一貫教育 ——

指導講師	大阪学芸大学	重田 為司先生
	大阪市教育委員会	木南 道孝先生
研究発表	「調査にもとづく体育指導」	(本校教諭) 保田 喬
		(本校教諭) 辻江 正夫
研究授業	「陸上競技」 3年男・女	(本校教諭) 保田 喬
昭和36年 6月29日		
	「柔道の学習内容をどのように指導するか」	
指導講師	大阪学芸大学	重田 為司先生
	大阪府教育委員会	館野 進先生
	大阪市教育委員会	森口 肇先生
司会		(本校教諭) 保田 喬
問題提起		(本校教諭) 辻江 正夫
	大阪市立菅原中学校	寺尾嘉平史
研究授業	「柔道」	(本校教諭) 辻江 正夫
柔道審判法の実際指導		
	大阪府教育委員会	(本校講師) 館野 進先生

(4) 昭和40年代前半（体力養成と学習指導の研究）

東京オリンピックを契機にして、学習論とトレーニング論の2つの思潮が共存している中で、学習指導の方法についての研究が行われるようになった。本校では、技能と体力づくりとは分離して考えるべきものではないという観点から技能習得過程を通しての体力づくりはいかにあるべきかということについて、幅広い領域について研究が行われた。

昭和41年10月

「走力と練習効果」

指導講師	大阪学芸大学	重田 為司先生
	大阪府教育委員会	長野 元泰先生
	大阪市教育委員会	森口 肇先生
司会	大阪府立大手前高等学校	八倉 広道先生
問題提起		(本校教諭) 保田 喬
研究授業	「陸上競技」	(本校教諭) 保田 喬
講演	スポーツ振興と学校体育のあり方について	
	大阪市教育委員会	木南 道孝先生

昭和43年10月17日

「体力養成と学習指導」(I)

指導講師	大阪府教育委員会	長野 元泰先生
	大阪市教育委員会	辻江 正夫先生
司会		(本校教諭) 保田 喬
問題提起		(本校教諭) 風間 建夫
研究授業	「柔道」	(本校教諭) 中谷 宗弘
	「器械運動」	(本校教諭) 矢田 節彦

講演 学校体育における体力づくり 大阪教育大学 辻野 昭先生

昭和45年10月22日

「体力養成と学習指導」(II)

指導講師大阪府教育委員会

尾崎 弘明先生

大阪市教育委員会

辻江 正夫先生

大阪教育大学

青谷 基夫先生

司会

(本校教諭) 中谷 宗弘

問題提起

(本校教諭) 保田 喬

研究授業 「陸上競技」

(本校教諭) 風間 建夫

「ラグビー」

(本校教諭) 矢田 節彦

講演 キネシオロジーからみた「体操」領域の指導

大阪教育大学 辻野 昭先生

(5) 昭和40年代後半から現在まで（効果的な学習指導——意欲的に取り組ませるために ——）

昭和40年代後半、経済の高度成長と相まって現代社会の多様化・複雑化が増加し、それに対応した体育のあり方が論じられるようになった。その根底には、個人の尊重という考え方があり、本校の研究も、「生徒の欲求」「生徒達がやりたがり、知りたがっていることは何か」「生徒達に何を教えればよいか」など生徒自身が変化していくためにはどうあるべきかを探るようになってきた。つまり、一人一人の子どもの可能性を伸ばしていく「意味ある体育」となるためには、どのような学習指導をすべきかということが、幅広い領域で取り組まれた。

昭和48年10月19日

「効果的な学習指導」—— 意欲的にとりくませるために ——

指導講師大阪教育大学

青谷 基夫先生

大阪教育大学

辻野 昭先生

大阪府立西野田工業高等学校

久保 瑞祥先生

司会 大阪市立昭和中学校

小池 宗保先生

問題提起

(本校教諭) 風間 建夫

研究授業 「陸上競技」

(本校教諭) 風間 建夫

「バレー・ボーラー」

(本校教諭) 浦久保寿彦

「ラグビー」

(本校教諭) 矢田 節彦

講演 体育指導の科学化をめざして

大阪教育大学 辻野 昭

2 現在の研究

新しく出現する事態に積極的に挑み、よりよい方を求めていく創造的な知性（能力）や、「からだ」が生活の基礎となっていることを自覚し、調和のとれた状態でより高めようと考えると、その両面を受け負っているものが体育であり、これらの目標に到達するためには、学習活動そのものが活発でなければならない。その活動を活発化させるためには、生徒が意欲的に取り組んでこそ初めて可能となる。そのための具体的な手がかりとして次のようなことを求めてみた。

- ① 学習者が「運動のねらい」の見通しを持つ（認識する）ための工夫。
- ② 学習者の活動を方向付けるための具体的な課題及びその与え方の工夫。
- ③ 学習者が主体的に活動出来るような、発展段階に応じた課題の工夫。
- ④ 学習者が課題を解決していくために、具体的な方法を見付け出し、練り上げていくための手だての工夫
- ⑤ 学習者が学習活動を振り返り、到達の度合及び方向の修正を自ら図ることの出来る手だての工夫。

昭和51年11月17日

「効果的な学習指導」

指導講師	大阪教育大学	青谷 基夫先生
	大阪教育大学	辻野 昭先生
	大阪市教育委員会	保田 喬先生
司会	大阪教育大学附属高等学校平野校舎	辻江 正道先生
研究授業	「柔道」 中1 「陸上競技」 中2 「バレーボール」 高I 「柔道」 高I	(本校教諭) 西濱 士朗 (本校教諭) 風間 建夫 (本校教諭) 浦久保寿彦 (本校教諭) 矢田 節彦
提案		(本校教諭) 西濱 士朗 (本校教諭) 風間 建夫 (本校教諭) 浦久保寿彦 (本校教諭) 矢田 節彦
講演	体育指導の諸問題	

名古屋大学保健体育科学センター 小林 篤先生

指導要領の改訂によるまでもなく、生涯スポーツと切り離された学校体育は考えられなくなってきた。つまり、運動やスポーツの持つ本質的な喜びや楽しみを教えることがより重要な課題となってきた。これらの課題を解決するためには、学習者が意欲的・主体的に取り組むことが前提条件であり、そのために学習過程の工夫が当然必要となって来る。

○その工夫の手掛かりとして

- ① 運動のしくみ（教材の構造）を明らかにし、中心的な課題を明らかにして学習課程を工夫する。
- ② 学習者が、その教材で学習すべき技能の「めあて」や「みとおし」を持ち、主体的に追求出来るようにする。
- ③ 一つの学習課程に対して、幾つかの学習場面（課題解決場面）を認め、追求的な学習過程をつくる。

などがある。すなわち、探求的——課題解決的——グループ学習的（もしくは、発見的——体験的——個別学習的）な方向へ進んでいる。具体的な単元や一単位時間の流れは、

【みとおす】 — 【ためす】 — 【なおす】 — 【高める】 — 【たしかめる】

のように進めた。

昭和54年11月14日

「意欲的に取り組ませるための学習過程の工夫」

指導講師	大阪教育大学	辻野 昭先生
大阪市教育委員会		保田 喬先生
司会		(本校教諭) 矢田 節彦
研究授業	「バレーボール」 高Ⅱ 「柔道」 中Ⅰ	(本校教諭) 浦久保寿彦 (本校教諭) 西濱 士朗
提案		(本校教諭) 風間 達夫
講演	これからの学校体育	大阪教育大学 辻野 昭先生

昭和57年11月17日

「意欲的に取り組ませるための学習過程の工夫」

指導講師	大阪教育大学	辻野 昭先生
堺市立大浜体育馆		中谷 宗弘先生
司会	大阪教育大学附属高等学校平野校舎	坪田 信道先生
研究授業	「柔道」 中Ⅰ 「サッカー」 高Ⅱ	(本校教諭) 西濱 士朗 (本校教諭) 田中 譲
提案		(本校教諭) 西濱 士朗 (本校教諭) 田中 譲
講演	これからの学校体育における学習指導の問題点	大阪教育大学 辻野 昭先生

§ 3 今後の課題

社会の高度化・情報化が進み、余暇時間の増加だけでなく、社会の複雑化の中で、生活の中で占める「からだ」の割合は、これからますます増大していくだろう。単にスポーツや運動で余暇を過ごすだけでなく、社会の変化によって生じる様々な新しい事態に挑戦していくための基礎ともなるものが「からだ」である。その「からだ」を扱うべき体育の重要性は、単に身体を鍛えるだけでなく、より多くの能力の開発育成に関与していくことである。

更に、中等学校教育における中・高6ヶ年教育が脚光を浴びている今日において、本校の特性を活かした6ヶ年一貫の体育が、これららの一つの重要な指針となり得るものと確信する。以上の二つの点を踏まえたうえで、本校における中・高6ヶ年一貫の体育の今後の課題について一考を加えたい。

まず、中・高6ヶ年の利点の一つとして、生徒の様々な能力の発達発育を6年という長期の展望の中で見つめることが出来ることが挙げられる。そのため、体育の授業の成果を生徒自身が6ヶ年の中でどう獲得し発現していくかという過程を十分観察することが可能である。更には、その結果をフィードバックし、新たな課題を発見することも容易となる。それだけに、どの時期にどのような技術や体力、あるいは態度などを指導育成すべきかをより明確にしていかなければならないだろう。

次に、中・高とも同じテーマや目標を掲げた授業が出来るので、より徹底した指導が出

来る点である。体育の授業において生徒達が身に付けてほしい能力や考え方は、常に一貫している。更に、より一層良いものを目指すためには、学習過程の工夫や教材づくりの工夫が必要となって来る。また、これらの目標を達成していくためには、生涯に関わる問題として体育をとらえた時、単に中・高6ヶ年だけでなく、小学校をも含めた小・中・高12ヶ年における体育の一貫教育が当然重要となって来る。幸い、本校では、昭和 年以降、小・中・高合同の研究会が各教科毎に毎学期催されている。その中で、昭和56年には肥満に対して調査がなされ、その結果が全附連で発表された。その後、教材についての工夫ということで、バスケットボールと陸上競技の小・中・高の実態を持ちより、そこに見られる問題点や共通点を抜き出すことにより、小・中・高12ヶ年一貫のカリキュラムをつくり出す作業に入っている。今後、これらを土台にして、さらに幅広い領域にわたっての研究実践を拡大していきたい。

その他の課題としては、本校の施設・設備に起因する問題がある。残念ながら、本校の体育施設は極めて不充分で、他の附属中・高校や府下の公立中・高校と比較しても、はなはだしく不備な点が多い。グランド、体育館などの施設は大学と併用であるうえに手狭でもあり、プールや武道場などは他の中・高校ではほとんど設置されているにもかかわらず、本校ではいまだに無い状況である。このことは、授業内容の幅を広げることを制限し、より充実した学習活動を進めるうえでは、まことに遺憾である。生徒の使用頻度から考えても、現在は極限の状態であると考えられ、授業の効率という面だけでなく、安全面に対する配慮が、他校以上に必要であり、それが授業者の大きな負担であることも事実である。今後、大学の移転、統合に伴って中・高の体育施設が整備されると共に、中・高のカリキュラムや学習内容にも検討を加えていかなければならないだろう。

また、本校の特色として、体育的な学校行事の多様さが挙げられる。中・高共通のものもあれば、独自のものもあるが、どちらについても本校体育教官は大きく関与している。これらの行事は、それぞれに意義を持ち、長い伝統の中で培われて来たものではあるが、それに安住することなく、常に改良を加え、より良いものを目指していくなければならない。近年は特にそういった行事に対する生徒の取り組み方や考え方も徐々に変わって来ているようであるが、単に生徒にやらせるだけでなく、大きな観点から生徒自らが取り組んでいけるような知識や物事に対する考え方の教育をも含めて指導していく必要性を痛切に実感していることを申し添えたい。

浦久保寿彦
風間 建夫
田中 謙
西濱 士朗

技术・家庭科

§ 1 本校技術・家庭科における中・高一貫教育

1 技術・家庭科教育の目標と概観

本教科の前身は、「職業科」である。ところが、科学技術の急速な進歩と産業の発展が極めて重要であるという認識に基づいて、昭和33年の教育課程の改訂に際して新設されたものである。昭和51年には、実践的、体験的な教科の性格を一層明確化し、更に男・女の履修方法を改めたのである。

に男・女の履修方法を改めたのである。

次に掲げるような役割を担って出発した。

(1) 具体的な事物を対象として、その中にはたらいている幾多の原理性や法則(規則)性を理解させ、その理解を基礎として生徒の創造的な思考力や実践的な態度・能力を伸ばす。

(2) 技術と自然科学の相互依存の関係を理解させ、合理的(技術の持つ最適性の追求)、実証的な精神を陶冶して、新時代にふさわしい国民性を形成する。

(3) 技術は生活の向上を願って生まれ、社会的環境の中で育ったことを理解させ、現代の産業や科学・技術の進歩のもたらす様々な変化や問題に対する適切な判断力を育てる。

(4) 科学技術の成果を家庭生活の実際面に活用させ、作り、使う学習を通して勤労の尊さを体得させ、賢明な消費者を育てる。

ところで、本教科の目標としては、総括的には次のようである。

「生活に必要な技術を習得させ、それを通して家庭や社会における生活と技術との関係を理解させるとともに、工夫し創造する能力及び実践的な態度を育てる。」

この目標の中で「生活に必要な技術」の見方や考え方は、未来社会への適応よりも、学習の適時性を重視することにあり、産業に必要な技術とか、生産に必要な技術というとらえ方はせず、家庭や社会における生活活動を充実発展させる目的の最適化に「技術」は貢献すべきものであるというとらえ方をするのである。そこで、その内容は、将来役に立つという観点よりも、生徒の人間形成上有効であり、適切であるという観点を重視して選定するようにしてきた。

したがって、本教科では、技術と生活とのかかわりを正しく理解し、生活の見方や考え方、さらには行動のしかたを技術の習得を通して身に付けるようにすることをねらいとしている。そして、とかく技術の自然的側面のみが重視されがちであるが、人間尊重・生活優先の立場にたって技術をとらえるようにしている。

更に、主体的な実践活動を土台として問題解決を図る能力を養い、自己を生かし、意欲を高めるようにしてきた。すなわち、本教科の学習では知識・技能を習得するだけでなく、働くことについて考え、これについて積極的な態度を育成することも極めて重要

なことなので、製作実習の過程において、主体的・創造的に問題解決にあたらせ成功感や成就感を体得させてきたのである。

⑩ 参考文献 技術科教育の研究 教員養成大学・学部教室研究集会

技術科教育部会編著

第一法規出版株式会社発行 昭和53年3月30日

P 13から P 18

2 本教科の内容

本教科の指導すべき内容は、男女の学習系列を「技術系列」「家庭系列」と大別し、右の表のように領域別学年(標準)配当になっている。(○印で表す)

領域はA～Iまでの17領域があり、1領域あたり20単位時間から35単位時間までを標準授業時数としている。更に、男女のいずれにも地域や学校の実態及び生徒の必要並びに男女相互の理解と協力を図ることを考慮して、7以上の領域を選択して、履修させる。

その上、原則として男子にはA～Eから5領域、F～Iから1領域、女子にはF～Iから5領域、A～Eから1領域を含めて履修させるような計画をすることになっている。学習活動は実習を中心として、内容を示す事項が有機的な関連をもち、総合的に展開してきた。知識や技能の単なる習得に終わることなく、習得した知識や技能を積極的に活用する能力を伸長するとともに、仕事の楽しさや完成の喜びを体得させることを通して、勤労観の育成や家庭生活に関する理解を深めるように配慮してきた。

§ 2 実 践

1 履修領域

昭和51年から昭和60年の過去10年間の本校における履修領域を挙げると、以下のようである。

昭和51年度～昭和54年度

	1 学期	2 学期	3 学期	時数
一 学 年	製図(製図の基礎) 食物1(かんたんな日常食)	木材加工1(板材一本箱・ミニレターラック) 被服1(中学生の日常着・パジャマの製作)	金属加工1(板金・チリトリ)	105

	1 学期	2 学期	3 学期	時数
一 学 年	木材加工2(角材一万能台の製作)	機械1(自転車・動くおもちゃ)	金属加工2(焼き入れ・ポンポン船)	70
	被服2(被服整理)	電気1(屋内配線)	食物2(青少年の食物)	
三 学 年	機械2(エンジンのしくみ)	電気2(高周波一段・低周波二段ラジオの製作)		70
	被服3(サンドレスの製作)	食物3(成人の食物)	住居(住空間の計画)	

昭和55年度

	1 学期	2 学期	3 学期	時数
一 学 年	製図(製図の基礎)	木材加工1(板材一本箱)	金属加工(板金-チリトリ)	105
	食物1(かんたんな日常食)	被服1(中学生の日常着・パジャマの製作)		
二 学 年	木材加工2(角材一万能台の製作)	電気1(水位報知機)	機械1(自転車・ミシン)	70
	食物2(青少年の食物)		被服2(被服整理)	
三 学 年	電気2(高周波一段・低周波一段ICラジオの製作)	機械2(エンジンのしくみ)		70
	被服3(サンドレスの製作)		住居(住空間の計画)	

昭和56年度

	1 学期	2 学期	3 学期	時数
一 学 年	食物1(食物と生活 青少年の栄養と献立)	木材加工1(板材一本箱)	金属加工(板金-筆入)	105
		被服1(スマックの製作、刺しゅうの基礎)		
二 学 年	木材加工2(角材-万能台の製作)	電気1(水位報知機・蛍光灯スタンド)	機械1(自転車・ミシン)	70
	食物2(青少年の食物)	電気1(蛍光灯スタンドの製作)	被服2(被服整理)	
三 学 年	機械2(エンジンのしくみ)	電気2(高周波一段・低周波一段ICラジオの製作)		70
	被服3(パジャマの製作)	食物3(成人の食物)	住居(居間や台所)	

昭和57年度～昭和60年度

	1 学期	2 学期	3 学期	時数
一 学 年	木材加工1(板材一本箱・かぎり本棚)	食物1(食物と生活・青少年の栄養と献立)	金属加工1(板金-筆入・卓上チリトリ)	70
	被服1(被服と生活・エプロンの製作)			
二 学 年	木材加工2(角材-万能台の製作・竹トンボ)	電気1(壁かけ蛍光灯の製作)	機械1(自転車)	70
	食物2(食生活と消費者 青少年の食物)		被服2(編みもの・休養着の製作)	
三 学 年	電気2(高周波一段・低周波一段ICラジオの製作)	機械2(エンジンのしくみ) 電気1(水位報知機・ベビーフットライト)・機械1(拡大器)		105
	被服3(パジャマの製作)			
	住居(居間や台所)			

2 領域別指導内容

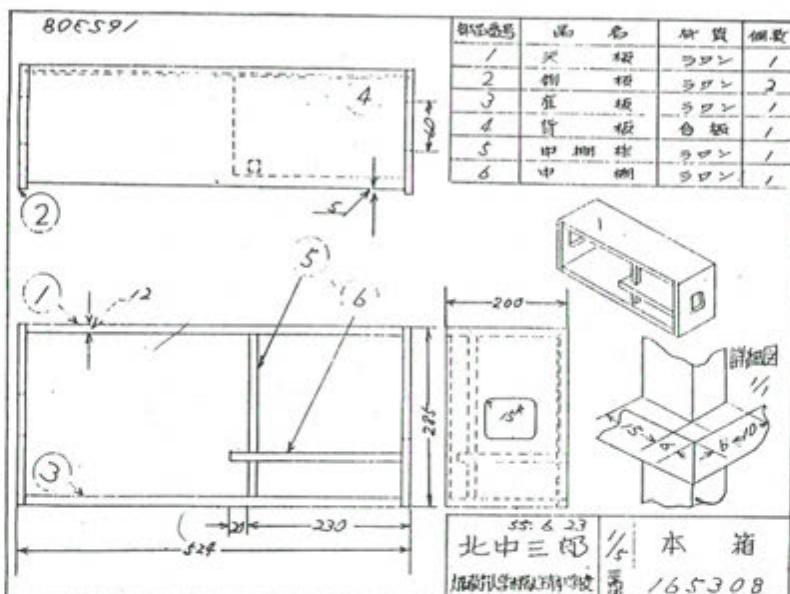
本教科の目標にそって、実習題材を以下のように設定し、実践してきたことを昭和50

年度から現在までについて述べる。ただし、昭和49年度までは、研究集録第18集 P 363からP 386に掲載されている。

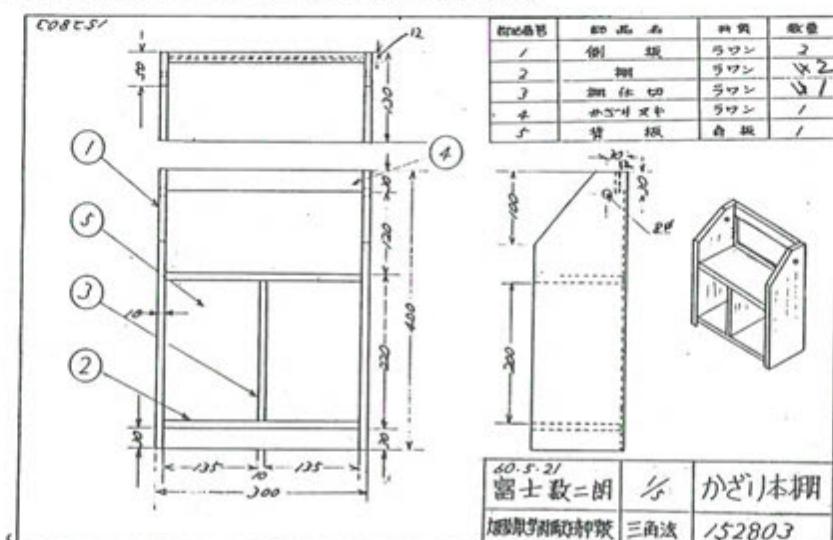
(1) 木材加工領域

昭和50年度から現在まで

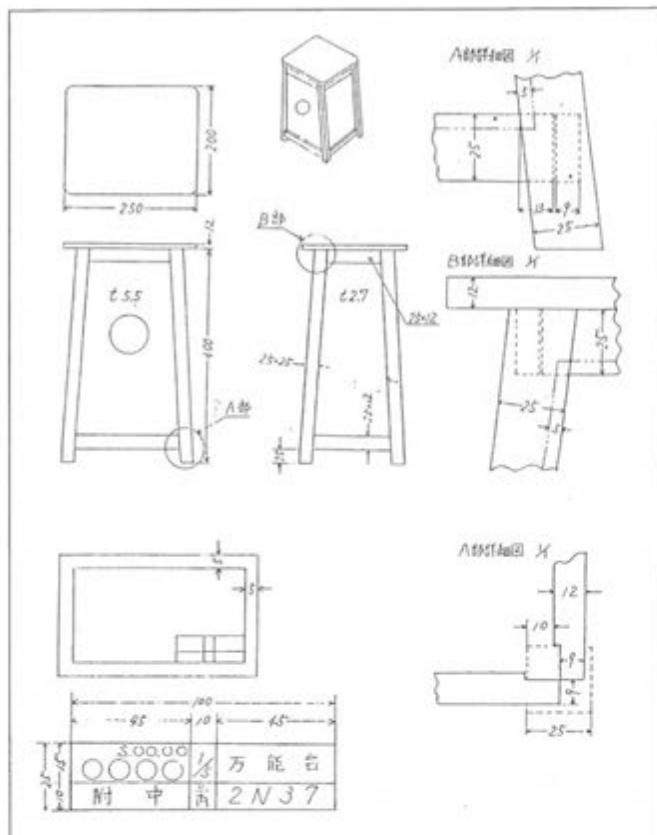
題材を本箱とし、その機能から大きな本もさしこめるように横に本立を設けるようにした。ところが、棚板の性質を理解させるために、その本箱の中に、柱を設けて、棚板を付けることを、昭和55年に実施してみた。少し、高度な作業内容であったが、時間配分や、作業の楽しさは味わえたと思う。その製作図の例を下にあげる。



上記の本箱製作を5年間実施して来たが、その結果から、新しい題材ということで、かざり本棚を製作させた。その製作図は下図である。



もう一つの題材として、腰掛に変えて、昭和50年から万能台を製作させてきた。本題材は、教科のねらいもふまえ、難じきも多少あり、2年生の題材として、本箱からの発展性もあって良かった。なお、万能台というのは、椅子、踏台、置台、くず箱などと、いろいろなことに使えるということで名付けたものである。



(2) 電気領域

昭和50年度から昭和54年度まで

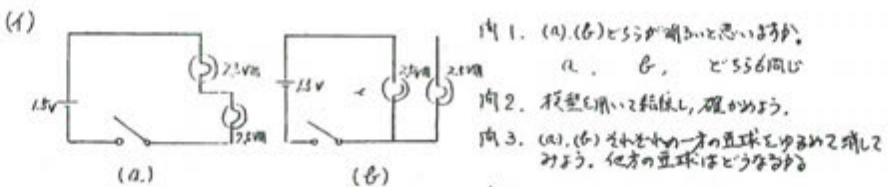
電気1では、題材を屋内配線と決め、基本的な電気回路から、回路計の取り扱い、蛍光灯のしくみ、アイロンのしくみなどを学習してきた。

電気2では、「高周波一段・低周波二段ラジオ」の製作をしてきた。このラジオは、昭和48年度から取り入れ、部品のハンダ付けから、ケースの加工まで、すべて、自作させた。なお、その詳細は、研究集録第18集（昭和51年3月）に掲載してある。

昭和55年度から現在まで

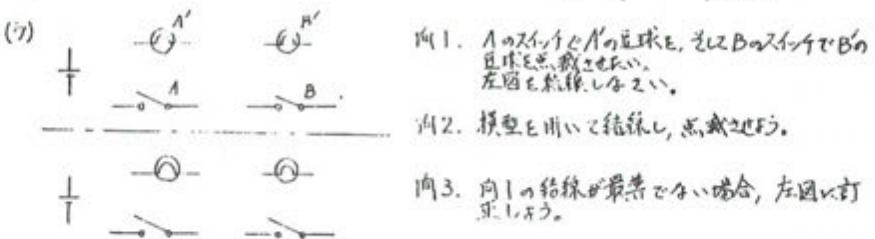
電気1では題材に「水位報知機」の製作を取りあげた。まず、下図の実習作業票で、電気の基礎を学んだ。

技術・家庭科 亚丸 1 実習作業票

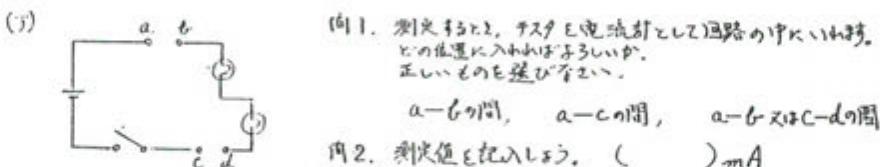


- 問1. (a), (b)どちらが明るいと思います。
a. b. どちら同じ
問2. 模型を用いて結線し、確かめよう。

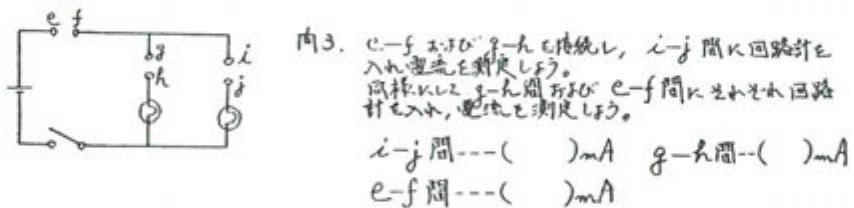
- 問3. (a), (b)どちらを止め一方の直球をゆるめて点灯してみよう。他方の直球はどうなるか。
問4. (a), (b)どちらの直球のつなぎ方を何といふ。
(a)---()つなぎ
(b)---()つなぎ



Ⅲ. 回路に流れる電流を測定してみよう。



問2. 測定値を記入せよ。 ()mA



その後、下記の部品表をもとに、次のページの図の配線の水位報知機を作成した。電気の基本が分かりやすく、製作では、リードスイッチの働きに、興味を持たせることが出来た。その詳細は、研究集録第23集（昭和56年3月）に掲載してある。

水位報知機部品表

	部品名	規格	数量	備考
1	ブザ	DC 3 V用		
2	リードスイッチ			
3	スライドスイッチ	3 P ON-OFF-ON		
4	磁石	ドーナツ型		
5	乾電池	単2		
6	電池ホルダー	単2用2ヶ口		
7	アクリルパイプ	外径15mm 長さ150mm		
8	アクリルケース	37×65×137mm		
9	ビニールコード			
10	塩ビ板	2×50×100mm		
11	ビス	直径2mm		
12	浮子(発泡スチロール)	20×50×50mm		
13	その他	半田、絶縁テープ、塗装用接着剤、その他		

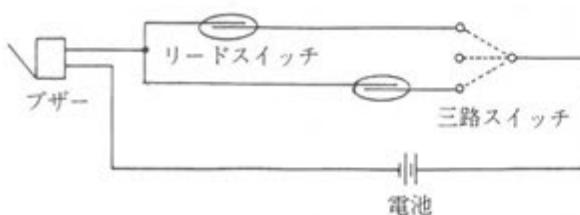
昭和56年度には、「水位報知機の製作」と「蛍光灯スタンドの製作」を比較する実験授業をした。A組・B組の2クラスは「水位報知機」を製作し、C組・D組の2クラスは「蛍光灯スタンド」を製作させた。

昭和60年度は「ベビーフットライト」の製作をしている。

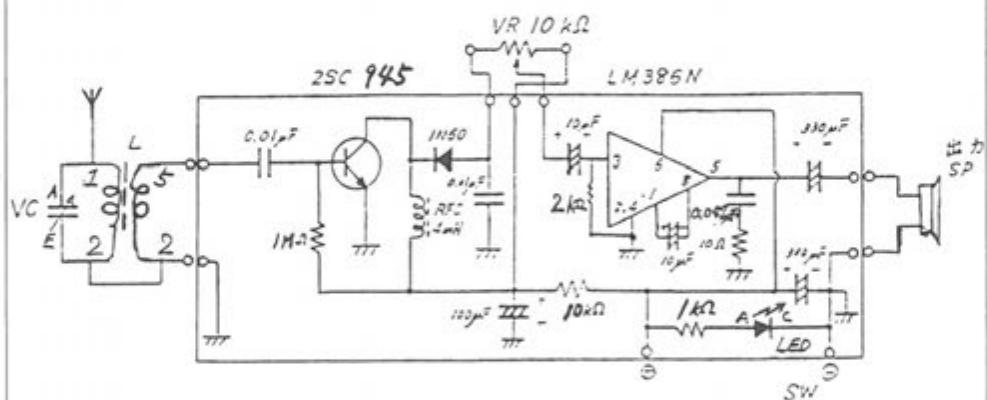
なお、昭和55年度、「水位報知機の製作」の題材で、男女共修を行った。昭和56年からは別学にした。なお、そのことについては、後述してある。

もう1つの電気2では、昭和55年度から集積回路を取り入れた。その配線図の例を下にあげる。

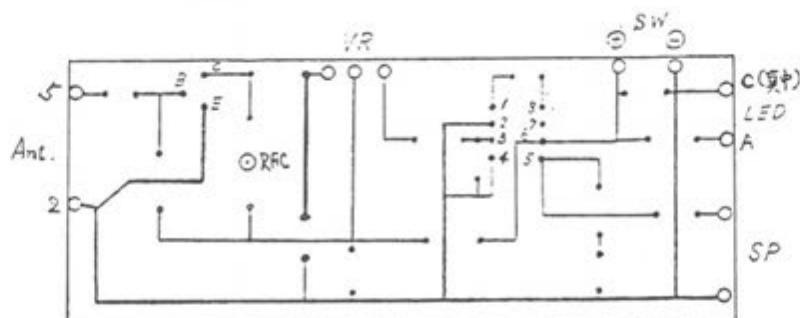
水位報知機回路図



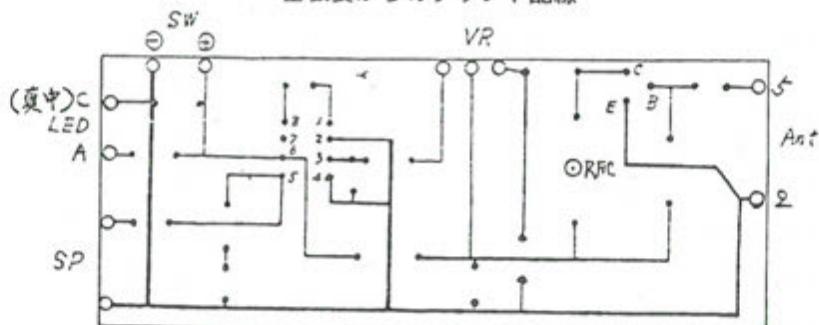
高周波一段・低周波一ICラジオ配線図



基板表から透かして見たプリント配線



基板裏からのプリント配線



・枚数424

従来の「高周波一段・低周波二段ラジオ」に比べて、この「高周波一段・低周波一ICラジオ」の方が感度が良く、また、製作もかなりコンパクトに出来た。昭和58年度には、スピーカーを従来の0.2Wから1Wに変えた。さらに、昭和60年度には、感光基板というものを取り入れた。この感光基板のおかげで、プリント配線を、生徒が一人一人、より工夫されたものとして作り上げた。

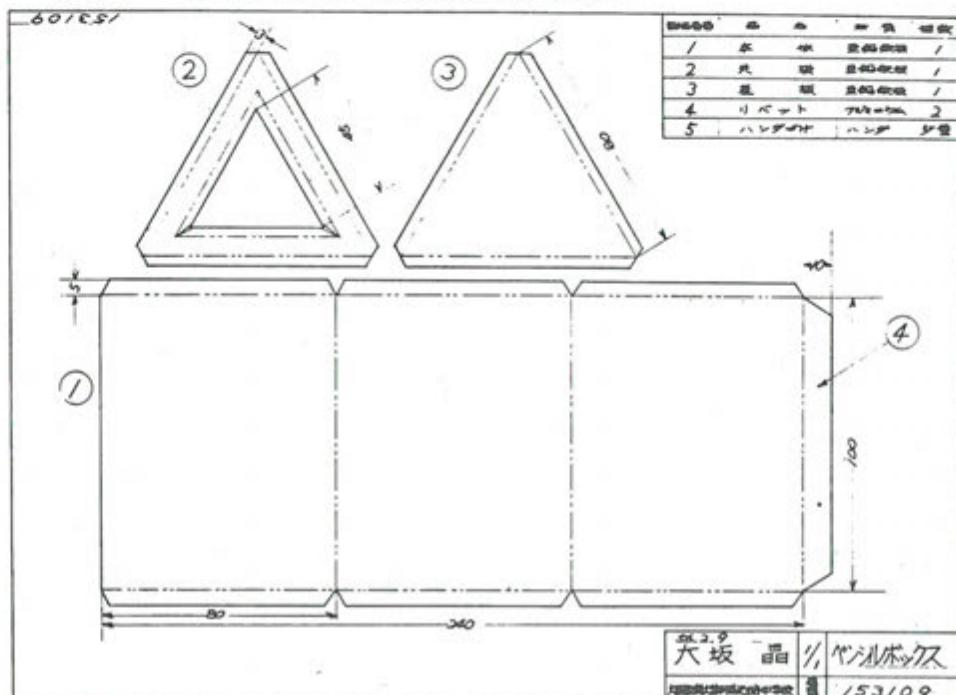
(3) 金属加工領域

昭和50年度から昭和54年度

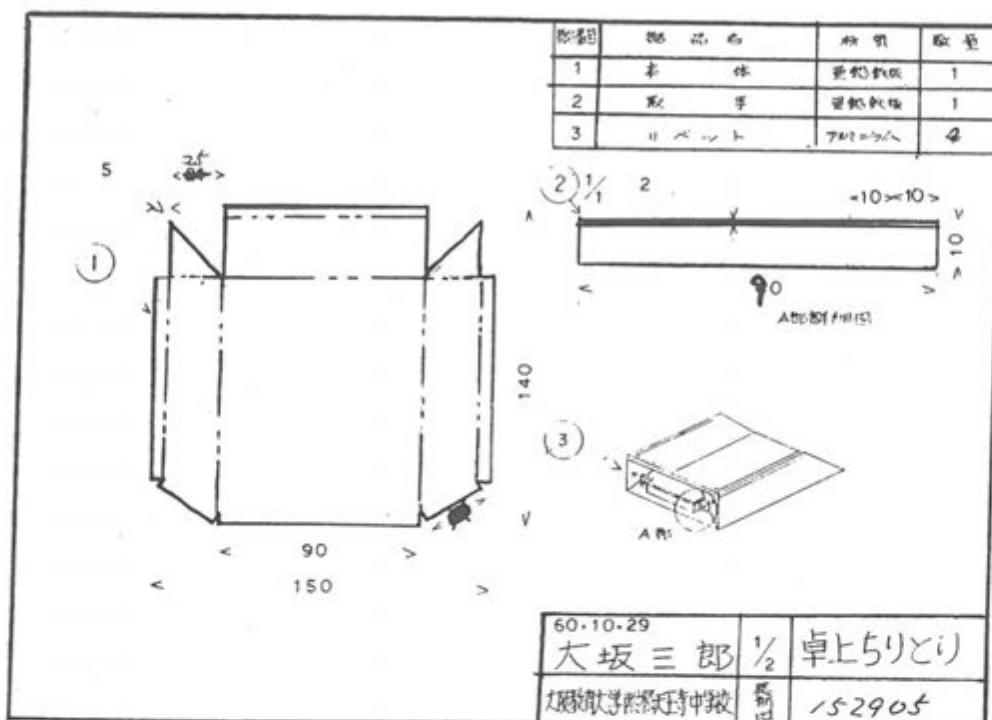
金属加工1では、題材として「チリトリ」を製作してきた。金属加工2では、焼き入れの仕方や、旋盤の取り扱い方を学んできた。

昭和55年度から現在まで

「チリトリの製作」からリベットを使わなくとも作れるようにするために、下図のような「ペンシルボックス」を製作するようにした。



更に、昭和60年度は、下図に示す「卓上ちりとり」の製作をさせる。



(4) 機械・その他技術系列

拡大器の製作、動くおもちゃの製作、竹トンボの製作、ミニレターラックの製作、ポンポン船の製作など複合題材として取り上げてきた。

(5) 被服領域

この領域は女子向き（S 51～55）、家庭系列（S 56～）では、量的、質的にかなりのウェイトが置かれているように考えられるし、生徒達の興味、関心も高い。しかしながら製作に関しては経験が乏しく、また家庭においてもそのような場面を見ることすら非常に少なくなってきた。が故に百聞は一見にしかずと、先ず生徒の手で手がけてこそ、自分達の着用する被服を見る眼が養われるのではないかという期待を持って、今日まで取り組んで来ている。

右表のような計画のもとに、5年間実践し、毎日身に付いているブラウスがどんな部分、どんな型からなっているのかすら注意し見ていなかった生徒が、自分の身を包むものが自分の手で縫い上げられる喜びにひたつたものである。被服室も整い、足踏みミシンから電動ミシンへと徐々に移っていって能率も上がって来ていた。

一般的には被服生活が、既製品化して

昭和51年～55年

第一学年	○中学生の日常着 着用の目的、構成（体型、体型と被服、動作と被服） 被服材料（機織の種類と性質、織物と編み物）	(16時間)
	○製作の計画 〔パジャマ——ラグランそで〕 裁縫ミシンとアイロン（基礎縫い、8種類） 製作 型紙と布地	
		(35時間)

いき、一段と種類も豊富になり、サイズもJIS規格に統一される方向の中で、手作りという名のもと「パターン洋裁」が普及しはじめて来た。被服が家庭で手作りされるのは、20数年も前の必要性からというのではなく、刺しゅうや編みもののを楽しむというレベルで考えられるようになって来た。

指導要領の改訂に併い、従来、第1学年を週3時間、第2、3学年を2時間とっていたものを、2、2、3時間とし、指導内容も検討・精選して来た。被服領域では、製作に費やす時間の多さを考えると、製作するものに何を選べば、基礎となるものを学ばせられるのか、また作品を生活の中に生かすということはどのように考えていくべきかということに焦点をしづらざるを得ない。

ここ数年、実習を通じて痛感することは、針が持てなくなってきたという事である。4、5年前までは手縫い、あるいはミシン操作も小学校での学習に負うところが大きかったが、余り期待できない状態になってきている。そこで手縫い練習を主眼に刺し子の花ふきん製作を組み込んだり、ミシンの操作中の糸のからまりや、下糸巻きにもかなり手を貸していくかねばならない毎日である。1学年で取り上げるエプロンも当初考えていたもの（図1）から60年度はその無いものに切り替え、うでカバーを作りそでにかわるもの（図2）とした。それでも時間的には変化がみられない状態である。

第二学年	裁断 本縫い 仕上げ まとめ——夏の行事・休暇中に着用して—— ○被服整理	(5時間)
	○サンドレスの製作 技術の定着と個性化をめざして ○衣生活の課題	(18時間) (7時間)

昭和56年～60年

第一学年	○被服と生活 被服の役割 作業着(作業着の役割、被服材料、被服の構成) ○製作の計画[エプロン-調理実習用](36時間) 裁縫の基礎(手縫い、ミシン縫いの練習) 製作 型紙と布地 裁断 本縫い 仕上げ まとめ——調理実習で着用して——	(6時間)
	○被服整理 ○編みもの かぎ針編み、棒針編みの基礎 応用作品の製作	(6時間) (14時間)

第二学年	○休養着の製作 休養と被服 休養着の種類 ○製作の計画[パジャマ-ふつうそで] 製作 型紙と布地 裁断 本縫い 仕上げ まとめ——夏期休暇中に着用して—— ○衣生活の課題 個性化のために 和服を考える	(40時間)
		(5時間)

第三学年	裁断 本縫い 仕上げ まとめ——夏期休暇中に着用して—— ○衣生活の課題 個性化のために 和服を考える	

1学年のエプロンで時間をかけておくと、3学年のパジャマはかなりの出来ばえを期待することはできるが、個性化を目指してデザイン上の変化を多く取り入れることは困難である。布地選択ぐらいの範囲である。

製作後の反応は非常によく、1学年のエプロンは3年間の調理実習時に着用することができ、従来の既製品の時よりは一人一人の生徒らしさを見るようで楽しみであるし、生徒も自分がまさか着られるものができるとは半信半疑であったためか感激し、次のパジャマの時はと意欲をかきたてているようである。

図1



後明き(ひも)

えりぐり(バイピング)
ポケット口

平そで

図2



後明き(ひも)

えりぐり(チロリアンテープ)
ポケット口

そでなし

(6) 食物領域

食物領域については、この10年間大きな変化がないのであるが、食生活の中身は随分な変化を余儀なくされている。今、生徒達の周辺は飽食という言葉で語られるように食べものが氾濫し、豊かではあるが本当の豊かさは何かなどと考えねばならない。その根柢となるものをしっかりと身に付けさせたいと暗中模索の毎日である。この領域では、小学校での6つの基礎食品を中心とした学習がかなり定着しているので、その土台の上に栄養所要量や食品群別摂取量のめやすをもとに献立作りが出来ることを理論面では主に進めて来た。問題になるのは、実体験の少ないことで、取り上げられる食品がなかなか

昭和60年度の指導

	理論的内容	実習実験内容
第一学年	<ul style="list-style-type: none"> ○ 食物と生活 食物の役割 ○ 青少年の栄養と献立 青少年の栄養の特徴 栄養所要量 食品群と摂取量のめやす 日常食の献立 <p>(8.5時間)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 調理の計画と準備 計画のたて方(材料・手順など) 用具・熱源のあつかい方 ○ 米飯・さつま汁・卵焼き 炊飯実験を含む ○ カレーライス・サラダ <p>(7.5時間)</p>
第二学年	<ul style="list-style-type: none"> ○ 食生活と消費者 生鮮食品と加工食品 食品の品質と保存 食品添加物 ○ 青少年向きの献立 献立の条件と作成 <p>(8時間)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ スパゲッティミートソース・果汁かん ○ 五目だし・すまし汁 ○ ハンバーグステーキ・にんじんのグラッセ ○ お弁当づくり <p>(12時間)</p>
第三学年	<ul style="list-style-type: none"> ○ 成人の栄養と献立 成人の栄養の特徴と栄養所要量 成人向きの献立 ○ 食物と生活 食物費と食生活 これからの食生活 <p>(8時間)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ たきこみ飯・かきたま汁 ○ 米飯・茶わん蒸し・青菜のごまあえ ○ カップケーキ (卵の起泡性の実験として) ○ マーブルケーキ・紅茶 ○ 季節に合った献立(課題) <p>(16時間)</p>

り限られてくることや、自分の食べたものにどんなものがどのようにして食卓に出てくるかが分からぬということである。健康指向の強い中で、生徒の家庭においても配慮がなされようとしているのも事実であるが、半加工品も含めて加工食品、調理済み食品の占める割合も増大の傾向にある。生徒は手作りのものでという希望を持って学習に臨んでいるが、CMに流されたり、最近のファッション化した清涼飲料水に手を出したり現実とのギャップはありそうである。

食品成分表の改正、栄養所要量の改正、1日30食品をという厚生省の指導などを盛り込んで生徒の食生活への関心を正しい方向へ導きたいと願う毎日である。この領域では、やはり実習が多ければ多い程良いと考えるが、グループ学習の形態をとることで積極的に参加しようとする生徒とそうでないものとの差や、技術面での指導と評価など難しい問題をかかえている。実習については事前の指導と計画に重点を置き、事後の感想、反省に次への飛躍の力を見たいと記録表を大切に扱って来たが、なかなか真意が伝えられず歯がゆい思いをすることも多い。この点では、今後、継続して研究を進めていかなければならない。

家庭生活が能率化、合理化され、幾つかの機能が社会化される中で、残るであろうと考えられて来た食物領域も、社会化、画一化されようとしている。健康保持を中心にして、見直すべき時期ではないかと考え、おいしく食べるとはどういうことかの原点に立ちかえってこの領域の指導に当たりたい。

(7) 住居・その他家庭系列

住居領域は第3学年の2学期に週1時間分の方を当てて指導するようになって、5年になる。住居は家庭生活の場として、家庭の機能、家族間のつながり等を折り込みながら学習させていきたいとの意図で3学年に置いた。単に空間があって、物(家具)があるのでなく、「人」の息づかいを感じながら学習を進める。ただ注意すべきことは、個々の持つ住まいの問題を一般化し深めることである。

電気領域は技術系列の報告のような男女共修もあったが、指導者側の学年配置、調理室の規模などの問題もあって続けることに支障をきたしたので、現在は2学年に壁かけ蛍光燈の製作を中心にして置いた学習を組んでいる。水位報知器のような回路の幅広い学習を取り入れるに至っていないところが問題点である。

保育領域は中・高一貫教育の中で高等学校の家庭一般に組み入れて指導することによって、自分と親のかかわりまでもかなり客観的に見ることもでき、狭義の保育から一步進んだ深い学習が可能となっている。

総合学習的に昭和58年度から取り組んでいることに、情報の収集がある。これは、夏休みを利用し、新聞、雑誌等で家庭生活に関する記事を集め、考察をレポートしていることである。日頃、見過ごしてしまう記事から広く自分の考えをまとめていく学習は効果があり、発表会も力がはいっている。期間が夏に限られていることで話題も飲料水や涼しく生活するにはなども多いが、生徒の関心を知ることもでき、今後も続けていきたい。

3 研究発表・研究集録

昭和50年度から現在まで（敬称略）

昭和51年11月17日(水) 第24回 教育研究会

主題 技術・家庭科学習の個別化

(ラジオ教材の定着をめざして)

授業 中村 潔 「トランジスターによる増幅回路（バイアス回路について）」

授業 中村 潔 「高周波一段・低周波二段ラジオ」の製作（基板の配線）

提案 中村 潔 「技術・家庭科学習の個別化」

指導講師（大阪府科学教育センター技術・家庭科室長）八木次良

(大阪教育大学教授) 齋藤 洋

(豊中市立第二中学校教頭) 乾 秀也

講演 「技術・科庭科学習の効率化について」 (大阪教育大学教授) 齋藤 洋

昭和51年11月17日(水) 第24回 教育研究会

主題 被服学習の考察

授業 藤村克子 「中学生の活動的な日常着」

提案 藤村克子 「中学校家庭科と被服学習」

指導講師（大阪教育大学教授） 小河 ソノ

(大阪教育大学附属池田中学校) 村上 君子

講演 「家庭科教育のめざすもの」 (大阪教育大学教授) 齋藤彦次郎

昭和55年11月19日(水) 第28回 教育研究会

主題 男女共学における教材研究

授業 中村 潔 「電気1——水位報知機の製作」

提案 藤村克子 「新教育課程での一試案」

指導講師（大阪教育大学教授） 齋藤 洋

(大阪府科学教育センター指導主事) 渡辺 優

(大阪市立東我孫子中学校) 境 潔

講演 「家庭電気材器の問題点」 (通商産業省工業品検査所技官) 藤田正臣

昭和51年3月31日発行 第18集 研究集録

中村 潔・藤村克子 「技術・家庭科のあゆみ」

昭和56年3月31日発行 第23集 研究集録

中村 潔・藤村克子 「電気1——水位報知機の製作」

§ 3 今後の課題

1 学習指導の面

過去10年間を振り返り、各領域は、ほぼ本校特有のものとして定着してきた。技術系

列では、木材加工、金属加工、機械、電気の領域を学習し、家庭系列では、被服、食物、住居、保育を学習してきた。

しかし、本校では技術系列で、栽培の学習が出来ていない。その理由として、まず、適切な庭園が得られないことである。それは、広さや、作物の生育と環境条件が合わないことがある。だから、環境調節を利用した、温室栽培などもしくににくいのである。次に挙げられることは、栽培をするだけの時間が、確実に、定期的に確保できないことがある。そのため、生育の様子などが、実際に指導しにくいのである。

次の問題としては、家庭系列の食物の学習では、実習が多ければ多い程良いと考えるが、グループ学習の形態をとることで、積極的に参加しようとする生徒とそうでないものとの差や、技術面での指導と評価など難しい問題としてかかえている。

更に、指導面では、色々と問題をかかえている。基本を大事にしたいことから題材もなかなか変えにくくこともあるが、時代の流れにも合わないといけないことから、日々、新しい題材を取り入れようと工夫している。今後の課題として検討中である。

2 男女共修の学習形態の面

昭和55年、昭和56年と2年間、技術系列と家庭系列で実施して見たが、指導者側の学年配置、部屋の規模、材料や工具（食器）の準備物の数、準備・後仕事の時間配分などの問題をかかえた。男女別学より、男女共修の方が望ましい形態であると思うが、現在検討中である。

3 設備その他の面

技術第一教室は、製図、電気などの学習に使っている。最近の生徒の成長ぶりとあわないので、固定された机があわないようである。その為、机の棚が、取れてしまうことが多い。中1から中3までの生徒に合うように、高さが楽に調節出来ればと思って、椅子は、高さの調節出来るものを入れている。十分指導も行っているが、損傷も激しく、苦慮している。

技術第二教室は、木材加工、金属加工、機械などの学習に使っている。機械や、工具類が入っており、部屋の中は狭く感じる。実際、生徒が、板を切ったり、かんながけをする時など、周りに、十分注意をはらい、全員が一齊に作業出来にくい状況であるので、どうしても、作業の進行が予定より遅れる。そのため、放課後に作業をすることが多い。糸のこ盤などの台数も、もっと増やしたいが、部屋の広さから無理である。

被服室は、被服、住居、保育や、高等学校の家庭一般を中心とした部屋である。部屋が、研究室と離れているため、管理がややしにくいきらいがある。更に、間取りが、それぞれの学習に適していないために、準備・後仕事の時間配分に問題を残している。

調理室は、食物を中心とした部屋である。視聴覚機器を備えたい。特に、ビデオ機器の導入が進むと更に充実するものと思われる。

器の導入が進むとさらに充実するものと思われる。

中村 潔
藤村 克子

英 語 科

はじめに

附属中学創立40年、附属高校創立30年を機に、中・高英語科の研究と実践を振り返り記録にとどめるのが本稿の目的であるが、本校創立以来昭和50年までのことは研究集録第18集にまとめられたので、本稿では昭和50年からの過去10年間のことをまとめ今後の参考資料にしたい。本校では各教科が2年に1度教育研究会でそれぞれの教科の研究成果を発表しているので、英語科では2年を単位に研究テーマを設定し、その研究実践を研究発表会の場で発表してきた。従って、本稿でも2年を1つの単位として過去10年を振り返り稿をまとめることにした。

§ 1 本校英語科における中・高一貫教育

中・高6ヶ年一貫教育で、英語科が目標としてきたものを、特にこの10年について記しておきたい。我々が持っている目標は、日々の授業で実践され、2年に1回行われる教育研究会で検討・反省を繰り返している。その詳細はここでは述べられないが、研究会が中学校・高校の英語教育について考える大切な機会になっていて、中学校・高校の英語教育ではそれどれ何が大切か、また全体としてどのような指導が適切かを中・高の教官が一緒に考えている。以下、中学校・高校の英語教育の目指しているものについて簡単に述べたい。

中学校において、生徒達は英語に初めて出合う。当然のことながら、未知である英語について、大きな期待と同時に、不安を抱くものである。そこで、成々指導者は、彼らの不安を少しでも取り除き、英語に対する興味付けをし、学ぶ喜びを与え続けたいと考えている。中学で学ぶ英語は、英語の4領域といわれる「読み」「書き」「聞き」「話す」の基礎となるものであり、特に入門期の指導には、十分な配慮が必要とされている。入門期である中1の1学期には、4領域の中の「聞き」「話す」に重点を置いて授業を試みている。英語のリズムや音声を導入するために、英語の歌、Jazz Chants for Children, Classroom Englishなどを授業に積極的に取り入れている。近年、英語の時間数が削減されつつある中で、英語学習が習慣化していくという現実を踏まえて、テレビ・ラジオの英語講座の利用も積極的に行い、英語学習を習慣化する努力をしている。中1から中3まで、オーラルワークを中心に授業を進めているが、中2の2学期頃から、「読み」「書き」の指導も強化している。中2の後半から、短編の物語を適宜、投げ込み教材として使用している。中3は、中学英語のまとめの時期になるため、総合的な英語力を養成することを目指している。英語劇の指導、表現力を高める指導、これらについては生徒達も大変意欲的に取り組んでおり、良い結果が出ているようである。

高校では中学校の指導を受けて読む力をしっかりと付けることを第1の目標に置いている。そのため当然のことであるが、まず教科書をていねいに読んでいくことを大切にしている。

高校3年間で相当高度なものまで読むことになる。生徒によっては整理された、分かりやすい文法の授業を求める者もいるので適切な参考書を持たせたり紹介することによって授業での文法指導の不足を補っている。また外国語を勉強している以上、当然の要求として話せるようになりたいという希望を持つ生徒も多いが、これに対しては話せるようになるにはまず基本的に読めるようにならなければいけないと考えている。

「読む」ことに重点を置くことでこの10年でも変わらず多読指導が続けられた。昭和57年度より英語ⅡB（多読）が入ったので多少変わったが、1年間に大体、授業・休暇の課題などで副教材を最低2冊は読むことになっている。この結果、生徒の多読の関心が広がったり、読書会のグループなどができるのが願わしいと考えているが、最近10年は、この面では活発であるとは言えず、我々の工夫が必要なところである。

以上、中学校、高校を通じて、「読み」「書き」「聞き」「話す」英語の基礎を身に付け、特に高校では英語が読めるようになることを大きな目標としている。中学、高校のいずれにおいても、英語の学習が本格的、実質的なものでありたいと願い日々実践している。

§ 2 教育研究活動—この10年の歩み

(敬称略)

昭和50・51年度

昭和50年度の英語科の専任教官は、中学校の今倉大・樋口忠彦・渡辺一保と高等学校の田村啓・下長利一・奥啓一・千種基弘・東元邦夫の8名であった。

教科内の研究は、中学校と高等学校がそれぞれ独自の研究テーマを設定して2年を単位に研究実践と発表を行っている。

中学校ではspeakingの指導をテーマに研究が進められ、日頃の授業の中でいろいろな形でのspeakingの指導が試みられた。生徒自身に自分でテーマを選ばせてそれについて自由にspeechをさせたり、教師の方から例えば‘Japan’のような話しやすいテーマを与えて、speechをさせて、発表能力を高める指導が続けられた。昭和51年11月の教育研究会では今倉が関係代名詞の指導を中心に中学3年生の研究授業を行い、渡辺が「speaking指導の問題点」のテーマで研究発表を行った。

高等学校では「英作文の指導」が研究テーマであった。授業での和文英訳の作業のなかで日本文の意味や文の表している状況を正しく把握してから英語になおしてゆく表現指導がなされた。同時に、夏休みなどの長期休暇や定期テストで自由作文を書かせて生徒の表現力の評価がなされた。昭和51年11月の教育研究会では田村が‘S+V+wh-clause’の指導を中心とした研究授業を行い、田村・奥・千種の共同研究「英作文指導の問題点」が奥によって発表された。高校1年で学習される文型の文について1年、2年、3年の全生徒に和文英訳をさせて誤答分析をしたもので、英作文指導上の問題点が明らかにされた。この教育研究会では大阪教育大学教授塙野耕先生に「英語の響き」という演題の講演をいただいた。

教官異動では、昭和51年3月に樋口が奈良高専に転出し、同年4月に中学校非常勤講師として向井剛・フォード・サクオカが着任した。昭和52年3月には下長が大谷女子短期大学に転出した。

昭和52・53年度

昭和52年度から中学校と高等学校が統一テーマで研究実践をすることになり、「読みの指導」が研究テーマになった。

昭和53年11月の教育研究会でこの2年間の研究実践の成果が発表された。今倉がテキストに“Reading for Adults”(Longman)を使って中学3年生で研究授業を行った。かなりの分量の英文を辞書を利用しながら内容に興味を持って読ませることを目標に授業を展開した。テキストは授業の初めに生徒に配られparagraph単位に要旨をつかませる中学の授業としてはかなり高度の多読授業であり、参会者の興味をひいた。高校では千種がアメリカの黒人作家Langston Hughesの詩などを使って精読の研究授業を2年生で行った。辞書指導・英間英答など生徒の活動を中心とした授業を中心とした授業だった。

研究発表は奥・向井が「より深い読みを求めて」のテーマで行った。この研究は文法の観点から読みの深化を試みたものである。ある程度の基礎的な言語知識を生徒に導入してやりさえすれば、後は多読をすることにより読みが深まるという考えがあり文法指導が軽んじられる傾向にあるが、読みの深化のためには言語の諸規則をきちんと教えるべきであるというのが論旨であり、この立場に立って進行形と完了形の文の読解についての調査の結果が発表された。この研究会では奈良教育大学教授佐藤秀志先生に「読む領域の指導をめぐって」という演題で講演をしていただいた。

昭和52年度研究集録(第20集)には向井が「Maloryの作品のWinchester MSとCaxton版との間における言語的比較調査」を、また昭和53年度研究集録(第21集)には同じく向井が「Some Notes on Wynkyn de Worde's Malory [1498]」を発表している。

また、渡辺・向井が「現在完了進行形の一考察」を「英語科教育研究」第一輯(大阪教育大学・大学院英語科教育談話会)に発表した。

教官異動では、昭和52年4月に向井が中学校専任教官となり、高校には井畠公男が着任した。昭和53年3月には、渡辺が福井大学に転出し、同年4月に中学校非常勤講師として高見健一が着任した。

昭和54・55年度

この2年間の研究テーマは「表現力の育成」であった。日常の授業の中でspeakingおよびwritingの指導がいろいろな形でなされ、その成果が昭和55年11月の教育研究会で発表された。

研究授業は高見が中学2年生で受動態の指導を中心に行った。この授業では表現力の指導としてクラスを3つのグループに分けてそれぞれのグループのメンバーが受動態の文を作り順次黒板に書いていてその数を競うsentence-making gameが紹介された。高校では千種がテキストにO. Henryの‘The Cop and the Anthem’を使って多読授業を行った。この授業ではテキストを閉じたまま生徒に内容を発表させたり、テキストの中の単語を使って文章を作らせるmaking-a-short-story practiceという新しい試みが行われた。

研究発表は高橋が「中学生の自由作文に見られる問題点」を発表した。毎年1学期に行っている校内Speech Contestの生徒の原稿が1文1文は正しく書けているのに全体としてのまとまりに欠け理解しにくい文章になっていることに着目し、その原因が新情報と旧情報という観点に乏しいために冠詞や代名詞の使い方に誤りが多いこと、文と文との関係を考えてsentence connectorをうまく使いこなせないこと、全体の構成を考えてパラグラフ

フに分けることができないことがあることを明らかにして、指導の実例を報告した。続いて奥が「高校生の自由作文」を発表した。学校英語は役に立たないという批判があるが決してそうではなく学校で教えている基本的な文法知識などが実用英語に大いに役立っている。このことは読解のみならず表現においても言えることで日本語と英語のもつ言語体系や表現の相違の認識を深めているのである。自国語とは異なる言語で文章を書かせることにより知的好奇心を満足させると同時に英語の表現力を養っている実践が報告された。この研究会では京都大学教授安藤昭一先生の「Japanese Englishをめぐる論争と私の立場」という演題の講演があった。

昭和54年度研究集録（第22集）には千種が「80年代の高等学校英語教育を考える」を、また、昭和55年度研究集録（第23集）には奥が「高校生の自由英作文」を、今倉が「Breaking up of the Family in the US」を発表している。

昭和55年10月に本校を会場として行われた第22回全国国立大学附属学校連盟高等学校部会の教育研究大会で井畠が「英語の読み方」を発表した。英語はその内容を名詞にまとめて表現する傾向が強いことに着目し、この点からの読解指導の実例を報告した。

昭和55年4月に教育大学教科教育講座『英語科教育の理論と展開』（織田稔・小村幹夫編 第一法規）が出版されているが、千種が「新しい高校英語教育像」を、今倉・高見・國方が「英語科教育用語解説」を執筆している。

教官異動では、昭和54年4月に高見が中学校専任教官となり、非常勤講師として J. R. マッケーブルが着任した。昭和55年3月には向井が長崎大学に転出し、同年4月に高橋一幸が中学校専任教官として着任した。

昭和56・57年度

この2年間は、「生徒の積極的授業参加を求めて」を研究テーマとして設定し、学習者中心の英語教育を模索し、実践した。特に生徒の興味・関心を高める指導の工夫を中心に中学生レベルにおけるcuriosity、高校生レベルにおけるinterestの換起を目指し、様々なアプローチが実践された。また、高校では、新教育課程実施に伴い、総合英語としての「英語I」をいかに扱って行くかもあわせて研究され、それらの実践をまとめた形で、昭和57年11月の第30回教育研究会で発表された。

研究授業では、高橋が中学2年で受動態の定着と運用を中心に行なった。Warm-up（歌による发声練習）、Review（様々な形の受動態文のmim-memとwriting）、Reading the new material（新教材の音読・読解）に、Spontaneous language use（ゲーム的要素を加味した受動態を使っての自発的表現活動）を加えた4段階から構成される授業を公開した。高校では、井畠が高校1年で英語Iの授業を行なった。ペアでの対話暗唱発表、tape listeningを中心に、breath groupに区切った音読指導、また、productionとして、topic sentenceに着目させたparagraph summarizationなどが行われた。

研究発表では、高橋・國方・金井3名の共同実践・研究「生徒の興味・関心を高める指導—spontaneous language useを求めて—」を國方が発表した。生徒が楽しみながら意欲的に参加できる学習者主体の授業をめざして、Q&A Game（生徒同志でのゲーム要素を加えたQuestions & Answers）、Sentence-Making Game（昭和57年度教育研究会で高見が発表）、Story Reproduction（絵をcueとして、word→sentence→storyと拡充させて行くブレーンストーミングによる作文指導）、その他、Dialog-Making Game、Story

Production, Newspaper-Making の実践が、生徒作品例と共に発表された。統いて、高校では、千種、井畠、の共同研究「英語 I の扱いについて」を千種が発表した。本校における英語 I の授業の持ち方について、教官の担当の仕方、5 時間中 1 時間を多読指導に当てるここと、また、4 領域の総合指導の各具体的ポイントが提示された。読むことの指導としては、文法としては、5 文型と修飾・被修飾の関係を中心に押え、テキストの理解度の確認は Q & A を通して行うことで全訳を避ける。また、パラグラフ構成の理解や多読指導を通じた直読直解型の授業の必要性を提案。聞き話すことの指導として、テープの活用、暗唱の徹底、Q & A の重視、native speaker による講演会の企画が、また、書くことの指導として、基本文型運用練習、200-word composition, 4-paragraph composition などを発表した。高等学校新教育課程開始の年度でもあり、高校教諭の参会者が例年より目立った。

この研究会では、大阪教育大学教授の織田稔先生より「新しい英語教育の創造に向けて」の講演をいただいた。

昭和56年度には高見が、全国英語教育学会第7回大会で「中・高生における受身文の認識とerrors」を発表し、「英文学研究」（日本英文学会）誌上で「談話における視点と文関係」を発表した。昭和57年度には、高見が、「英語教育ジャーナル」1月号（三省堂）に「学習者中心の英語教育を求めて—表現活動への5つの試みー」を発表し、第二席を受賞した。また、「英語科教育研究」第三輯（大阪教育大学・大学院英語教育談話会）に「Seven Types of 'Ellipsis' in Comparatives」と「中学生の冠詞の習得とerrors」を発表した。

昭和57年度研究集録（第25集）には、高橋が「生徒の興味・関心を高める指導—Spontaneous language useを求めて」を発表した。

教官異動では、昭和57年3月に今倉が東京学芸大学附属中学校付きでパリ日本人学校に、高見が静岡大学に転出した。後任には金井友厚・國方太司が同年4月に着任した。中学校非常勤講師として昭和56年度はM.インゴが、昭和57年度からはG.E.ウォレンスが着任した。

昭和58・59年

この2年間は、「読みの指導」を研究テーマとして、読解力の強化育成を中心に日常の授業の中で様々な工夫、実践が行われた。その成果が昭和59年11月の第32回教育研究会で発表された。

研究授業は、金井が中学3年生で、Kenneth Y. Sagawaの速読教材 'Do You Like American Football?' を使って多読の指導を行った。読解上のポイントとして接触節、関係代名詞節等の後置修飾文を取り上げ、段階的口頭練習を通して定着させ、次に各パラグラフの topic sentence についての Questions & Answers を通じて全体の概要をとらえさせ、その後、各パラグラフについての読解ポイントを示し、内容理解を深めさせる全体から部分への授業が展開された。高校では奥が高校1年で読本 'Youth of the World' より、'Boy-Girl Relationships' という生徒にとっても興味深いテキストを使い、多読指導を行った。この授業でも、「書かれていることの内容を全体としてまとめて読みとる」という指導要領の目標を意識した授業が展開されたが、高校生のレベルに合わせて、辞書も活用せながら、英語らしい表現を幾つか取り上げ解説が加えられた。

研究発表では、國方、金井、高橋の共同研究「Listening Comprehension と Reading

Comprehensionに関する一考察—修飾構造理解の困難点を克服するために—」を國方が発表した。この研究では、中学各学年の生徒を「聴解群」と「読解群」に二分して実験を実施し、学習者が、聴解と読解において、どのようなstrategyを用いて理解するのかを考察することにより、学習者のstrategyで対処できない修飾構造とその困難点（被修飾後が深層構造で目的語となる構文での目的語の認識）を明確にし、今後の授業改善への展望を模索した。続いて東元が、「高校英語の現実と試み」を発表した。この発表では、教育課程改定に伴い中学校から高校に移行した言語材料の中・高での定着率の比較研究をもとに、高校英語におけるrecognition項目とproduction項目の区別の重要性を指摘した。又、後者を定着させるための暗唱指導の実践も併せて報告された。

本研究会では、大阪教育大学外国人教師ジョセフ・P・マカダム先生より「日英比較文化論」の講演をいただいた。

昭和59年度研究集録（第27集）には金井・國方・高橋が「Listening ComprehensionとReading Comprehensionに関する一考察」を、國方が「会話単位・パラグラフ単位の規則・体系一受動態の指導」を発表している。

昭和58年11月に高橋が日本英語教育学会関西支部連続講演会で「学習者が主体的に取り組める授業の工夫」で前述の‘Story Reproduction’を中心に発表し、同学会研究集録（第7集「これからの英語教育のあり方を考える—学習者中心の英語教育—」）に研究を発表した。また國方も昭和59年度の同講演会で「視野の拡大—受動態の指導」を発表し、同時に学会研究集録にも発表している。また同年に、高橋が日本児童英語教育学会関西地区研究大会でビデオによって授業（中学1年「時間の表現」）を公開し、パネルディスカッション「児童英語と中学英語の理解を深める」に参加発表した。昭和58年4月発行の『英語教育フォーラム』（国際言語文化協会・日本英語教育学会）には千種が「高校英作文指導の実際」を発表している。

教官異動では、昭和59年3月に中学校非常勤講師のG.E.ウォレンスが離任し、後任にJ.A.サラスが同年4月に着任した。

昭和60年度

昭和60年度からは、「新指導要領をふまえた授業研究」を大きなテーマとして中・高それぞれに取り組みを始めている。中学では、Total physical responseなどの新しい指導法も盛り込んだ「中学入門期の指導」もあわせて研究している。

昭和61年度の教育研究会に向けて、教科として談話会での個人発表や提案、授業公開と批評会を企画し実行している。一学期には、高橋が中学1年、國方が中学3年、井畠が高校1年の公開授業を行い、後日、批評会を持ち意見交換を行った。又、國方からの問題提起により、「授業におけるLearningとAcquisitionのバランス」について討論を行った。2学期には、談話会を企画し、金井が「アメリカ南部視察報告」を、千種が「Home stay and Study programについて」を発表した。尚、3学期には、金井による授業公開と東元の発表による談話会を行った。中・高英語科では、このような教科内での活動を通じて、昭和61年度研究発表に向けてテーマを絞り込むと同時に、本校の大きなテーマである中・高6ヶ年一貫教育の充実に向けて取り組んでいる。

昭和60年10月に東京学芸大学附属高等学校で行われた第27回全国国立大学附属学校連盟高等学校部会の教育研究大会で本校高校英語科の共同研究「英語入試問題作成をめぐって」

を千種が発表した。本校の入試問題作成の基準としているものを実例と共に説明し、国立大学の附属校は率先して適正な入試問題を作るよう他校への呼び掛けをし大きな反響を得た。

昭和60年度には、國方が「英語科教育研究」第4輯（大阪教育大学・大学院英語教育談話会）で「文法意識の発達—エスペラント語を用いて」を発表した。又、同談話会で、千種が、「中・高生のHome stay programについて」を発表、金井、國方、高橋がビデオによる授業公開を行った。日本児童英語教育学会では、國方が、ビデオによる授業公開（中学3年「接触節の指導」）を行い、パネルディスカッションに参加発表した。

§ 3 本校の英語科教育と生徒の諸活動

英語科では、英語を理解させるだけにとどまらず、実用的英語能力をも高めさせるために、生徒にいろいろな活動の機会を与えていている。

1 中学校英語暗誦大会と校外暗誦大会・弁論大会への参加

中学校では次のような目的で毎年6月末に英語暗誦大会を実施している。

- ・生徒に各学年の能力に応じて、まとまった英語を暗誦したり、英語で自己の考えを表現する機会を与える。（クラス予選では全生徒が発表する。）
- ・生徒間でまとまつた英語を聞き、理解し、評価しあう機会を与える。（各クラスで生徒間の互選、及び教官の推薦で本大会代表者を決定する。）
- ・外人講師の講評を通じて、生きた英語を聞く機会を与える。

各学年の題材としては、中1では基礎英語の対話文のペアによる暗誦や、自己紹介の発表、中2では、教科書等の本文を自己の創作で発展させ暗誦（中3への橋渡しとしての暗誦+創作）、中3では、各自の創作による弁論が主たるものである。大会の司会進行は、英語クラブ部員がすべて英語で行い、審査は、外人講師と教官が行い、3位までを発表している。

この英語暗誦大会の中2、中3の優秀者は、校外の各種暗誦大会や弁論大会に出場させている。中2では、ブール学院英語暗誦大会、大阪女学院英語暗誦大会、大阪府中学校英語教育研究会の英語暗誦大会等に、また、中3では、高松宮杯全国中学生英語弁論大会に出場させている。同弁論大会では過去数度、大阪府代表として全国大会に出場し成果を上げている。

2 実用英語検定テスト受験

毎年3回、日本英語検定協会主催の実用英語技能検定テストが実施されているが、学校行事等に支障のない限り、本校を準会場として受験させている。中1後半から中2前期で4級、中3で3級に全員が合格することを到達目標の1つとして位置付けている。毎回、100名を越える生徒が受験し、ほとんどが合格しており、協会から団体優秀校として、しばしば表彰されている。

従来は、中学生の団体受験が主であったが、今後、英語科として、高校生の団体受験の道を開くことも検討したいと思っている。

3 高校生英作文コンテスト等への参加

全国英語教育研究団体連合会が毎年行っている高校生英作文コンテストに生徒の自由作文を送っている。今まで優秀賞をはじめ佳作に多くの入賞作品を出している。昭和58年度には学校賞をも受けた。

また、大阪府高等学校英語研究会、大阪市姉妹都市協会、帝塚山ライオンズクラブ等の主催する英語弁論大会にも希望生徒を参加させている。この10年間に入賞者のうち3名が副賞として海外に派遣された。

4 海外留学

英語教育の1つの成果として毎年数名の生徒が海外留学を希望する。American Field Service の奨学生試験には殆んど毎年3~4名の生徒が挑戦している。この10年間はほぼ連続して1~4名の生徒が試験に合格してアメリカを初めカナダ、オーストラリア、ニュージーランドに1年間留学し、大きな収穫を得て帰国している。

5 クラブ活動

英語教育の目的が「学習者的人間性を尊重し、コミュニケーション重視」という方向に向かっている現在、教師の側からの研究〔Language Teaching(教授)〕だけでなく、学習者の側からの研究〔Language Learning(学習)〕も必要になるだろうと考えられる。つまり、教師がいかに教えるかだけでなく、学習者をいかに主体的に英語学習に取り組ませるかということが必要になると考えられる。この主体的な英語学習の出発点がクラブ活動にあると言つてよいだろう。クラブ活動とは、英語に興味・関心を持つ生徒により組織され、生徒の個性・意志が尊重され、生徒の持つ創造性が發揮され、生徒が相互に協力し合う集団活動と考えている。このクラブ活動での活動が学習者に生き生きと英語学習に取り組ませる一助になる。

中学校でのクラブ活動では、日常活動においては、全体の活動として、ビデオ教材('On We Go')を使用し、内容についての質疑応答を生徒間で行い、発音・リズム等の指導を教師が行っている。また、ビデオ教材を使って、生徒にロールプレイングをさせ、出来るだけ、発話と動作が合うように練習を繰り返している。個人の活動として、生徒が各自の興味に応じて、タイプライターの練習、絵本作り、OHPを利用した紙芝居作り、海外文通等を行っている。長期休暇中の活動として、空港インタビューを行っている。これは、大阪空港へ行き生徒一人一人が、旅行者に日本の印象等をインタビューしていくものである。この活動で、生徒は、今まで学習してきた英語が通じることに喜び、また色々な英語(インド人の英語、中国人の英語、オーストラリア人の英語等)に驚き、多くの人と友達になれるチャンスを持てる喜んでいる。以上が、1年間の活動内容であり、毎年、2月中旬に、文化クラブ発表会・展示会において1年間の成果を報告し、他の生徒にも英語学習への刺激を与えていた。

高等学校でのクラブ活動では、適当な話題を決めて行う自由討論や、部員がテキストを選ぶ読書会を日常活動として続けている。夏休みなどの長期休暇中には中学のアメリカ人講師を訪問し、簡単な集いを持って英語を話す機会を作っている。年度によっては9月に行われる附高祭に英語劇を上演している。'Hamlet'などShakespeareの作品を取り

上げられている。

§ 4 今後の課題

中学校・高等学校英語科の研究実践のこの10年間の歩みを、本校の教育研究会の記録を中心に振り返ってみた。近年、日本の英語教育のあり方については、様々な議論を呼び、社会的な関心事の1つになっている。今後の英語教育の展望としては、コミュニケーションを重視して、学習活動から、学習者中心の言語活動、自己表現活動へと発展させる授業過程や指導法の研究実践、Hearing, Speaking 指導の一層の重視、また、従来の文法・構文シラバスに加え、Notional-Functionalシラバスの導入等が挙げられよう。

上記のような展望に立った場合、英語教育における音声指導の重要性は言うを待たない。英語科としてもこの点を留意しつつ日常の教科指導にあたっているが、今後更に実践的研究が必要であろう。また、中1入門期から高校卒業までの6年間を見通したHearing, Speaking の基礎的能力の継続的育成を考える場合、現在LL設備のない点は教科として大きな不利である。大学移転ともかかわる問題であるが、その設営は教科指導上最大の急務である。

最後に、揺れ動く英語教育界の中で、我々は、先述の展望を基軸とした統一テーマのもとに、本校の教育研究実践校としての使命を果たすべく、言語学習の本質に根ざした英語教育のあるべき姿を模索しつつ、着実に歩んで行きたい。

井畠 公男
奥 啓一
金井 友厚
國方 太司
高橋 一幸
田村 啓
千種 基弘
東元 邦夫



VI 展望

今日ほど、多くの国民が教育に关心を持ち、教育の現状について深く考え、多様な意見や提言を出すといったことは、過去のどの時期にも無かったことである。このことは、逆に現在の教育自身がそれだけ多くの問題を内包していることになる。このような時に、我が校が、中学創立40周年・高校創立30周年を迎える、また、我が校が青少年のあるべき姿に夢を持ち、その教育に一つの理想をかけて出発した「中・高6ヶ年一貫教育」が30年を迎え、その歩んで来た道を振り返ると共に、将来を展望しようとしていることは、まことに時宜を得たことであると思う。

まずここで、現在大きな社会問題としてクローズアップされて来た、教育の現状とその問題点を、臨時教育審議会の検討内容などの中から拾い出してみると、次のようにまとめられる。

我が国の教育は諸外国と比べて初等中等教育の水準は高く、その結果国民の知的水準は高くなつたが、他方、記憶力中心で、自ら考え判断する能力や創造力の伸長が妨げられ、個性のない同じような型の人間をつくり過ぎていないか。また、制度やその運用の画一性、硬直性による弊害が生じているのではないか。更に、近代科学技術文明の発展の偏った理解から、物質中心主義に陥り、心が不在になり、実証や数量化可能なもののみを偏重し、自然や生命、崇高なものなどへの畏敬の念が欠如して来たために教育が荒廃して来たのではないか。

その結果、臨時教育審議会の考え方の柱として「個性重視の原則」を立て、基礎・基本の重視、創造性・考える力・表現力の育成から教育環境の人間化、生涯学習、国際化などを基本的な考え方として挙げている。更に、これに基づく当面の具体的な改革の提言の一つとして、「六年制中等学校」を提案し、青年期における教育として、6ヶ年を一貫して教育することが、個性を伸長する上で極めて重要であり、生徒の多様性や今後の時代に即応出来る柔軟性を持たせる上からも、このような制度を考える必要のあることを強調している。

この考え方は、我が校が創立以来その教育理念として「個人を育てる教育」、「一人一人を大切にする教育」を根本にすえ、その理念を実現するために30年前の附属高校創設を機に「中・高6ヶ年一貫教育」の方針を打ち立てたことと軌を一にするものであり、予想できなくもない。ここで、最初の「中・高6ヶ年一貫教育の理念」の中で詳しく述べられている、我が校の教育理念と教育目標についての基本的な考え方、及びその特色を要約し、今後の進むべき道を考えてみたい。

「個人を育てる教育」、「一人一人を大切にする教育」という我が校の教育理念は、正に憲法や教育基本法のねらっている精神とも合致し、個人の尊厳をその基本にすえ、個性の伸長を図ることを目的にした教育であると言える。この理念をより有効に実現するため、「6・3・3制」の中の後半の「3・3」の区切りによって生じる不連続と無駄を省き、現行の教育制度を大きく変えることなく、中等教育の前期と後期を結合させて6ヶ年の一貫した教育体制をとることにしたのである。すなわち、この期間を中等教育期間としてとらえ、「一貫した教育目的」のもとで、「合理的に計画された教育内容」によって、

6ヶ年にわたり「継続した教育活動」を行うことにより、一人一人の生徒が互いに人格の陶冶に努め、知育・德育・体育の偏りのない心身共に調和のとれた円満な人間の育成を目指す全人教育の効果を高めることをねらったものである。また、我が校は現在、中学生は500名弱、高校生は550名強の大変こじんまりとした学校であり、教師がそれぞれ生徒全員の顔や名前を知り、その中でお互いの心のつながりが生まれ、指導が行き渡るのにちょうどよい規模であると言える。我が校の教育活動のすべては「手づくりの教育」であり、教師と生徒が一つの目的に向かってじっくりと取り組んでおり、また、「学び方を学ぶ」教育の中で生涯学習の基本を学ばせていくのであるが、このような教育活動は上述した教育環境の中で初めて、その成果を上げることが出来るのではなかろうか。こうして必然的に生まれて来た、我が校の伝統的精神、または校風というべきものを要約すると、

- ① 一人一人を大切にし、個人の特性を伸ばす教育
- ② 科学的（合理性と計画性）で、継続性を持つ教育
- ③ 円満な人格を目指す全人教育
- ④ 自主性と創造性を育てる教育
- ⑤ 理想を追求する意欲的な生活の出来る人間教育
- ⑥ 質実剛健の気風と徹底した訓練をほどこす教育
- ⑦ 自由で明るく伸び伸びとした教育

とまとめられる。これが我が校の教育理念を具体的に実現していくための教育目標の骨格となる基本的な精神であると言える。

以上のような理念とその中で生まれてきた伝統的精神を基に、中・高6ヶ年一貫教育を実践しているが、それを支えている柱としては、次のようなものが挙げられる。

- ① 中・高6ヶ年のカリキュラムの系統性・一貫性
- ② 生活指導の目標の体系化と計画性
- ③ 中・高教官の協力体制の効用
- ④ 施設・設備の合理的共同利用
- ⑤ 教材・教具等の共同利用と研究

このようにして、我が校の教育はゆとりのある、安定した教育環境のもとで、教科活動は勿論のこと、特別活動や学校行事を重視し、基礎・基本を大切にした本質的な学習による真の学力を追求し、豊かな生活体験の中でたくましい体と豊かな心を育てることを重点にし、更に、個人を育て、個性を伸ばすために柔軟な弾力性のある考え方を大切にした、幅の広い教育であり、応答性のある教育ということが出来る。この中で、中学校では企画力・行動力を身に付けさせ、成就感・達成感を味あわせ、それを新しい行動の出発点にさせるように、また、高等学校では自主と自律、自由と責任を大きなテーマとしてじっくりと取り組ませるようにしている。

以上述べてきたことは、教育の根幹となる思想で、我が校の中・高6ヶ年一貫教育の30年間の歩みはこれから教育のあるべき方向の一つでもあるように思われる。附中創立40周年・附高創立30周年を一つの節目として、我が校の求めてきた教育理念の初心にかえり、現状をふまながら、検討を加え、今後の大きな発展の第一歩としたい。

辻 退一（中学校副校長）
櫻井 寛（高等学校副校長）

執筆者一覧

- I. 本校の性格と概要
II. 本校の教育理念
III. 本校の使命と研究
IV. 行事等における中・高一貫教育の実践と課題（○印は中・高の主担当者）
〔文化活動〕 大仲政憲^{*}、中村英治、中村 潔、西田光男、奥 啓一
東元邦夫、西谷 泉、濱谷 巍、平林宏朗、本間俊宏^{*}
和田垣 究
〔保健体育活動〕 成田五穂子、西濱士朗、平田達彦^{*}、井野口弘治^{*}、浦久保寿彦
金藤行雄、楠本久美子
〔合宿訓練・修学旅行〕 國方太司^{*}、場本 功、藤村克子、高木正喬、琢磨昌一
横田稔良^{*}
〔生徒会・自治会〕 岡 博昭、富田健治、中西一彦^{*}、岩城一郎、柴山元彦^{*}
武田和生
〔クラブ活動〕 金井友厚^{*}、高橋一幸、井畠公男、田原悠紀男^{*}
V. 教科における中・高一貫教育の実践と課題（○印は中・高の教科主任）
〔国語科〕 中西一彦^{*}、中村英治^{*}、平田達彦^{*}、金藤行雄、河野文男
琢磨昌一、篠原 修^{*}
〔社会科〕 富田健治^{*}、西田光男、場本 功、岩城一郎、白土芳人^{*}
高木正喬、田原悠紀男
〔数学科〕 乾 東雄、柳本 哲^{*}、越智治躬^{*}、西谷 泉、平林宏朗
本間俊宏、横田稔良
〔理科〕 大仲政憲、岡 博昭^{*}、浅野浅春^{*}、井野口弘治^{*}、柴山元彦^{*}
武田和生、濱谷 巍
〔英語科〕 金井友厚^{*}、國方太司、高橋一幸^{*}、井畠公男、奥 啓一
田村 啓、千種基弘^{*}、東元邦夫
〔音楽科〕 和田垣 究^{*}
〔美術科〕 武田 薫^{*}、長町充家（旧職員）
〔保健体育科〕 風間建夫^{*}、西濱士朗、浦久保寿彦、田中 讓^{*}、楠本久美子
成田五穂子
〔技術家庭科〕 中村 潔^{*}、藤村克子^{*}
VI. 展望 辻 退一（中学校副校長）、櫻井 寛（高等学校副校長）

編集後記

- ◆今回の中・高一貫教育のまとめは、契機としては附中40周年・附高30周年記念事業の一端を担うものであった。時間的に十分な余裕がない中で、労を惜しまず執筆して頂いたことに深く謝意を表したい。まとめるという仕事には、まとめる内容とまとめる力（表現力）とまとめる意欲なり使命感が必要であり、そのいずれを欠いても不十分なものになる訳で、一つ一つの原稿の重みをひしひしと感じながら、心を引き締めて編集の任に当たった所以である。編集上の不備はあっても、紙幅の制限無く、鋭意工夫してまとめて頂いた点からみて、まずは現時点でのまとめの意図は十分に果たされていると思う。
- ◆急ないきさつから、今回は編集委員なり特別委員会なりを設けず、研究部の編集という形になった。内容もいきなり中・高一貫教育のまとめということで、40周年、30周年における総合的な観点からの記念集録ではなかった。このことは、次の周年事業の際の前例にはならないと思う。編集方針や内容、書式に至るまで十分な検討を経、全体的な取り組みの中で記念の集録を編む方がよいと判断するからである。記録、資料等で、今回止むなく割愛されたものなどは次回において補って頂きたい。
- ◆中・高一貫のまとめは、即ち一貫教育の見直しであった。日々の実践が一貫教育に立脚していることは自明のこととして、これを個々の面で明確に位置付けることは極めて難しい。幾十年を経た実践があってもなおかつそうであるから、益々もって我には天下の教育大業のただ中、もしくはその端緒にあるとも言えよう。このときには、然と我々に指針を示しているものは「基本理念」である。幾度も読み返しながら、今更ながらにその理念の素晴らしいに畏敬の念を禁じ得ない。先達に深く感謝するのは勿論、しかもそれに臆することなく、今回のまとめをいわば一里塚として進まねばなるまい。
- ◆本集録刊行に際しては、株式会社柴原出版に多大な御尽力を頂いた。改めて謝意を表する次第である。

昭和61年3月

編集担当 乾 東雄
河野 文男

研究集録 第28集

昭和61年3月25日印刷
昭和61年3月28日発行

編集発行者 大阪教育大学教育学部附属天王寺中学校
大阪教育大学教育学部附属高等学校天王寺校舎
代表者 下 村 異
大阪市天王寺区南河堀町4-88
印刷所 株式会社 柴原出版

